昭和58年10月1日号（毎月2回1日、15日発行）第26巻・第19号　通巻593号　昭和54年6月2日第三種郵便物認可

今日のソ連邦

1983
19
10.1.



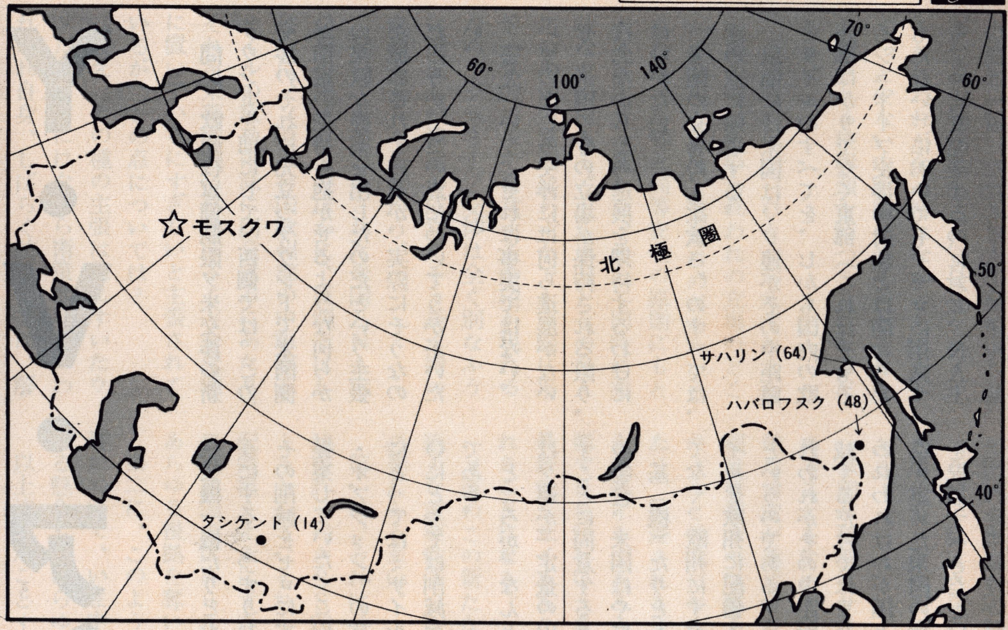
プラウダ紙の質問に対する
Y・V・アンドロポフの回答

特集　創建2000年を迎える
タシケント

第19号　1983年10月1日発行

本誌の記事と写真はノーボスチ通信の提供によるものです。

今日のソ連邦



★数字は関連記事のページ

表紙　タシケントに住む83歳のアブドゥラフマン・マライモフと8歳の孫アンバル（タシケントについては14ページ参照）

編集　在日ソ連大使館広報部　電話03(447)3536(代表)
〒141 東京都品川区東五反田3—9—13
振替口座　東京9—122358（加入者名＝ソ連大使館広報部）

発行所　(株)新時代社　電話03(263)2811
〒101 東京都千代田区西神田2—7—12
振替口座　東京0—13581（加入者名＝新時代社）

本誌の定期購読をご希望の方は、1部半年1800円、1年3000円、2年5000円の誌代（送料込み）を添えて、上記のいずれかにお申し込み下さい。多部数の場合の誌代は、お問い合わせを。

プラウダ紙の質問に対するY・V・アンドロポフの回答

（一九八三年８月27日）

問い　欧州核軍備制限ソ米交渉の新ラウンドを前にして、西側では、この交渉のそれに先立つラウンドで米国側が前進の期待を抱かせるような何らかの柔軟な提案を出したのだという主張が流布されているが、実際にそうなのだろうか。この点についてうかがいたい。

答え　いや、それは事実ではない。いまのところ交渉には何ら進展がないし、米国の今の立場が保持される限り、残念ながらその進展を期待するわけにはいかない。

米国の立場の〝柔軟さ〟のすべては、次の点に帰着する。

以前には米国は、ソ連がその中距離ミサイルのすべてを、しかも国内の欧州部ばかりでなく東部（これはそもそもジュネーブ交渉の対象とは関わりをもたない）においても、ゼロに削減する、つまり廃棄するのに対し、NATO側は一般になにも――ミサイル一基、航空機一機たりとも――廃棄しないようにする、つまりわかりやすく言えばその削減をゼロにするようにしようと提案していた。この点に米国の〝ゼロ・オプション〟の意味があった。ソ連にとってはミサイルをゼロに、NATOにとっては削減をゼロに、というのである。

ところが、なんと今になって、米国はソ連が一定量の中距離ミサイルを残すことに同意するという。しかし、その場合、米国はやはり中距離核手段を一基（機）たりとも削減しないばかりでなく、欧州にすでにある英仏のミサイルを欧州に配備する〝権利〟を得るというのである。言いかえるなら、われわれがその中距離手段を一方的に削減するだけではまだ足らず、その上にわれわれはわが国とその同盟諸国に照準を定めた米国の新型ミサイルの配備を祝福すべきだということになる。

これを柔軟性と呼ぶことは、良識を愚弄してはじめてできることだ。

本当の、建設的な意味での柔軟性について言うなら、交渉の全期間を通じてそれを発揮しているのはソ連であって、決して米国ではない。

ほかならぬソ連が、欧州にとってごまかしではなく本当のゼロ・オプション、すなわち中距離核をも戦術核をも含めたすべての核手段の廃絶を提案したが、米国はこれについては口にすることさえ望んでいない。

このような抜本的な解決に応じるわれわれの用意はあくまでも変わらないが、西側にこのような解決の用意がない以上、われわれはそれほど抜本的ではないが、やはり遠大な別の提案を提起した。それは、いかなる新たな中距離手段も欧州に展開せず、現存するすべての手段を約1/3に削減し、さしあたりソ連とNATO側にこの種の手段を三〇〇基（機）ずつ残すという案である。

西側では、このような案は公正ではない、なぜならソ連は許された三〇〇基（機）の限度内でNATO側より多くのミサイルを保持できるからだ、と主張しているが、この点に関連してわれわれは、削減後、欧州に英仏がもっているのとちょうど同数の中距離核ミサイルを残す用意があることを表明した。これに応じて、双方には中距離核兵器搭載機も同数だけ残ることになるだろう。

そうなると、またしてもいつもの〝奥の手〟に訴える者が出てきた。双方が同数のミサイルをもつことになるならば、ソ連はSS20ミサイルの核弾頭の総数で優位に立つと主張し始めたのである。しかし、この〝奥の手〟も長くは続かなかった。ソ連が送達手段（ミサイルと航空機）もそれらに装着される核弾頭も同数にする取り決めを行うことに同意を表明したからである。

その結果、ソ連は欧州ゾーンに一九七六年以前、つまりNATOに言わせると事の始まりとなったSS20ミサイルをわれわれが全く持たなかった頃よりずっと少ない中距離ミサイルとそれに装着される核弾頭を持つことになるだろう。

というわけで、ひとつおたずねしたいが、いったいわれわれの立場のどこが不公正で受けいれがたいのだろうか？　これは、平等と同等安全の原則にもとづく誠実で一貫した、そして同時に柔軟な立場である。もし米国とそのNATOの同盟諸国にわずかでも実際に平等の基盤の上で合意する希望が現れるなら、ジュネーブ交渉は全く別なふうに進展し、協定の成立をそう長く待つ必要もなくなるだろう。

問い　いま言及された米国とNATO側の逃げ口上のほかに、西側ではしばしば、ソ連は自国欧州部の中距離ミサイルの数の削減に同意するにあたり、それを東部地域に移動することを念頭に置いているにすぎないと主張されているが、この点については？

答え　その種の主張は見えすいたウソだ。ここにはなんら術策はない。われわれ自身、しばらく前にすでに、解体、廃棄を欧州の中距離核軍備の削減の基本的方法とするよう提案した。交渉でわれわれは米国にはっきりと、双方が何をどのように廃棄するか、その条件を決めようではないか、と言った。米国はこれにも応じようとしていない。

今日、私はさらに大きな一歩を進める用意がソ連にあることをお知らせできる。

米国が新型ミサイルの欧州展開をやめることを含めて、相互に受けいれ可能な協定が達成された場合、ソ連は自国欧州部の中距離ミサイルを英仏のミサイルと同数になるまで削減するにあたり、削減される分のミサイルすべてを廃棄するであろう。そうなれば、西側でSS20という名称で知られている最新鋭ミサイルもかなりの量が廃棄されることになる。

ソ連のこの新たな善意の発揮がもつ絶大な重要性は、あらためて強調する必要もあるまい。

第一に、それは、ソ連は実際には削減されるべきSS20ミサイルを温存しようとして、それらを欧州から東部に配置換えするにすぎないという、NATO諸国で広められている主張から、あらゆる根拠を奪い去る。

第二に、このような配置換えの可能性について、いま中国と日本が述べている懸念も、あらゆる根拠を失う。

以上述べたことすべてから、先入見をもたない人なら誰でもはっきりわかるはずだが、交渉で妥結点を見いだし、欧州での核軍拡競争の新たな、しかもきわめて危険な展開を防止するような、相互に受け入れ可能な合意を達成するために、ソ連はできる限りのことをしてきたし、今もしている。

このような合意が達成できるかどうかは、米国に、NATO全体にかかっている。9月6日に始まる交渉の次のラウンドは、この意味で決定的なものとなろう。

ソ連は交渉の全期間を通じて――この点をもう一度強調しておきたいのだが――建設的な柔軟な態度を発揮している。しかし、別のこと――われわれの柔軟性には限度があることも、強調しておく。この限度は、ソビエト国家と同盟諸国の安全の利益から生じているものである。

もし交渉での米国の立場が相変わらず非建設的で一方的なものにとどまり、米国の〝パーシング〟や巡航ミサイルが実際に欧州に配備される事態に立ちいたるなら、われわれは当然、地域的な規模、つまり欧州の規模でも、グローバルな規模でも、力のバランスを維持するためのしかるべき対抗措置をとらざるをえなくなる。この点については、何人であろうと、いささかもあいまいな考えをもってはならない。

問い　欧州の核軍備の問題とからんで中国に言及されたので、これに関連してたずねしたいのだが、核軍備制限問題と軍縮全般の問題での中国の立場は？

答え　中華人民共和国は、周知のように、核戦力をもっており、それはしだいに増大している。いまのところ中国は、核軍備制限・削減交渉に全く参加していない。われわれの理解する限りでは、いま中国の指導者たちは国連とジュネーブ軍縮委員会で審議されている核軍備その他の軍備に関する若干の問題への関心を示しているようだ。この傾向が発展するなら、中国が核戦争の防止や核軍拡競争の停止に関する問題の解決に少なからず貢献できるであろうことは疑いない。

問い　ソ中関係について何かお話しになりたいことは？

答え　われわれはこの20年間のソ中関係の状態は異常だと考えてきたし、今もそう考えている。

最近、両国の関係に若干の前向きの傾向が現れてきた。両国間で特別代表のレベルでの政治協議が行われており、次のラウンドは10月6日に北京で始まる。貿易量が増大し、その他の一連の分野でも接触がしだいに発展している。

しかし両国の関係の現在の水準は、ソ連と中華人民共和国のような大国、しかも隣国の間に当然あるべきだとわれわれが確信しているような水準からは、まだ程遠い。

貿易を一層拡大し、経済・科学技術協力を軌道に乗せる分野で、文化、スポーツその他の交流の部門で、多くのことができる。ソ中国境地域での信頼

ソ連共産党中央委員会における古参党員との会合でのY・V・アンドロポフの演説

（一九八三年8月15日）

8月15日、ソ連共産党中央委員会で党中央委員会指導部とベテラン党員の会合が開かれ、席上Y・V・アンドロポフ・ソ連共産党中央委書記長・ソ連最高会議幹部会議長が次の演説をした。

親愛な同志の皆さん！

この会合での討議はわれわれが期待したとおり、中味が濃く、有益なものだった。それこそ政治局が望んでいたものにほかならない。ここでのいろいろな発言の特徴をまとめると、恐らく次の三つになると思う。

第一に、それは積極性や大きな党的確信である。共産主義的理想の変わることなき価値や党の歩む道の正しさに対する確信、そして、同志の皆さん、われわれが信じ、ソ連国民がめざしているすべてのよいことのために闘い、献身的に闘わなければならないという確信である。つい先ごろわれわれはロシア社会民主労働党第2回大会の80周年を祝ったが、この大会で世界最初の新しい型のプロレタリア党が創立されたのである。ボリシェビキ＝レーニン主義者の党は強大な不敗の力となり、人類史の新しい時代を開き、新しい共産主義的文明の建設を始めるという偉大な世界史的な使命を担った。そしてソ連共産党はこの使命を見事に遂行しているのである！

第二に、われわれの成功も、まだ解決を待っている数々の問題もともに、現実的に、はかりにかけて評価する態度はうれしい。なぜならありのままの事実を見、社会生活の諸現象の複雑さや矛盾性を理解し、すでに達成したことを何ら粉飾したり、過小評価したりしないこと――これが科学的に根拠のある政策に欠かせない前提であるからだ。

そして最後に、ここではっきり鳴り響いた創造的、革新者的な音調を指摘しないわけにはいかない。それというのも、これまでの経験や根を下ろした考え方、習慣や習性に妨げられて、新しいもの、体になじまぬものがなかなか受け入れられないことがあり、しか



ベテラン党員たちとの会合に出席したY・V・アンドロポフ（中央）と左からM・V・ジミャーニン、G・V・ロマノフ、M・S・ゴルバチョフ、I・V・カピトノフ、N・I・ルイシコフ（8月15日）



党中央委員会の会合に出席したベテラン党員たち

醸成措置を共同で作成し実施するならば、それは両国関係の雰囲気の改善を大いに促進するだろう。

世界発展の根本問題、まず第一に平和と国際安全の強化の問題についても、われわれには中国と政治的対話を行う用意がある。

もちろん、われわれと中国の間には若干の重要な国際問題、個々の国家との関係に対するアプローチにおいて、少なからぬ違いがある。しかしわれわれは、ソ中関係が第三国に損失を与えないように築かれなければならないという立場を固く守っている。われわれは中国側にもこのことを期待している。

ソ中関係の健全化は、国際情勢が現在のように先鋭化している条件のもとでは、特別に重要で焦眉のものとなっている。戦争の危険を取り除き平和を強化するという点で、客観的にソ中両国民の利益にくい違いはないと、われわれは確信する。平和が社会主義の理想であることはいまさら言うまでもないが、われわれ両国には大きな長期的経済課題があり、それを成功のうちに解決するためには好適な外的条件が必要である。

このように、ソ中関係の前向きの発展で利益を得るのは両国である。これは国際情勢全体にとっても、疑いもなく利益になるであろう。

もそういうケースはまれではないからである。しかし共産主義者、真の共産主義者はそうではない。彼らにとって生活体験は、眼下に広がる地平線がよく見下ろせる高い頂のようなものである。このような経験は新しいものに対するセンスを鈍化するどころか、かえって鋭くする。このセンスがないと、実生活や発達した社会主義を一層完全なものにする実際活動から出てくる課題を解決することはできない。

だから古参党員や古参労働者の軍団はよいコンディションにあって、いつでも出動できる態勢にあると言える。これはとてもうれしいことである。ほんとうにそうとしか言いようがない。

同志の皆さん！　ベテランたちは党と国民からつねに深い尊敬を受けてきた。この言葉は当初、皆さんもご承知のとおり「古兵」を意味したが、今ソ連では「ベテラン」という概念に新しいヒューマンな意味合いが加わった。戦いで鍛えられた戦士だけでなく、熟練した労働者、農業の働き手、功労ある学者、俳優、教師、医師も含まれるようになり、こうしたあらゆる人々が感謝と謝意を込めてベテランと呼ばれている。これらの人は無尽蔵のエネルギーや高いモラルの資質を持ち、祖国と党に忠実に仕える人々である。

ベテランたちは新生活建設のユニークな経験、つまり人類全体を豊かにした経験の持ち主である。この経験の歴史的広がりは数世代の成果に及んでいる。革命前からの党歴をもつ党員、レーニン親衛隊の不屈の闘士が、ベテランと呼ばれていたのは、そう古いことではないようである。その後初期のソビエト5カ年計画期の突撃隊員や社会主義競争の提唱者たちが、われわれにとってベテランになった。

皆さんの中には、大祖国戦争時代の防衛、敵の壊滅と勇敢な労働に対してわれわれが深く感謝している方々も出席しておられる。

しかし時は矢のように流れ、すでに今ベテランの中にわれわれと同時代の人々、処女地を拓き、世界最大級の数々の水力発電所を建設し、宇宙を征服した人々が加わっている……　このように時を結ぶ繊維が織られており、各世代は共通の大事業の一部をそれぞれ受け持っているのである。共産主義建設の経験そのものだけが、各世代に共通した一つのものであり、分けられないものである。そしてわれわれには、たとえ一つであろうと、その貴いものを失う権利はない。

同志の皆さん、皆さんを中央委員会や中央委員会政治局にお招きしたのは、どうしたらわれわれがベテランの経験を、共産主義の事業のためにもっと合理的に最大限有効に生かすかを、皆さんと相談しあい、一緒に考えようと思ったからにほかならない。しかもこの席で正しく強調されたとおり、現代の具体的課題、多分に新しく、新しいが故に複雑な課題を解決するために、古い数世代の経験をどのように活用するかが問題になっているのである。

同志たちはすでにこれらの課題について語った。私も同じテーマについて二、三述べたい。

皆さんはもちろん、経済建設とイデオロギー活動の要求に応じて第26回党大会の決議を具体化したソ連共産党中央委員会の11月総会（一九八二年）と6月総会（一九八三年）の資料をご存じである。

経済について言うならば、問題の本質は、われわれが国の経済発展の新段階、つまり増大した可能性と増大した社会的要求が、経済活動全体の水準を大きく引き上げ、経済の効率を著しく高め、わが巨大な経済全体をたゆまず動く、よく調整されたメカニズムに変える必要を命じる段階に入ったことにある。このことについては数回の党大会や中央委員会総会でも言われた。

しかし、これまでに行われた仕事をそれなりに評価しながらも、われわれは最近の数回の党大会で提起された課題がまだ決して完遂されていないことを認めないわけにはいかない。なによりもまずわれわれが満足できないのは、集約的発展の軌道への経済の切り替えのテンポが遅れていることである。その原因はいろいろある。恐らくは、われわれが新しい課題の解決の道を十分にエネルギッシュに探求せず、しばしば中途半端な措置をとり、これまでの惰性を十分に急速に克服できなかったことも、理由の一つであろう。

さて、いまはこの手抜かりの埋め合わせをしなければならない。そのためには、そのほかのもろもろのことのほかに、計画化、管理、経済メカニズムを変えなければならない。いわゆる「完全武装で」新5カ年計画にとりかかるためには、われわれはぜひともこのような変革をやらねばならない。

同志の皆さん、もちろんわが国のように大規模で複雑な経済においては、きわめて慎重でなければならない。ここではほかのどこよりも「七度測って、一度切り取れ」〔念には念を入れよ〕ということわざがぴったり当てはまる。だからこそ重大な決定を準備するにあたって、われわれは一つ一つの問題を細部にわたって検討するように努め、提案されている新機軸がどのように作動するか、計画規律や労働規律、労働生産性、社会的生産全体の効率にどう影響するかを、冷静に、急がずに見きわめるために、大がかりな実験を進めているのである。

さて次にイデオロギー活動について述べたい。われわれは総会を開いて、決議を採択した。この先残っているのは肝心なこと――　つまりこの決議を実行することである。ところでこれは実際にはどういうことか？　これは、残念ながらいまだに見られる言行のミゾを乗り越えるということであり、またこれは問題点を避けることなく、真剣、率直に人々と話し合うことを学ぶということである。またこれは一人一人を社会生活の自覚ある、同志の皆さん、必ずや自覚ある参加者にするために、勤労者の政治意識の水準をたえず高め

るということである。

はっきりしているのは、たとえ最もよい、しごく説得力のある言葉を使ったところで、言葉だけではだめだということである。経済活動をイデオロギーで補強するという言い方は正しいが、イデオロギー活動を経済的に、もっと広く言えば社会的に、補強することも、それ以上とは言わないまでも、それに劣らぬ意義をもっている。というのも、あらゆる種類の無秩序、経営乱脈、法律違反、強欲、収賄行為は、何千人もの教宣活動家の活動を台無しにしてしまうからである。

従ってイデオロギー活動の改善を語る場合、われわれは総合的、多角的な課題に直面しているのであって、その課題を解決するにはあらゆる方面での積極的な行動が必要である。これはイデオロギーだけにあてはまる話ではない。一つ一つの大きな課題が、精神的、物質的、組織的ファクターのすべてを考慮に入れた総合的解決を要求しているのである。

規律の問題を例にとろう。社会主義社会にとっては、自覚ある規律が本質的に特有のものであり、そのような規律からりっぱな良心的な仕事が生まれるのである。しかしところによっては規律を強化しようという呼びかけを、作業時間の「始まり」から「終わり」まで各人が職場にいるかどうかをたゆまず行政監督することにほかならないと解釈している。もちろんこういう監督をやり、サボっている者を罰することは必要だが、ほかのことも考えなければならない。各人が作業時間の「始まり」から「終わり」まで職場で何をやり、どのような具体的な仕事量が与えられ、その仕事をどのようにこなしているか、各人の生産労働に必要な条件がつくられているか――　こういった問題について考えなければならないが、これは決定的な問題であるにもかかわらず、すべての職場がこぞってこれに気をくばっているとは決して言えない。

ちなみに社会主義的規律の本質は、各人がその職場で精一杯働くことにある。もちろん、こういう状態を達成することは、門前で遅刻者をつかまえることよりむずかしい。しかし、肝心な、基本的なことは、まさにここにある。

当然ながら、ここでは多くのことが、うまく組織されたイデオロギー活動、政治教育活動に左右される。しかしこの活動は必ず現代的な労働の組織、人員の合理的配置、確実な資材や機器の供給、精神的、物質的刺激の多様な形態と手段の改善に立脚しなければならない。一言でいえば、私が挙げた精神的、物質的、組織的なファクターを組み合わせて初めて、能率のよい労働――　生産の秩序と規律の最も確実な保証が与えられるのである。

私がここでこれらの課題や問題のことを口にしているのは、これらの課題や問題の一つ一つを解決するのに、親愛な同志の皆さん、皆さんの経験と知識を党や国民が必要としているからである。というのも社会的創造や未来への前進には、当然のことながら過去に蓄積された貴重なあらゆるものを守り、豊かにすることが要求されるからである。だから同志の皆さん、皆さんの仕事の戦線は実に広大なのである。

しかしベテランの経験と知識をとくに必要としている仕事の部署が一つある。それは皆さんがとっくにお察しのことと思うが、青年を対象とする活動である。

われわれの社会では世代間や、時々言われるような親子間のあつれきはない。しかしそれだからといって、わが国ではこの面で万事スムーズにいっているわけでは決してない。今の青年が昔の青年よりも悪いとか、よいとか、いろいろな形でつねに青年のことが論議されてきたのは偶然ではない。時には年とった人々が、今の一部の青年のような者は、われわれの時代にはいなかった、とぼやいているし、反面自分たちの気に入らないことをすべて、「父親たち」のせいにしたがっている若い人々もいる。

正直なところ、こうした論議は実り少ない。若い世代の人々はわれわれの世代よりも少しも劣っておらず、ただわれわれとは違う新しい世代なのである。ただし、新しい世代は、複写機でコピーをつくるようには再生産できない。その新しい世代は必ず先の世代の経験に立ち、自分なりに世界を評価し、学びとっており、自分たちの時代の条件と情勢に順応しながら新しい方法と手段を創造的活動にもたらしている。

しかし全般的に言って、同志の皆さん、新しい各世代は先の世代よりもある点では強く、よく物を知り、より遠くを見ている。このことはすべての人に簡単にあてはまるわけではないが、それを認めなければならない。レーニンは「われわれは父親たちよりもよく闘っているが、われわれの子供はもっとよく闘い、**そして勝利するだろう**」と述べた。この言葉を皆さんに言っておきたい。だからわれわれはみな青年を教え、育てるとき、このレーニンの言葉を思い出す必要がある。

しかしほかのことも忘れてはならない。それは、青年は他の年齢の人々と同じく一様ではないということである。現在の若い人々の圧倒的多数は、共産主義建設の積極的参加者であり、父親たちの事業の立派な後継者であり継承者である。しかし、まさしくこのような全体的背景のもとで特に目ざわりに感じられるのが、一部の若者に見られる他人への依存心、労働や社会に対する消極的姿勢、規律のなさという事実である。青年層に浸透しているプチブル根性の危険な菌も、不安の種とならざるをえない。

このような現象やこの気分とは断固闘わなければならない。われわれの後継者には、物質的福祉（それらは時とともに大きくなるはずだし、また実際に大きくなろう）は、人間の上に立つものでなく、人間の最高の要求を満足させることに奉仕するものだという人生観を養うことが必要である。人間の

精神的豊かさだけが、本当に限りのないものなのである。たとえ精神的豊かさは、財布に入れたり、威信を示すために壁に掛けたりできないにしても、われわれはこのような蓄財には賛成であり、それが人間、ソビエト人にふさわしいただ一つの価値である。

若い人々の軍事・愛国教育も常に変わらぬ意義をもっている。これについては皆さんがここで正しく述べられた。

一般に、青年を対象とする活動は必要であり、青年の特徴や、青年がいまおかれている新しい条件を考慮してたえず活動する必要がある。ここで一人一人の古参党員、一人一人の労働のベテランが青年の教師となるべきだというふうに、問題を提起したい。この使命はどのような形で実行し、またどのようにしたらよりよくこの仕事を組織できるかを、党、コムソモール組織はベテランたちと一緒に考えなければならない。

それからもう一つ青年に関係のある意見を述べておきたい。同志の皆さん、青年はわれわれに代わる世代であるという言葉は、月並なようだが、実質的には決して月並ではない。時は若さの味方だし、またそうあるべきである。重要なのはただ、われわれの次の時代を担うのは、何があっても10月革命の旗、レーニンの思想を放棄せず、自分のやるべきことを知りつくしている人々であるという確信をもつことである。

党と国民に対するわれわれベテランのきわめて大きな功績は、彼らが立派な次の代を担う若い世代を育てている点にある。彼らの部署を、すでに緒についた仕事を継承し、時々大きな成果さえもあげて引き継ぐ力のある人々が占めている。ベテランはこのことをただただ誇りにすることができる。これは、わが栄えあるレーニンの党の偉業の継承性を保障する真に党にふさわしいアプローチである。

さてこれまでのことをまとめてみよう。中央委員会政治局は、ここで述べられた、あらゆる分野でのベテランの役割を引き上げ、経済・社会生活におけるベテランの現在の参加形態にもっと切実な内容を盛り込む必要があるという意見に全面的に賛成である。とくに、人格の練磨や性格づくりに関係のある場所では、ベテランは重要な役目を果たすことができる。その場所とは職業技能学校、政治情報システム、壮丁や未成年の中での仕事、居住地での住民に対する活動、人民大学、科学技術創作サークル・グループ、人民監督などなどである。

古参党員の所属党組織での活動の増進に配慮すべきだという意見にも賛成である。「ソ連共産党歴50年」バッジを受けた共産党員が約二二万人いるという数字を皆さんに挙げておくが、この数は大きな力である。そして彼らの党組織との結びつきが、いま往々にして見られるような、党費の納入と党集会への出席だけに限定されることのないようにすることが必要である。とくに一九八三年末から一九八四年初めにかけて開かれる予定の報告・選挙党集会、協議会に、党員の古い世代が活発に参加すれば、すばらしいのだが。

同志の皆さん！ 以上述べたことは、各級ソビエトや労働組合その他の社会団体にも十分当てはまる。多くの国民経済部門、軍の中や各地の多くの党組織に付属して設けている各種のベテラン評議会の活動を活発にし、新しい内容を盛り込むことは有益であろう。

功労に値する正当な休息の生活に入った多くのベテランが、今後も適当な労働活動を続けたいと願っているが、このようなうれしい事実も述べておかないわけにはいかない。このけだかい願望にぜひ「最恵国待遇」を適用すべきである。その場合、各ベテランがやってのけられる好きな仕事が見つかるよう、ベテランの健康や個人の願望に対して、敏感に反応し、配慮し、気づかう態度は、とても大きな役割を果たす。しかし、彼らの労働貢献あるいは彼らの社会活動のどちらにかかわりがあろうと、いずれの場合にもベテランに対しては、先のような態度をとらねばならない。

もっと重要な他の問題も見送りたくない。しかしやはり齢は齢であり、ベテランの引退は通常の生活スタイルの変化を意味する。積極的にやってきた好きな仕事から退くのはなまやさしいことではない。人間の齢とともに病気も待ち伏せている。時々これらから重い心の病いが起こる。どんなに完全な社会でも、こうしたあらゆるものを完全に締め出すことはできない。しかし心の病いも、物質的な困難（もしあればの話だが）も、軽くすることができるし、またそうしなければならない。

このほど10月社会主義大革命と国内戦の参加者に対する個人年金に関する決定が採択された。ここにはもっと全般的な問題もある。財政事情の関係でわれわれの思うようには早くできないだろうが、それらの問題に取り組むつもりである。

しかし同志の皆さん、財政ですべてが片付くわけではなく、もっと多くの心くばり、もっと多くの単純な人間的な懇切さ、思いやり、考慮——こうしたものが必要なのである。そして各党組織あるいは労組組織、各国家機関、各労働集団および各人は、たえずこのことを念頭におかねばならない。

最後に、親愛な同志の皆さん、私は次のことを言っておきたい。この会合はいわばごく内輪の会合だが、私は何百万のベテランとの率直な話し合いの場であったと受け取っている。そして私は、ここで言われたことが、皆さんと同じ人生の道を歩んでこられたすべての人々から、理解され、支持されるものと確信している。

同志の皆さん、会合に積極的に出席して下さったことに深く感謝します。皆さんが言われたあらゆる考えや皆さんから出されたすべての提案は、十分に念を入れて検討されるでしょう。

皆さんと皆さんのご家族のご健康、ご成功、最善を望んでやみません。

Y・V・アンドロポフと米労組活動家の会見



ウィリアム・ウィンピシンガー国際機械工組合会長・AFL・CIO副会長（左端）と会見するY・V・アンドロポフ（8月17日）

8月17日、Y・V・アンドロポフ・ソ連共産党中央委書記長・ソ連最高会議幹部会議長は、全ソ労組中央評議会とソ連重機械工業労組中央委の招きで労組代表団長としてソ連を訪れたウィリアム・ウィンピシンガー国際機械工組合会長・AFL・CIO副会長と会見した。

ウィリアム・ウィンピシンガーは自分の労働組合のメンバーの代表としてY・V・アンドロポフに記念品——米ソ両国を象徴する二つの手を握り合わせた図柄と「友情を込め、地上のすべての人々のための恒久平和を念願して」という文字が刻まれた金属製の飾り板——を贈呈した。

ウィリアム・ウィンピシンガーとY・V・アンドロポフの間で温かい友好的会談が行われた。S・A・シャラエフ全ソ労組中央評議会議長とA・M・アレクサンドロフ・ソ連共産党中央委書記長補佐が、この会談に参加した。

Y・V・アンドロポフは、機械工労組の組合員である米国の労働者の友好的な贈り物に心からの感謝を表明し、これをソ連の人々との友好の発展をめざし、両国間の平和と協力の関係の強化、ひいては全世界の平和の強化をめざす米国の勤労者の意図の表れと見ているむねを強調した。われわれに向かって友好の手が差しのべられるなら、ソ連の人々はつねに心をこめてその手を握るであろう、とY・V・アンドロポフは語った。

Y・V・アンドロポフは次のように指摘した。ソ連ではウィリアム・ウィンピシンガーは、大きな労組の一つの指導者、米国最大の労組連合の副会長としてばかりでなく、平和と諸国民の協力の思想を信奉する社会活動家としても知られ、尊敬されている。

ソ連の人々は両国の労働者間、一般に勤労者の間の緊密な交流をつねに支持してきた。政治的見解がどんなに違っても、働く人々はいつも働く人々であり、彼らには少なからぬ共通の関心事があると、われわれは確信している。

今日、この共通の関心は何よりもまず、平和を守りぬき、新戦争——しかもこれは核ミサイル戦争であって、そ

れがもたらす恐るべき結果は人類にとって完全に想像することすら困難である——の破局を防止するという点にある。

他のすべての国々の何百万の人々と同様にソ連の人々は、いまこの危険の主要な源泉となっているのは、何よりもまず核軍備のとめどもない増強であると考えている。しかもこの増強競争は、悪名高い〝冷戦〟の精神にのっとって行われている無責任な侵略的な政治声明や行動によってあおり立てられている。そして恐らく、それよりもさらに悪いことには、国家間の正常な関係を破壊し、諸国民の間に不信と敵意のタネをまく声明や行動によってあおり立てられている。

ソ連のわれわれは、指導者も、何百万の一般勤労者も、事態の危険な進展を防ぎ、平和を固めることを、自分の最優先の課題と考えている。われわれは国内発展計画を実現し、国民の生活を改善するために、切実に平和を必要としている、とY・V・アンドロポフは強調した。

さらにY・V・アンドロポフは、軍拡競争の抑制、国際緊張の緩和、平和の維持をめざすソ連の数多くの具体的提案を指摘した。

いま欧州の核軍備競争は、国際関係の神経中枢となっている。それは新世界戦争の脅威の急速、急激な増大の源泉となりかねない。

欧州の核軍備競争に終止符を打つような米国との協定の成立をめざして、ソ連は多くの点で交渉相手に歩み寄った。しかし米国政府はソ連の一方的軍縮を要求し続け、NATOの何百というミサイルの前でわれわれが武装を解除することを望んでいる。もちろん、われわれは絶対にこれには応じないだろう。

しかしソ連は今後もジュネーブ交渉において、米国側がいずれはその否定的な態度を改め、誠実な合意への関心を示すであろうことを期待して、建設的な柔軟な方針を堅持していくだろう。米国政府がわれわれのすぐそばの欧州にその新しい核ミサイルを配備し始め、われわれにソ連国民とその同盟諸国民の安全保障のための防衛的な対抗措置に努力を集中することを余儀なくさせるまでは、われわれはこの方針をとり続けるだろう。

われわれは事態のこのような進展を望まず、協定と双方の核兵器庫の削減を望んでいる。われわれは地上においても、宇宙においても、軍拡競争を望まない。軍国主義をのさばらせるなら、新たな死の危険が宇宙から人類を脅かす恐れがある。

最後にY・V・アンドロポフは、ソ米両国の労組の接触に触れて次のように語った。

われわれはこの接触に賛成であり、それを発展させることに賛成である。しかしこれは言うまでもなく同権と相互の尊敬にもとづいた、なんら差別のない接触のことである。だが現在ではAFL・CIO指導部の側からも、米国当局の側からも、接触を妨害するためにあらゆることが行われている。

米国の労組活動家も、勤労大衆も、わがソビエト社会において労組がどんなに大きな役割を演じているか、労組がどんなに大きな、しかもたえず増大していく権利と物質的可能性をもっているかを、もっとよく知っていただけたら結構なことだと思う。

われわれはどうかと言えば、われわれはソ米両国間の関係の全般的改善と平和的な協力に賛成であると同様に、両国勤労者の交流と友好的接触の広範な発展に賛成である。

ウィリアム・ウィンピシンガーは、ソ米関係と平和強化のための闘争の重要問題についてのソ連の見解を詳しく述べてもらったことに対しY・V・アンドロポフに感謝し、軍拡競争の抑止と平和共存の基盤の強化をめざすソ連の努力を高く評価した。米国の勤労者もまた恒久平和と核戦争の脅威の除去を望んでいる、と彼は強調した。両国の労組、全勤労者間の接触の不断の発展と拡大は、相互理解を固め、平和を固める確実な道の一つである。（タス）

Y・V・アンドロポフと米上院議員団との会見



米国の上院議員団と会見するY・V・アンドロポフ（8月18日）

8月18日、Y・V・アンドロポフ・ソ連共産党中央委書記長・ソ連最高会議幹部会議長は、ソ連議員グループの招待でソ連を訪れた米上院議員クレイボーン・ペル、ラッセル・ロング、ポール・サーベインズ、デイル・バンパーズ、パトリク・リーヒ、ジェイムズ・サッサー、ドナルド・リーグル、ハワード・メツェンバウム、デニス・デコンシニとクレムリンで会見した。

会談の中でY・V・アンドロポフは、ソ米関係の現状は実際上すべての分野で緊張している、と述べた。ソ連側の選択によってそうなったわけではない。ソ連は、正常な、安定した、良好な関係を保障し、双方に互恵的で、全般的平和に大きな利益をもたらすようなレベルの協調を米国との間に持ちたいと望んでいる。緊張した状況の中で、〝ルールなきゲーム〟の中で対ソ優位をかちとることをあてこむ者がいるとしたら、それは危険な誤算である。

欧州の核軍備の問題に詳細に触れてY・V・アンドロポフは次のように強調した。ジュネーブ交渉でこの問題の双方に受けいれ可能な解決が見いだされるかどうか、この地域での軍拡競争のきわめて危険な新ラウンドを食いとめることに成功するかどうかに、ソ米関係の今後の方向をも含めた非常に多くのことが左右される。米国のパーシングと巡航ミサイルの欧州配備は、重大な結果をもたらし、その影響は不可避的に米国自身にも及ぶだろう。米国人もまた、配備以前に存在していた状況と配備後の状況との違いを身にしみて感じとるだろう。

欧州核軍備制限ジュネーブ交渉でソ連が出した一連の建設的提案の本質を要約して、Y・V・アンドロポフは次の点を指摘した。もしこれらの提案が実現されたなら、欧州の中距離核手段の総量は、ソ連側においても、NATO側においても、約$\frac{1}{3}$に減るだろう。この場合、NATO側は航空手段のみを削減するのに対して、ソ連側は最新のSS20を含むミサイルをも削減することになろう。その結果、ソ連に残されるミサイルもその弾頭も、一九七六年、つまり西側でソ連がこのカテゴリーの軍備で優位に立っていると誰も言っていなかった時期の数量よりも、ずっと少なくなるだろう。

平等の基盤の上での誠実な合意に米国が関心を示すならば、欧州核軍備制限ジュネーブ交渉を成功させることはまだ可能であることが強調された。しかし、自国の安全の利益を損なう一方的譲歩をソ連に期待することを、われわれは誰にも勧めない。

戦略軍備制限問題の審議にさいしては、上院議員たちに次の点が述べられた。米国政府がいまやっているように、自分には完全なフリーハンドを残しておきながら、相手側がその戦略戦力の基本的コンポーネ

ントを削減するよう説得し、あるいは強制しようと試みるのは、全く非現実的である。この問題の解決もまた、平等の基盤の上でのみ可能である。このような解決の欠如は、戦略軍備の一層の拡充競争と核戦争の脅威の増大を意味するだろう。ソ連はこれに反対である。

ソ米の戦略核軍備〝凍結〟というソ連提案に対しても、上院議員たちの注意が喚起された。Y・V・アンドロポフは次のように述べた。われわれは、現有のミサイルの数を増やさないということだけではなく、新しい型や種類の戦略軍備の開発と実験をやめること、さらに現有の手段の近代化を最大限に制限することをも提案している。われわれはもっと広い案、ソ米両国の核兵器庫のすべてのコンポーネントを凍結するという案にも賛成である。これは他の諸国にとっての手本となるだろう。凍結についての合意は、核軍備のとめどもない拡充競争の危険なプロセスを直ちにおしとどめるだろう。これはすべての国の国民の宿願である。全く違った政治的雰囲気が生まれ、その中では核軍備のストックの削減について合意することがより容易になるだろう。

Y・V・アンドロポフはきわめて重要な問題――軍拡競争が宇宙に波及するという恐るべき現実的な危険性に特に触れた。宇宙そのものの中においても、宇宙から地上に対しても、武力を行使することを全般的に禁止するという、自分がすでに表明した構想を指摘して、Y・V・アンドロポフはこの分野での新たな大きなイニシアチブを述べた。

Y・V・アンドロポフは次のように語った。何よりもまず、ソ連は、地上、空中、宇宙空間の目標を撃破するためのあらゆる宇宙配備兵器の実験と展開の完全禁止について合意を成立させる必要があると考えている。

さらにソ連は衛星迎撃兵器の問題を最も抜本的な形で解決する用意、つまり、すでに存在する衛星迎撃システムの廃絶と新たなシステムの開発の禁止について合意する用意をもっている。

これについての詳細な提案を、ソ連は次の国連総会に提出するだろう。

この提案につけ加えて、ソ連指導部はきわめて重要な決定を採択した。ソ連は、いかなる種類の衛星迎撃兵器をも先に宇宙空間に打ち上げないと約束する。すなわち、米国を含む他の諸国があらゆる種類の衛星迎撃兵器を宇宙に打ち上げるのを差し控えている間はずっと、このような打ち上げに対して一方的なモラトリアムを実施する。

この決定は、ソ連の善意、実際に平和と諸国民の安全を固めようとのその決意の、もう一つの具体的なデモンストレーションである。米国がこの例にならうことを期待したい。

その他の国際問題の審議の過程でソ連側は、諸国の内政への外からの干渉、脅迫、武力行使は許されないと強調した。中東であれ、東南アジア、アフリカその他の場所であれ、現存の緊張と衝突の火花を、平和的な手段で、相互に受けいれ可能な解決の探求を通じて一掃することが、さし迫って必要であると指摘された。

Y・V・アンドロポフは中米においても政治的調整が行われるべきだと断固主張し、この地域の問題の相互に受けいれ可能な解決の探求の助長につとめているラテンアメリカ諸国の努力を肯定的に評価した。ニカラグアとキューバの建設的提案、これら両国が打ち出した調整の原則を、ソ連は完全に支持するむねが表明された。これらの原則は、どの国の利益あるいは威信をも損なうことなく、合意のための良好な基盤をつくり出すものである。中米諸国民の利益、国際安全の広範な利益は、この地域の情勢が拾収のつかぬものにならないよう全力を傾注することを切実に要求している、とY・V・アンドロポフは語った。

会談の過程でソ連共産党中央委書記長は米上院議員たちに対し、ソ連共産党の指導のもとにソ連国民が展開した経済・社会建設計画を実現するための大きな仕事について語った。

最後にY・V・アンドロポフは次のように強調した。対外政策の分野でソ連が主要目的としているのは、平和と国際安全の強化であり、何よりもまず核戦争の脅威を取り除くことを通じて諸国民に平穏な生活を保障することである。この面でソ連は今後ともねばり強く一貫して、米国を含むすべての国との実り多い互恵協力、相互交流に応じる用意を表明しながら、行動していくだろう。

Y・V・アンドロポフは、諸国民の相互理解と平和を固める重要な要素としての議員の接触のさまざまな形態の広範な発展に賛意を表明し、米上院議員団のソ連滞在がソ連人の生活と思考の様式をよりよく理解し、感じとる助けとなることを望むと述べた。

ソ米関係の基本的諸問題と国際問題に対するソ連の立場が深く率直に述べられたことに感謝して、米上院議員たちは、ソ米関係を改善し、核戦争発生の危険を取り除くような解決を見いだしたいとの意向を表明した。彼らは相互理解を増進し相互の信頼を固めるためのさまざまなレベルでの意見交換が有益である点を指摘した。上院議員たちは一連の具体的な国際問題について自己の見解を述べた。

会談にはV・P・ルーベン・ソ連最高会議民族会議議長、G・M・コルニエンコ・ソ連第一外務次官、A・M・アレクサンドロフ・ソ連共産党中央委書記長補佐、W・ジンマーマン・駐ソ米国臨時代理大使が参加した。（タス）

ソ連政府声明

（一九八三年9月6日）

本年9月2日にソ連政府から権限を与えられて公表されたタス声明の中ですでに報道されたように、航空機によるソ連国境の乱暴な侵犯が行われた。この航空機は8月31日から9月1日にかけての夜にカムチャツカ半島上空でソ連領空に侵入し、その後2時間にわたってオホーツク海上空およびサハリン島上空を飛行した。サハリン島の空港の一つに同機を強制着陸させるため、地上および空中の防空手段によってとられた措置についても、上記声明で述べられていた。その後の調査は、これまで挙げられたデータを確認し、それらを補足した。

侵犯機は、カムチャツカのソ連戦略核戦力のきわめて重要な基地がある地区の上空で、領空に侵入した。同じ時間に――いまでは米国側も認めているように――同じ地区のソ連国境付近の同じ高度に、侵犯機に似た別の一機――米空軍のRC135偵察機がいた。ソ連の迎撃機数機が発進した。その一機は米国のRC135の行動を監視した。別の一機は侵犯機の所在地区に出て、信号によってソ連領空に侵入したむねを伝えた。警告は無視された。

サハリン島の近くで侵犯機は再び防空戦闘機（複数）に捕捉された。ここでも一二一・五メガヘルツの国際緊急周波数での一般呼出しの周知の信号をも含めて、侵犯機との交信が試みられた。米国大統領の偽りの主張に反して、ソ連の防空戦闘機は、この周波数が固定された通信手段を装備している。従って侵犯機はこれらの信号を受信したはずである。しかし同機はこれに応答しなかった。これまですでに指摘されてきたように、同機はソ連戦闘機（複数）のその他の信号や行動にも応答しなかった。

ソ連の無線管制施設は周期的に発信される短い暗号無線信号を捕捉したが、これは通常、偵察情報の送信のさいに用いられるものである。

地区防空軍司令部は、侵犯機の行動、サハリン地区においても軍事基地（複数）の上空を通過したその針路を綿密に分析したのち、ソ連領空にあるのは特殊任務を遂行中の偵察機であるとの結論に最終的に到達した。この航空機がソ連の戦略的に重要な諸地区を通る針路をとっていたという事情も、われわれをこの結論に導くものである。戦闘機（単数）は侵犯機の針路に沿って曳光弾による警告射撃を行った。この措置もまた国際規則によって定められている。

その後も侵犯機は、ソ連空港に向かうようにという要求に従わず、逃げようとしたため、防空軍の迎撃機（単数）は司令所の飛行阻止命令を遂行した。こうした行動は、公表されているソ連国境法に完全に従ったものである。

ソ連飛行士たちは、侵犯機の行動を阻止する際、それが民間航空機であることを知り得なかった。同機は航法灯をつけずに、夜闇の中を視程不良の条件下で飛んでおり、発信された信号に答えなかった。ソ連飛行士たちはそれが民間航空機であることを承知していたという米大統領の主張は、全く事実に合わない。

ソ連領空を何十もの国際航空路が通っている。そこを長年の間外国の航空機が飛んでおり、定められた規則を守っている限り、それらの航空機には何事も起こっていない。

われわれは、国際的規範に完全に合致しているわれわれの法律に、今後も従って行動していく。われわれの国境線の安全保障の問題についても全く同じことがいえる。領空も含めて自国の国境を守ることは、各国の主権的権利である。それは、国家間関係の依って立つ国際法の一般に認められている規範の一つである。米大統領は、9月5日の演説の中で、ソ連は空の国境を〝かってに宣言している〟というように言明することにより、無知な人間であることを自認している。

しかし、言うまでもなく、ここで問題なのは、米国のあれこれの当局者の無知ではない。ソ連にとって戦略的重要性をもつ地域における意図的な、あらかじめ計画された行動が問題なのだ。この行動の組織者たちは、それがすべてどんな結果に終わるか、わからないはずはなかったのに、いま明らかになっているように、民間機を使って、乗客を意識的に死の危険にさらして大がかりな偵察作戦の実行に踏み切ったのだ。

後に明らかになったように、スパイ任務の遂行のため航空機をソ連の領空へと導いたデータがどうして航空機のコンピューターにインプットされたのか〝誰にも決してわからないであろう〟とレーガンは声明したが、この声明以上に破廉恥なものが想像できるであろうか。これは技術上のミスではない。前述の偵察作戦は妨げられることなく実施できるであろう、もしそれが阻止された場合には、それをソ連に対する大規模な政治的挑発に変えよう、という計算が働いていたのである。

この結論は、その後の米政府のすべての行動によって確認されている。米国大統領個人を含めて米国の指導者たちは、きわめて短い期間のうちに、明らかにあらかじめ準備された反ソ・キャンペーンを繰り広げた。その本質は、ソ連とその社会制度を中傷し、ソ連の人々に対する憎悪の感情を煽り、ソ連の対外政策の目的をゆがめた形で描き、その平和的なイニシアチブから注意をそらそうと試みた9月5日のレーガン大統領のTV演説に、最も凝縮された形で明らかにされた。

緊張と反ソ・ヒステリーの煽り立ての状況の中で米国の指導者たちは、諸国民の運命に関わる重要な国際問題の解決を回避したいと望んでいる。そして、この挑発の時期も、偶然に選ばれたものではない。軍拡競争が停止されるか、核戦争の脅威が排除されるか、それともこの脅威が増大するのかという問題に解答が与えられようとしているまさにいま、これが行われたのである。米国大統領のこの演説を含めたあらゆることから判断して、米政府は、ソ連との対決を一層激化させる道を進むことを意図している。レーガンの信条は、彼自身が表明したように、〝力にもとづく平和〟なのである。

このような政策を〝道徳の規範〟〝人道主義の精神〟〝人命の価値〟といった駄弁でごまかそうと試みても、無益である。インドシナで最も残酷な形で幾百万の人々の生命を奪い、イスラエルの侵略者たちと結託してレバノン人とパレスチナ人を殺し、チリとエルサルバドルの数万人の愛国者の生命がその良心にのしかかっている国の国政担当者たちは、どんな道徳について、どんな人間性について語ることができるのか。米帝国主義の犯罪リストは膨大で、もっと続けることができる。

米国の特務機関がそのきたない目的のために利用した航空機に乗っていた人々が、新たな犯罪の犠牲になった。

ソ連政府は、何の罪もない人々の犠牲に関連して遺憾の意を表明し、その近親者たちと悲しみをともにするものである。生じた悲劇に対する全責任は、完全に米国の指導者たちにある。

創建2000年を迎えるタシケント

——ラシドフ・ウズベキスタン共産党中央委第一書記に聞く

カメラ V・タラセビチ A・ワルフォロメーエフ A・フルポフ

地震のあと市の中心に作られた勝利の広場





都市は人間に似ている、というのは的を得た言葉だ。それぞれの都市は独自の外貌、独自の性格、独自の運命を持っているからだ。

ソ連中央アジアの共和国の一つ、ウズベク共和国（ウズベキスタン）の首都タシケントは今年、創建二〇〇〇年を迎える。

この都市が注目に値するのは、単に歴史が古いからというだけではない。タシケントは産業、文化、政治の大中心地として、現代ソ連で重要な役割を果たしており、その名は遠く外国にも知られている。タシケントとタシケント市民について、本誌記者ボリス・アレクセーエフ、エリナル・ホジャエフとソ連共産党中央委員会政治局員候補、ウズベキスタン共産党中央委員会第一書記シャラフ・ラシドフ（写真）の対談でご紹介しよう。

まちは若さにあふれている



――タシケントは創建二〇〇〇年を祝う準備をしているが、二〇〇〇年という確かな証拠は？

タシケントについての記述は、紀元前1世紀の聖典集や、それに劣らず古い東方の年代記に見られる。タシケントの歴史を明らかにするために、考古学者が多大の研究を行った。3年まえ市域で一連の重要な文化遺跡が発見され、研究に一応の終止符が打たれた。最新の方法を使ってこれらの遺跡を研究した結果、タシケントの歴史は二〇〇〇年よりも長いことが証明された。すでに当時、いまの市域に一連の小さな集落と、約50の宮殿があった。それらはすべて、強固な城壁で囲まれていた。

もっとも、ある学者は、タシケントの歴史はもっと古いと考えている。これらの学者は昔の王侯や英雄たちの生活や戦いについての伝説や言い伝えにもとづいて、市の誕生を二五〇〇年から三〇〇〇年まえだと主張している。

私自身は、伝説や神話よりも科学的なデータの方を信用したい。

――その間タシケントはどんな役割を果たして来たか？

あらゆることから判断すると、タシケントはありふれた東洋の都市だった。タシケントが政治、経済、文化の一大中心地になったのは、ようやくソビエト政権の時代になってからだ。

現在のタシケントは共和国最大の工業中心地で、ウズベキスタンの工業総生産高の1／4を生産している。いちばん発達しているのは機械工業で、飛行機、エクスカベーター、変圧器、電気クレーン、トラクターや自動車の部品、綿花の収穫や加工のためのありとあらゆる機械が作られている。さらにタシケントは日用品の最大の生産地でもある。

これらの製品はソ連国内はもとより、欧州、アジア、アフリカ、ラテンアメリカの多くの国に輸出されている。

タシケント空港は発着機数が多いことでわが国屈指の国際空港である。ここからは東洋の多くの国へ飛行機が飛び立っている。

タシケントはソ連中央アジア最大の科学、文化の中心地でもある。実質的には市民の5人に1人が学んでいる。タシケントには普通教育学校が三二一、職業技術学校が20、大学が19あり、その中には総合大学、工科大学、医科大学が1校ずつ含まれる。また32の大規模な研究機関を統合するウズベク共和国科学アカデミーもここにある。

市には劇場が9、クラブが一六五、映画館が一二二、スタジアムが6、映画撮影所が2あり、東部地域最大のテレビスタジオもある。

――市は非常に現代的になったが、50年まえはどうだったか？

狭い、ほこりっぽい通り、入り組んだ袋小路、泥の塀をめぐらした、窓のない灰色の平屋の家――これが封建時代から革命までつづいた市の姿だった。

――ソビエト政権になってからの市の歩みは？

市を発展させるための確固たる方針が取られた。一九二〇年にはソビエト国家の創設者レーニンが署名した、タシケントに国立総合大学を設置する法令が採択された。中央アジアではどこでもそうだったが、タシケントには当時、高等教育機関は一つもなく、住民の圧倒的多数は文盲だった。

ついでながら、タシケント総合大学からはのちに一連の大学が分かれて独立した。

同時に、市には普通教育学校、職業技術学校、中等専門学校、病院、診療所も建設され始めた。工業企業や工場も作られ、第2次世界大戦までの数次の5カ年計画でタシケントには機械工業、軽工業が発達した。快適な住宅も建設された。

要するに、タシケントはすでに当時、見ちがえるほどの変貌を遂げ、活気にあふれる、創造的、建設的な生活を始めていた。

――タシケントではベールで顔を隠している女性は見あたらないが……

私はソビエト政権の最大の成果は、中央アジアにおける女性の解放だと考えている。ほんの60年ほどまえまで、この地域の女性は家の奥の狭い世界に閉じ込められ、社会生活から隔絶され、夫の完全な私有物だと見なされていた。

いまは時代がちがう。タシケントでは、国民経済にたずさわる者のほぼ半分が女性である。女性の企業長、技師、党活動家、社会活動家も珍しくない。女性の博士、博士候補、教授、助教授、文学者、芸術家、医師、教育家も大勢いる。

――周知のように、タシケントは第2次大戦で被害を受けなかった。逆にファシスト軍に一時的に占領された地域からの避難民の安住地となった……

その通りだ。タシケントは後方深くにあったのでファシスト軍の爆撃に遇わなかった、という意味では被害を受けなかった。だが、市はソ連邦に加わった時点から全国民と一心同体だった。数万のタシケント市民が赤軍に志願して、敵との死闘に参加した。数万の市民が市内の工場で1日に10時間以上も、しばしば休日も返上して軍需品の生産に励んだ。

避難民を受け入れ、特に孤児に対して市民は非常な配慮をした。戦争の期間中、二〇万人以上がウズベキスタンへ疎開して来たが、これらの人々はみな住むところや食べ物を支給されただけでなく、心から温かく迎えられた。多民族国家ソ連の諸民族友好の見事な例と言えよう。

諸民族友好の精神は、六〇年代にタシケントを破壊した大災害の後始末の過程でも発揮された。

――一九六六年の地震のことか？

そうだ。全ソ連国民が即座にタシケント救援の呼びかけに応えてくれた。市の復興にはモスクワ、レニングラードをはじめ、ロシア連邦、ウクライナ、ベロルシア、カザフスタン、モルダビア、リトワ、ラトビア、エストニア、グルジア、アゼルバイジャン、アルメニア、タジキスタン、キルギス、トルクメンの諸都市の建設者が参加した。短期間で市は復興を遂げた――というよりも、新たに生まれ変わった。

現代的な住宅街、行政、文化、学術機関のユニークな建物、堂々たる建築アンサンブル、公園、辻公園、見事な地下鉄――これが今日のタシケントである。

――統計によれば、タシケントの人口は現在約二〇〇万。一〇〇以上の民族の出身者が住んでいる。このような多民族性は市の生活にどのように反映されているか？

われわれはみな仲のよい一つの家族だと言える。

そもそもこれは社会主義体制には固有のことであって、社会主義のもとでは、人間は民族や皮膚の色、社会的地位にかかわりなく、みな友人である。

われわれはタシケントがわが国においても、外国のたくさんの友人のあいだにおいても、よき名声をかちとったことを誇りにしている。タシケントが人類史に残るような、科学と文化の歴史に残るような国際的な多くの会合の場所になって来たのも偶然ではない。たとえば今年の秋、第7回アジア・アフリカ作家会議が開かれる。この第1回会議は一九五三年に、やはりタシケントで、40カ国の作家が集まって開かれた。昨年、アジア、アフリカ、ラテンアメリカの約一〇〇カ国から映画人が集まって開かれたタシケント国際映画祭も伝統の行事となった。

――市の将来は？

タシケントは若返りつづけている。近年だけでも民族友好宮殿、高さ三七五mのラジオ・テレビ塔、ホテル〝モスクワ〟、地下鉄の第2期工事などのユニークな建造物が建設された。

第11次5カ年計画末（一九八五年）までに、タシケントではさらに約一九万フラットの住宅、多くの文化施設や生活施設が建設され、巨大な映画会館が完成し、地下鉄の新区間が開通する。

今世紀末までに、タシケントはさらに表情豊かな、独特の顔を持つ公園都市になるだろうと確信している。

お祭りのアトラクションの開始を告げる楽士たち





市のコンサートホールで

ウズベク人の民族的な帽子――チュベチェイカ



有名なタシケントの噴水





タシケント芸術宮殿

民族友好博物館



浮き彫りの名人



チャイハナ（茶店）の玄関の浮き彫り。これもマフムド・ウスマノフの作品。



アリシェル・ナボイ記念タシケント・オペラ・バレエ劇場の建物

第2次世界大戦後建設されたアリシェル・ナボイ記念タシケント・オペラ・バレエ劇場は、建物が美しいことで知られている。特に美しいのは、雪花石膏でできた正面の浮き彫り。

劇場の仕上げには、ウズベク共和国人民美術家で最高の石膏彫り師マフムド・ウスマノフ（79歳）も参加した。

ウスマノフの家の中は、まるで民族学博物館のようだ。すべてがウズベキスタンの伝統にしたがって作られている。特に念が入っているのは、雪花石膏の浮き彫りの板と色塗りの絵を交互にはめ込んだ壁である。

「これは私の息子ミルワヒドの作品です」とウスマノフは自慢そうに言った。「私たち一家は代々、雪花石膏の彫刻をやって来ました。壁の真ん中の浮き彫りは、私の父ウスマン・イクラモフがデザインしたもので、そのほかは全部、私が考えたものです」

壁の浮き彫りになるまでに、雪花石膏は複雑な工程を経る。まず、極めて細かい粉に砕いてから、焼いて、不純物をていねいに取り除く。これに水と植物性のニカワを加えて練る。石膏がよくつくように、壁に刻み目を入れる。真っ白の石膏の層の上に、青か金色の層を上塗りすることもある。

次が特に重要な工程で、第3の層を上塗りする。この層に模様が彫られるのである。この層が固すぎると、模様の角が細かく欠けて、ざらざらになり、美しく仕上がらない。層が水っぽすぎると、壁にくっつかない。この第3の層は、一度に壁面全体に塗らず、石膏がまだ温かいうちに彫刻が施せるよう、少しずつ塗る。

作業を始めるまえに、1平方mぐらいの大きさのワットマン紙に模様を描いておく。次に細い特別な針で線のとおりに穴をあけ、穴のあいた紙を石膏を塗った壁にそっと当てて、木灰を包んだ布で軽くたたく。灰が穴をとおって壁につき、黒い模様が描かれる。

こうしてから彫る作業に取りかかるのだが、彫るにはカッター、ノミ、特別のナイフなど、18種類もの道具が要る。まずカッターで輪郭を切り、それを第1の層まで彫り取る。こうして美しい模様ができ上がる。

マフムド・ウスマノフは言う──「いまでは劇場だけでなく、商店や地下鉄の駅にもこの彫刻が施されています。結構なことです。私たちが若かったころ、国はまだ貧しく、石膏彫りは高価だったので、注文はめったにありませんでした。それでも私は信じていました。ときが来れば、大勢の名人が必要になる、と。そのとおりになりましたよ」

タシケントの結婚式

本誌記者 ガニ・カリモフ

タシケントの結婚式の特色は派手なこと、大きな宴会のテーブルと大勢の人が集まることで、結婚式は現在まで数々の伝統的面影を残している。

……アリモフ家の広々とした庭内には人がごったがえしている。長いテーブルには二〇〇人を下らない客人たち──親類、職場の同僚、知人、隣近所の人々。金らんのガウンをはおり、頭には刺しゅう入りのウズベク帽（チュベチェイカ）をかぶった花婿と白無垢姿の花嫁が客人の方を向いてセンター・テーブルに座っている。その前には色鮮やかな盛り花が活けられ、新郎新婦の両隣には友人たち。

客人たちは新婚カップルを祝福し、お祝いの乾杯を重ねる。乾杯のあいさつは2人の幸せを願うものあり、教訓あり、愉快なユーモアたっぷりのものありで、新郎新婦は立ったままスピーチを拝聴する。

人々はシャンパンを飲む。次から次と料理が出される── サムサ（ひき肉とネギのパイ）、シュルパ（羊肉のスープ）、シャシリク（串焼き羊肉）、ピラフ、ケーキ。結婚披露宴は夜遅くまでつづく。バンドはひっきりなしに演奏し、特別に招かれたダンサーの踊りがくり広げられ、招待客同士も踊る……

結婚式の準備は昔と同じように親たちが引き受ける。

予定された日に花婿と花嫁は両親や友人につき添われ、真紅のテープで飾られた車に乗って、戸籍登録所に行く。

結婚のお祝いはタシケントでは3日にわたってくり広げられる。第1日目は近い親類と生活経験豊かな年長者が花婿の家に集まり、結婚会議が開かれる。ごちそうを食べながら、朝のピラフの会食会には何人呼ぼうか、それには米と肉がどれほど必要か、どうやってもてなすか、などが決められる。親類の間でそれぞれの役割── ピラフを給仕する人、焼きたてのパンを運ぶ人、お茶を出す人、その他が決まる。

朝のピラフの会には、招待客はとても早くからやって来る。ピラフは大きなお釜で、有名な料理人（絶対男性でなければならぬ）が炊く。

三、四百人の客を迎えるためのテーブルや椅子、食器類が一軒の家にそろっているわけはない。隣人たちが助け合うのだ。

結婚の宴が最高潮になるのは3日目。それは新郎と新婦の家の2カ所で行われる。3日目の最高に厳粛な瞬間は花嫁が花婿の家に到着する時。

宴もたけなわになると、新婚夫婦に贈られたお祝いの品の数々が披露される。贈り物は山ほどある。その中には新婚夫婦が快適な共同生活をはじめるための品物が全部そろっている。

これが典型的なウズベクの結婚式だ。だが首都タシケントには何十もの民族が住んでいる。統計によればタシケントの5組に1組の結婚は民族間結婚だ。異民族同士の結婚だと結婚式はどうなるのか？ この場合は両民族の風習・伝統、衣装・料理の絶妙の組み合わせが見られる。披露宴はしばしばレストランで行われる。

民族舞踊家タマラ・ユヌソワ

ウズベク共和国人民芸術家で舞踊家のタマラ・ユヌソワの人気は非常に高く、切符はたちまち売り切れてしまう。タマラ自身はこの人気を、観衆が古くからの民族舞踊に寄せる熱烈な関心のせいだと考えている。タマラはいま50歳だが、そのうちの44年を舞踊に捧げて来た。

タマラに踊りを教えたのは、やはり有名な舞踊家だった母親である。母親は第2次世界大戦のとき死に、父親も前線で死んだ。タマラは孤児院で育てられ、やがてタシケントの舞踊学校に入った。

17歳のときタマラは優秀な成績で舞踊学校を卒業し、アンサンブル〝バホール〟（春）に入った。この舞踊集団は今日、世界的にも有名で、2年まえに日本でも公演したことがある。

タマラはずっと以前に〝バホール〟とは別れているが、このアンサンブルで過ごした時期を回想してこう語っている──「〝バホール〟は若者の集団です。ここでは若い人が踊るべきです。アンサンブルにとって、私の時代は終わりました。でも、踊りそのものにとっては、まだ私の時代は終わっていません。だから私は定期的に、東方の諸民族の踊りで構成する新しいプログラムを創作しています」



結婚登録を終えた新郎新婦

結婚披露宴のカップル





披露宴もいよいよ佳境に。



ウズベク民族舞踊の最高の踊り手タマラ・ユヌソワ（21ページ参照）

大地震と復興

本誌記者　フォードル・オベチキン







一九六六年4月26日午前5時23分、震度8（ソ連の12階級震度階による）の地震が眠っていたタシケント市民を襲った。震央は市の中心部で、震源の深さは3―5kmであった。一瞬の間に市内の住宅総面積の1/3―二〇〇万平方m以上（居住面積）、約九万五〇〇〇戸が破壊または損傷の被害を受けた。七万八〇〇〇世帯が住む家を失い、二二〇の児童施設、一八〇校以上の学校が破壊された。タシケントはこのさき長年にわたって廃虚の中に横たわる運命に見舞われたかのようだった。

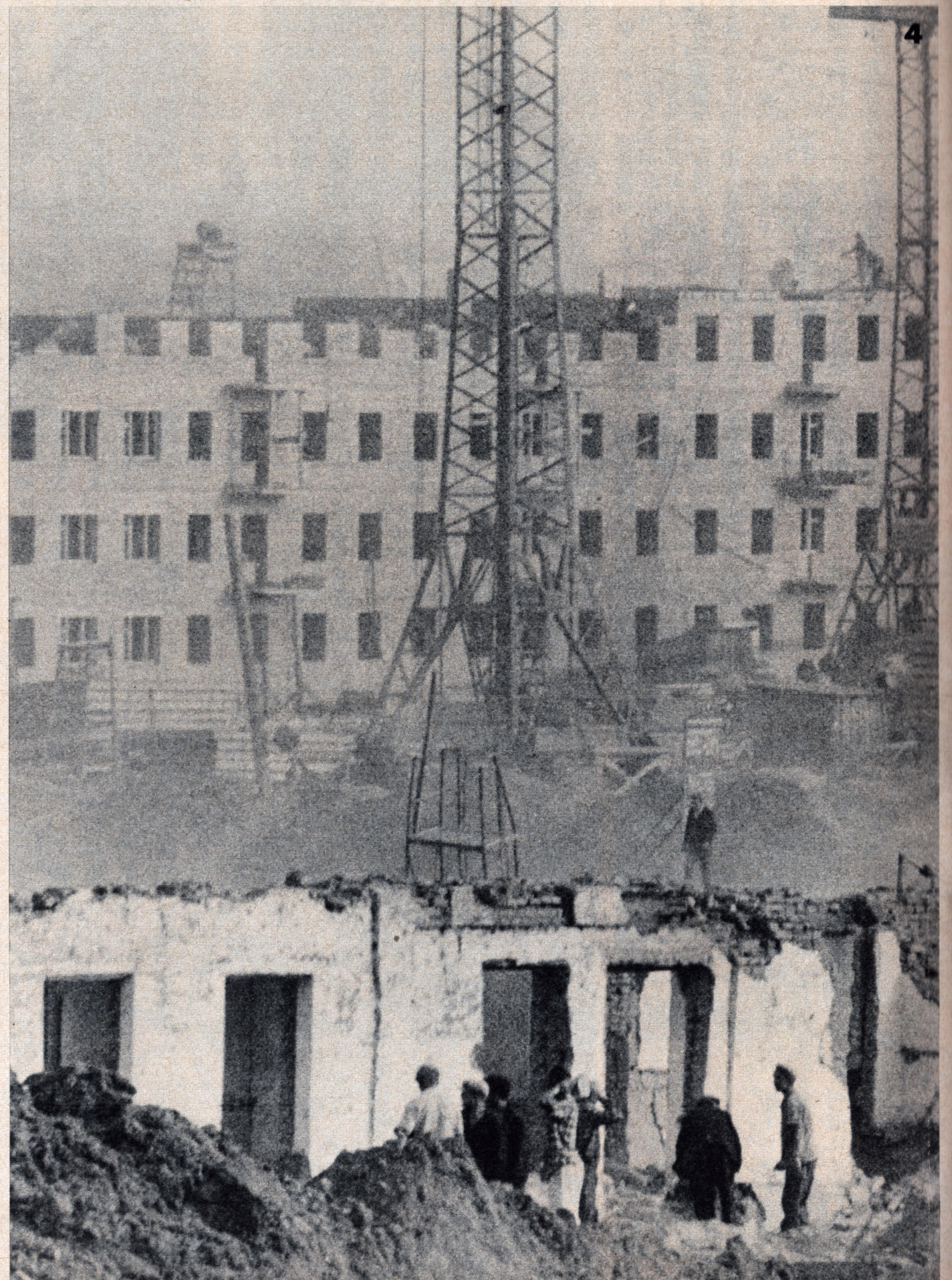
しかし、翌日にはもう復興作業が始まった。

ソ連各地からタシケントへ建設関係者を乗せ、機械類、建設資材を満載した数百本の特別列車が向かった。すべての連邦構成共和国とモスクワ、レニングラードは、自らの資金と物的・技術的資源によってウズベク共和国の首都に居住面積一〇〇万平方m以上の住宅を建設することを決めた。

タシケントは巨大な全ソ的建設場に一変し、一九七〇年までに市の復興を完了することができた。

一九六六年の地震から今日までの間に、タシケントの住民は一二〇〇万平方m以上の住宅を受け取った。市の中心部に出現した建築アンサンブルは、タシケントの誇りである。この建築アンサンブルはレーニン中央博物館の分館、ホテル「ウズベキスタン」、共和国美術家同盟の陳列館などの建物、その他の事務用ビル群で構成されている。ウズベキスタンの首都の新しい中心部を創造した建築家と建設者たちの大きな労働には、ソ連国家賞が授与された。

市の建築技師長サビル・アディロフは語る。「今では、紀元二〇〇〇年までを見込んだタシケント建築の新マス



1　タシケントでは一九六六年の大地震で約七万八〇〇〇世帯が住む家を失った。

2　地震のあと直ちにすべての兄弟共和国から建設者たちがタシケントへ救援に駆けつけた。

3　地震は容赦なく古い粘土造りの建物を破壊した。

4　地震で破壊された場所には新しいアパートが次々と建てられていった。

ープランが私たちの手で策定ずみです。この計画の実現で、ウズベキスタンの首都はさらに一層美しくなるでしょう。計画の基本目標は、タシケントに大きな行政・文化・科学センターとしての役割を確保することです。市内には住民サービスと直接関係のない大企業はもう建設されません。それどころか、タシケントの大気や水質を汚染する工場は市外に撤去することが予定されており、空き地になったその場所には公園が造成されます。これは紀元二〇〇〇年までにはタシケントの人口が約三〇〇万人に近づくと予測されているだけに、とりわけ重要なことです」

地震への備え

タシケントの復興の話をしながら、市を将来の地震から守るために共和国の学者たちが行った巨大な仕事について触れなければ片手落ちになろう。一九六六年の地震から数カ月後、タシケントに地震学研究所が設立され、学者たちは地震予知法の探究に全力をあげるようになった。

地震学研究所長のガニ・マブリャノフ・アカデミー会員は語る。「私たちの研究所のこれに劣らぬ重要な成果は、タシケントやウズベキスタンの他の諸都市の地域の地震危険度分布図の作成です。設計家や建設者はこれによって、どの地域ではどの程度の最大震度の地震が発生する可能性があるかが正確に記載されている文書を手に入れたわけで、ある地域の建造物に必要な強度の余裕を正確に計算することができるようになったのです」

タシケント建設新マスタープランによって市内に12―16階建てのアパート、18―23階建てのビルが建設される。地下鉄の第2期工事分の建設が続いている(この線の一部ではすでに列車が走っている)。新しい耐震建造物はもう地震を恐れなくてもいい。近年の経験が示したように、耐震建造物はソ連で採用されている震度階で〝非常に強い〟、〝破壊的〟と評価されている震度7、8の地震に十分耐えられる。

地震地帯ではどんな建物が望ましいか? 実地の経験が示すように、大型パネルの建造物はれんが造りや石造りの家屋よりも信頼できる。ソ連における耐震建設の成果の一つは、地震が起こる可能性のある地域で大型パネルの建物が大量に建設されたことである。

タシケントでは主に大型パネルの建物が建設されている。れんが造りの建物はわずかしか建設されず、その高さは4階を超えてはならない。このような建物は壁に鉄筋コンクリートの補強材が入っている。

近年ソ連では一体構造のコンクリートの耐震建物が建てられている。たとえば、タシケントではこのような方法で12階建ての建物が建てられた。しかし一体構造のコンクリートの建物は、差しあたり大量には建設されないだろう。この建物は信頼できるが、大型パネルの建物と比べて建設に手間がかかるからだ。

構造部材の耐力を高める伝統的な耐震対策とならんで、ソ連では慣性力を弱めることをねらった構造上の解決策にも関心が向けられている。

これに関連して〝地震絶縁器〟――ローラー、ボールベアリング、ころがり接触ベアリングなどの上に建物を建てる計画が興味を引いている。恐らくタシケントでも将来、このような建物を建設することになろう。

地震にもっと強い構造部材の開発で重要な貢献をしているのは、ウズベク共和国科学アカデミーの構造物力学・耐震研究所の学者たちである。

特にこの研究所では「タシケントの震度9地震地帯の動性係数決定のための暫定指示」という文書を作成した。この指示によって、建物に対する地震の荷重の度合いを極めて高い精度で決定することができるようになった。その結果、建物の建設のさいの建材使用量が節減され、約一二〇万ルーブル(1ルーブルは約三三〇円)の経済効果があった。

タシケントの地下鉄はどうかと言うと、営業の実績は、地震地帯でのこの種の輸送機関の安全性を証明している。地下鉄の構造物は近年のかなり大きな地震に耐えたばかりか、列車の運転は1分間も止まらなかった。

タシケントで作られた地下構造物耐震性理論に基づいて、構造物力学・耐震研究所ではトンネルと地下鉄駅の動力学的計算法を開発した。これらの建設にあたっては、起こりうる荷重をシミュレートした実物での実験調査の結果が考慮された。

この研究所の学者たちは、プレキャストコンクリート部材を使った地下駅やトンネルの耐震構造の導入を可能にした新しい構造上の解決策も発見している。

5



6



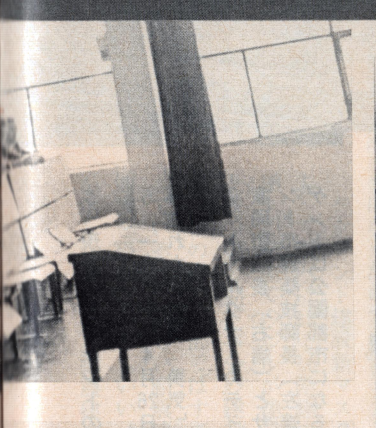
7



5　現在のタシケントのある団地

6　一九六六年4月26日の地震の10周年記念日に除幕された記念碑「勇気」

7　トゥルクナ・カディロワ・ウズベク共和国建築家同盟議長(右端)とサビル・アディロフ・タシケント市建築技師長(左端)は、今世紀末までにタシケントは公園都市になると確信している。

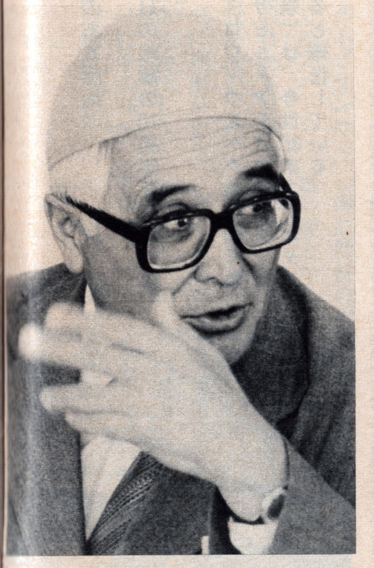
物理学部の授業風景

中央アジア最初の総合大学

本誌特派員　ビクトル・ルデンコ　カメラ　N・ウタルベコフ
A・バルフォロメーエフ



レーニン記念タシケント
国立大学のキャンパス



タシムハメド・サルィムサコフ
学長——有名な数学者でウズベク科学アカデミー会員。

学生寮の空色の建物が芝生の緑の中にくっきりと立っている。その左側には、平石が敷きつめられた大学構内の中心的な広場があり、学生たちが行ったり来たりしている。その向こうには大学の文化宮殿と学部の建物の輪郭が見える。これが、国立タシケント大学の本部がある建物の最上階から望むキャンパスのパノラマである。

わずか15—16年前、いま大学があるこの敷地が広大な荒野だったとは信じがたい。大学が創立されたのは一九二〇年。キャンパスはタシケント市の中央にあったが、一九六六年の大地震で崩壊した。

その後、タシケント復興マスタープランによって大学は市郊外に広大な敷地の提供を受けた。

3年生のロマン・カシカロフと一緒に、大学の一図書館の書架で本探しをする。ロシアの動物学の大家でペトログラード（今のレニングラード）大学教授だったロマンの曾祖父ダニール・カシカロフはタシケント大学の創始者の一人だった。

「あったぞ！」——型押し模様のついた表紙の部厚い古書を引っぱり出しながら、ロマンはうれしがった。一八九五年、中央アジアにまだメドレセ（イスラム教の聖職者を養成する学校）以外の学校が存在しなかった時代に出版された本だ。本の標題は『ロシアの鳥類』。

それからロマンと一緒に大学博物館のホールを回った。現在では幼稚に思われる、マホガニーの台上の物理実験器具、重々しい古風な家具……陳列品の解説カードによると、これらの品物は一九二〇年のいわゆる〃大学〃列車（教授陣と教材を乗せた特別列車）とともにタシケントに到着したものだ。

ロシア人の教授や教師約一〇〇人（ダニール・カシカロフもその中にいた）が自分たちの講座、居心地のいい住まい、親類や知人を後に残してこの小さな、ほこりっぽく暑いまちにやって来たのだ。この人たちが、現在15学部を擁し、70民族、二万人の学生が学ぶ中央アジア最初の総合大学の基礎を築いたのである。

学長の横顔

学長はアカデミー会員のタシムハメド・サルィムサコフ。この大学の伝統的存在で威光に包まれているが、東洋では賢人を神格化する傾向があるから、別に驚くにあたらない。学長のことに話が及ぶと、どの学生も必ず、学長室の隣の部屋の黒板について話す。学長以外の誰も、この黒板に触ってはならないこと。毎夕学内を掃除して回る掃除の小母さんでも駄目なこと。いつも数式がぎっしり書き込まれたこの黒板のそばで、67歳の学長は数学的着想について考えをめぐらせ、それを弟子たちと検討する。弟子の数は大変多い。

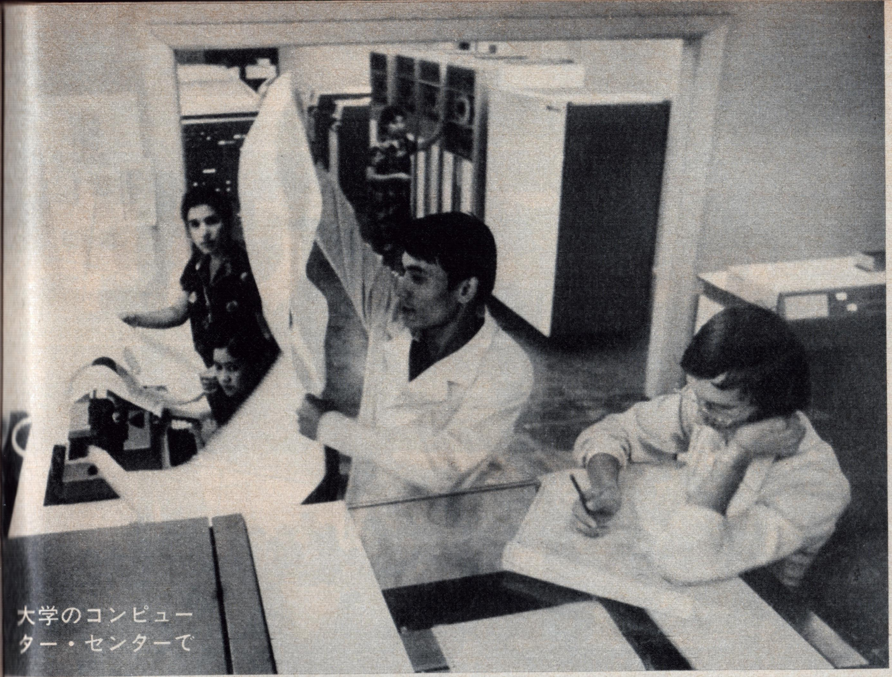
白髪で小柄、柔らかい物腰の、鋭く若々しい目つきのこの人は、限りなく学問に傾倒し、同じことを教師や学生たちにも要求する。学長のこういう態度から、キャンパスのあれこれの生活問題に対するやや保守的な対応が出て来る。

一例を挙げよう。ソ連国内すべての大学で学生結婚が増えているという統計的裏付けがある。学生たちが生活する〃学生都市〃に新婚家庭が生まれれば、学生の部屋割りの問題や夫婦用の個室がある学生寮建設の問題が出てくる。だがサルィムサコフ学長はこの種の寮を建設するつもりはない。学生時代の結婚は発育不全の表れだというのが学長の考えだ。

「人生においてまだ何もつかんでいない、ずばり言わせてもらえば、物事をわきまえない青二才が家庭を作るだって？　もっともこれは私が心配することじゃない。学生委員会が検討すればいい問題だ」——これがこの問題に対

する学長の意見。

この大学の新しい学生寮の1区画は2人部屋から成っている。通常、学生委員会は学生夫婦に設備の整った1区画（トイレ・シャワー付き）を割り当てている。この場合、新婚夫婦は1カ月にタバコ2箱分程度の寮費を払うだけでいい。



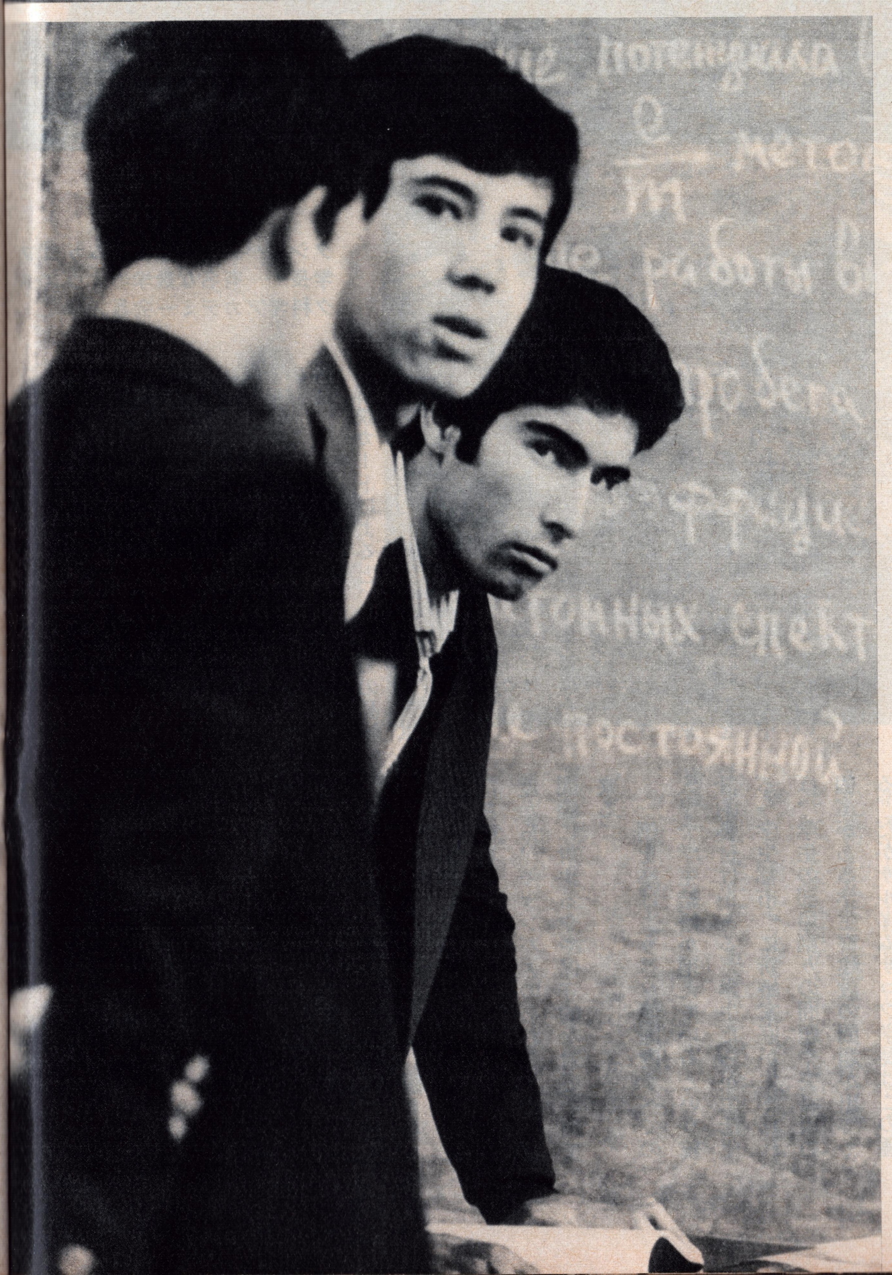
大学のコンピューター・センターで

学者への道

「学問に自分の道が見つけられたのは学生科学協会のおかげだな」——量子光学分野の研究に積極的に参加している5年生のフトフラ・ガイボフはこう言う。

学生科学協会（NSO）の積極家たちは講座付属の科学研究サークルを教師と一緒に作り、1年生にも入会を勧誘する。これらのサークルの会合では、アクチュアルな科学の問題について討論したり、大家が一説ぶったり、自分の発見について語ったりする。

研究をするためには学生にも実験施設が必要だし、時には、例えば考古学や地質学の学生のように、学術調査にも行かねばならない。学生には専門家との交際が必要だし、学生の構想も専門家に聴いてもらい、しっかりした批評を受ける必要がある。学生科学協会はこういったすべての要求を満足させられる力を持っていて、学術調査や実験の費用を工面し、科学会議を組織する。同種の協会はソ連の全大学にあり、年に数回、共和国や更には全ソ・レベルで科学会議を組織している。



学生科学協会（SNO）の幹部たち



キャンパスで談笑する学生たち

その資金はどこから出ているのか？資金は大学の予算から出ているが、その使い方は学生科学協会にまかされている。つまりこれは、学生たちが大学のカリキュラム以外の、自分自身の研究に利用できる国家の資金というわけだ。

その他、才能ある学生に対して大学は、国家機関・企業の注文に応じた自主研究で自分の力を試してみるチャンスを提供している。もちろんこれは、専攻分野が細分化する3年生になって選択した専門が、外部注文のあった研究テーマと合致する場合の話だが。国家機関・企業の注文による研究に対しては十分な報酬が学生に支払われる。

それでは、タシケント大学の学生たちはどんな研究に参加しているのだろうか？

地震都市タシケントでは大変切実な地震予知法の探求、産業や保健に応用できる新世代レーザーの開発に参加しているし、綿の新品種開発、綿の遺伝子銀行を充実させる研究への参加は高い評価を得ている。時には学生が有用鉱物の大鉱床を発見するというケースもある。

文化宮殿の学生クラブ

タシケント大学の文化宮殿には〝空いている〟夜はない。三つあるホールではポップ・ミュージックのスターたちや交響楽団が演奏し、プロの劇団が芝居を上演し、新作映画が上映される。だがこれもまだこのしゃれたモダンな建物の中で行われている催しのほんの一部にすぎない。学生クラブ運営委員会で聞いたところによると、ここには48のアマチュア芸能集団がある。「エボリューション」（進化）という大げさな名のディスコ・クラブから民族的伝統を忠実に踏襲している舞踊アンサンブル「タノワル」まで、またコンスタンチン・スタニスラフスキーの演劇システムの傾倒者を集めている古典的ドラマ劇団から高名なこのシステムに自分たちのシステムで対抗しようという演劇スタジオ「マヤートニク」まで実に多様だ。

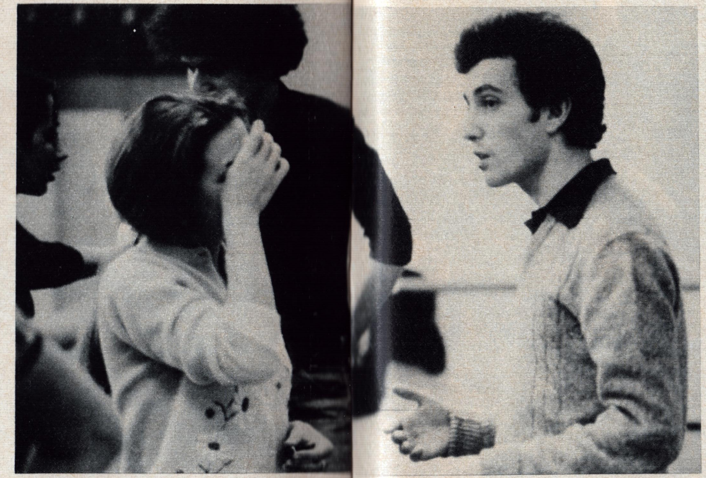
初めて私はこの文化宮殿に行き、そのモダンなインテリアの見事さに感心したのだが、あるホールで洗練された内部装飾が惜し気もなく壊されているのを見て仰天した。それは、演劇スタジオの空間構成に新しいアイデアが生まれたからという説明だった……

大ざっぱな作りの足場の上で、腕まくりをした劇団員たちが働いていた。彼らは天井を、文字どおり確かにくすぶらせていた。光を吸収するように、天井は完全に黒くなければならないということだった。

演劇スタジオの指導者ウラジーミル・ブシレルの話によれば、ここでは客席とステージの境はなくなり、観客は俳優とまったく対等に劇に参加できる。演出家にとって重要なのは、参加者おのおのの個性が完全に創造的に開花するような条件を作り出すことだという。

私は団員の一人と話してみた。そのワロージャ・タジマトフはタシケント大学とは間接的な関係しか持っていない。彼は工場で仕上げ工として働いていたが、ある日たまたま大学クラブのブシレルのスタジオに来た。そこで自分の天職を見つけた。現在彼は演劇大学の学生である。

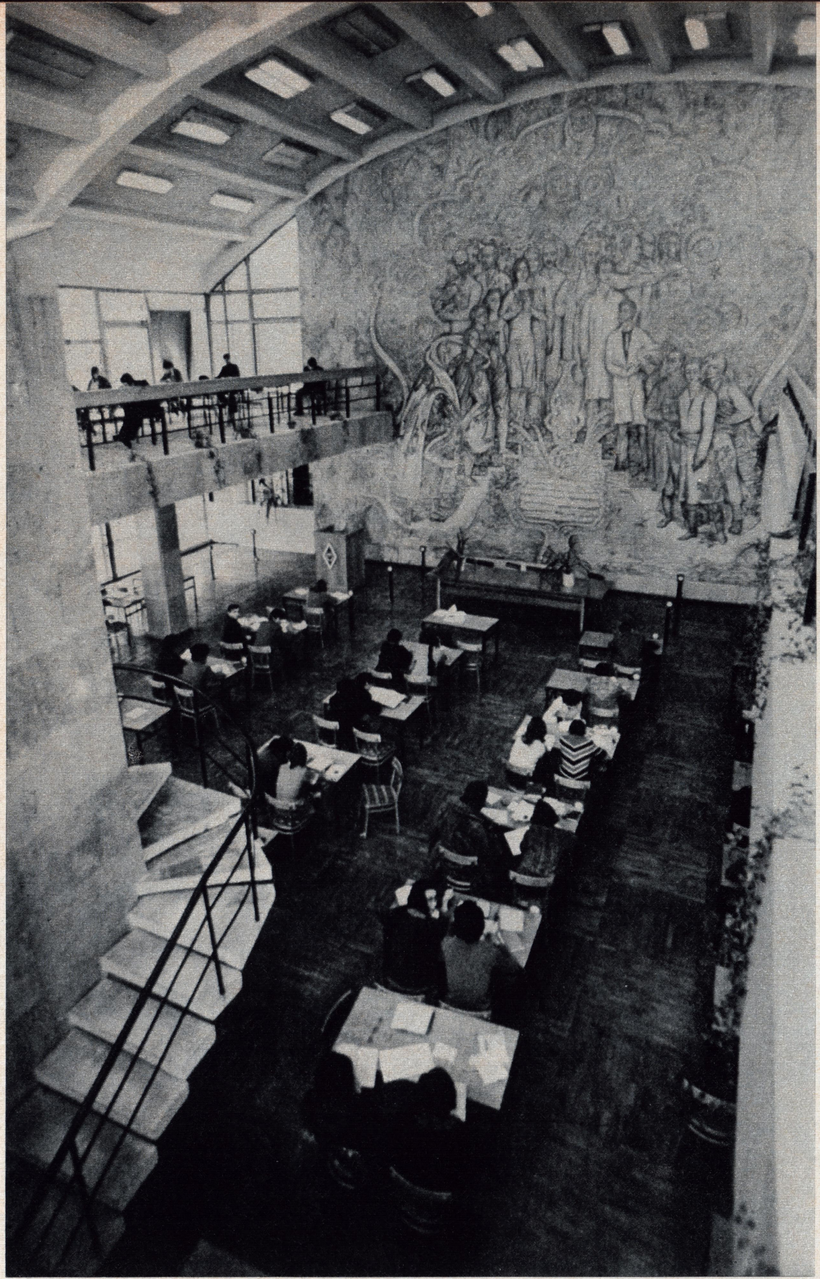
この大学の文化的影響が大きいのは、学生たちが自分たちのクラブの扉を、広く〝よその人たち〟に開放していることも一因になっている――そう私は感じた。



文化宮殿の学生演劇スタジオ〝マヤートニク〟を主宰するウラジーミル・ブシレル（右）



伝統的な服装の女子学生たち



大学図書館の閲覧室

エピローグ

ここでお話しした学生たちはみなコムソモール（共産青年同盟）員だ。彼らはどんなことに取り組む場合でも、タシケント大学で一番影響力の大きい青年組織であるコムソモールの支持を常に当てにしている。

タシケント大学コムソモールのリーダー、ルスタム・アジスポフはソ連憲法を引用して次のように語った。

「各人の自由な発展は万人の自由な発展の条件である――これがわれわれの社会が志向している理想です。そしてわれわれは実際面でそれが遂行されるように協力している。この大学の卒業生の社会的積極性が、大学で学んだ知識に比例するように望んでいます」

タシケント発祥の地
シャシテプ遺跡

エルガシ・ナビエフ　カメラ V・タラセビチ



6年前、タシケント南部のシャシテプ遺跡を発掘した学者たちは、都市文化がすでに二〇〇〇年も前、今のタシケントの場所に存在していたと結論した。

高さ30ｍの丘のシャシテプは、繁華な市街や都市建築物から遠く離れていたおかげで、保存状態はよい。シャシテプの存在は以前から学者には分かっていたが、一九七八年になってようやく、この遺跡の最下層に到達することが出来、二〇〇〇年前のものと推定された都市文化の跡が発見された。

タシケント考古学調査団長のマルガリータ・フィラノビチ歴史学博士候補は、幾つかの大きな粘土製の煉瓦を見せてくれ、これはかつてこの土地の統治者の宮殿を守った大城壁のれんがだったと言った。発掘された建物の跡は、どの都市型居住地にも見られる、複雑な回廊やアーチ、通路のある数々の大きな造営物がシャシテプに建てられていたことを裏付けている。

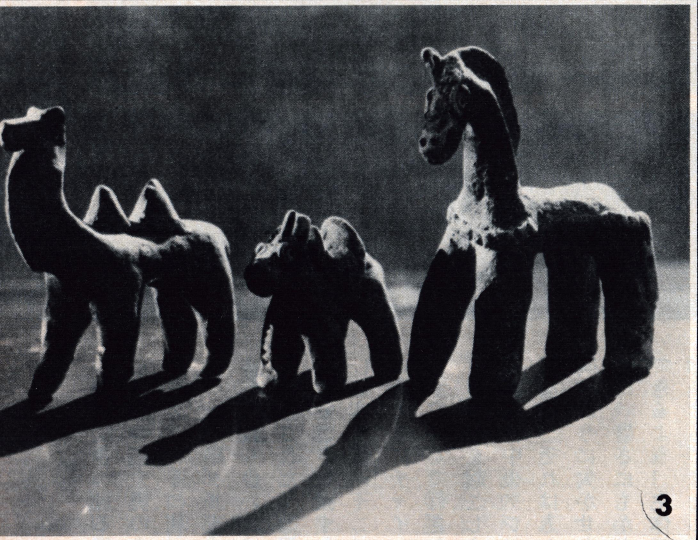
宮殿の周囲には職人街があった。ここで発見された大量の陶器は、製陶術のレベルの高さを示している。ここでは金属の精錬も行われた。げんに鉄鉱スラグや金属製品が発見されている。土地の住民は見事な腕の織工でもあった。複雑な織台の破片がそれを実証している。

「シャシテプは交易の一大中心地だったと断言できます。この6年間の精力的な発掘によって、他の国々から運びこまれたたくさんの品物が発見されました。例えば、古代ギリシャ王が描かれたワイン用の角杯（これでワインを飲んだ）とか、中国の青銅の鏡などです。こういう出土品を詳しく調べた結果、その製作年代はすべて二〇〇〇年以上前になることが分かりました」――マルガリータ・フィラノビチはこう語る。

シャシテプの周囲には徐々に、五つの小都市と50ばかりの居住地が形成されていった。火事、戦争、自然災害が起こったが、人々はこの地を捨てず、壊れた建物を建て直した。10世紀になってからシャシテプは現在の名のタシケントになった。チュルク語でタシケントは“石の都市”の意味である。

……発掘は続いている。考古学者たちが発掘した50余りの古代の遺物は、国が保護している。修復作業も順調に進んでいる。タシケントの人たちは、自分たちの都市の歴史の“証人”を、後代の人々のために保存したいと願っている。

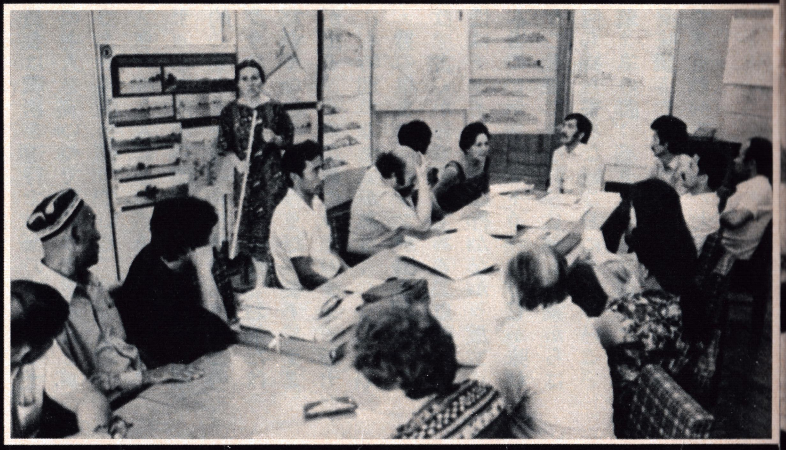




1　タシケント都市文化発祥の地――2000年前の都市シャシテプ遺跡の発掘現場

2　シャシテプ遺跡から発掘された陶器

3　出土品の一部



シャシテプ遺跡の発掘について討論するタシケントの考古学者たち。立っているのが発掘調査団のマルガリータ・フィラノビチ団長







1　中央アジアでは、お茶は空気と同じように人々に欠かせない。

2　テーブルに並んだお茶うけ

3　用水路のほとりのチャイハナ

街かどのチャイハナで

サジム・アフノフ　カメラ　V・タラセビチ他

夏。吹きつける風が、パンを焼く窯から吹き出す炎のように熱い。一刻も早くクーラーの利いた部屋へ帰ろうと、アクセルペダルを力一杯踏み込む。猛暑との競り合いは、交通監督官によって中止された。監督官はスピード違反の罰金を申し渡すと、つけ加えて忠告してくれた。

「あそこにチャイハナ（茶店）があります。休んで行きなさい。そうでないと、事故を起こしますよ」

お茶は中央アジアでは単なる飲料ではない。それは人々にとって、空気と同じように欠かせないものなのだ。それは、暑さにもかかわらず働くことができるよう、生体組織に水分を取りもどさせる。ほとんど交差点ごとにチャイハナがあるのは、そのためだ。幹線道路沿いに、つねにサモワールが沸いているのは、そのためなのである。

私はチャイハナに寄り、じゅうたんを敷いた縁台に座った。かたわらでは用水路の中を水が音を立てて流れており、その上に樹齢も分からないほど巨大な、四抱えもあるポプラやプラタナスが濃い樹冠を投げかけている。静寂を破るものといえば、水のせせらぎと、威儀を正した老人たちののんびりした話し声ぐらいだ。隣の縁台ではチェスの熱戦が無言でくり広げられている。テレビを見ている人はない。夜にならないとテレビはつかない。

チャイハナの主人が煮出した濃いお茶の入ったポットを持って来た。茶碗に注ぐと、何とも言えないすばらしい色と香りだ。味は？　すばらしい！

昔から、チャイハナの主人が薄い茶を持って来たら、それには手をつけずに、茶碗に小銭を投げ入れることになっている。おカネが欲しいのなら、取るがいい、というわけだ。チャイハナの主人は恥をかかされる。だが、そんな例は、めったにない。

チャイハナはふつう、居住区の選挙で選ばれる委員会が経営している。委員会は職務を遂行できないチャイハナの主人を、いつでも取り換えることができる権限を持っている。

ウズベク人にとってチャイハナは、ずっと以前から顔見知りの人々が定期的に集まる一種のクラブである。このような人々が集まった場合、お茶だけですまないのがふつうだ。まずピラフが出る。そのために、どのチャイハナにも特別のカマドがある。

男の集まりにピラフが出るというのは、古くからの伝統である（以前、女性はチャイハナへは行かなかった）。本当のピラフはチャイハナでしか味わうことができない。しかも、家からは何も持ち寄らないことになっている。米、羊の肉、バター、ニンジン、ネギ、薬味類——すべてはおカネを出し合ってバザールで買う。大釜、薪、盆、食器は有料でチャイハナの主人が提供する。ウズベク人はだれでもピラフを作ることができる。しかし、チャイハナではだれもがピラフを作れるわけではない。それは名人と認められた者の権利である。もし集まった男たちの中に名人がいなければ、チャイハナの主人に作ってもらう。

そうこうするうちに、若い男女の一団がやって来た。会話を聞いていて分かったのだが、彼らは大学生だった。試験が終わったところで、及第を祝いにやって来たのだった。

若者たちは協議していたが、そのうちの一人がチャイハナの主人に話しかけた。

「ジュラおじさん……」　主人は尊敬を込めて〃おじさん〃と呼ばれる。

「ピラフかい？」とジュラおじさんが聞き返した。「どっちが望みだね、白いのかい、赤いのかい？　干しブドウ入りだろうね？」

「おじさんの特製ピラフがほしいんだよ」

若者たちが下ごしらえにかかる。肉を切る者、ネギやニンジンを刻む者。ジュラおじさんはカマドのところで立ち働いている。火を起こし、大釜に綿の実から搾った油を入れ、煙が出始めたら刻んだネギを放り込む。ネギが焦げて来たら、羊の肉を釜の中にていねいに並べる。別に大きな深皿に、洗った米を薄い塩水につけておく。ニンジンを両手ですくって大釜に盛る。釜の縁よりも高く盛り上がった刻みニンジンの山が煮えて低くなって来たところで、深皿の米と水を大釜にあける。

「水はつねに米よりも指1本分多くあるようにしなければいけない。煮立ってきたら、水を注ぎ足すんだよ」とジュラおじさんが学生たちに説明する。

ジュラおじさんはカマドのそばを行ったり来たりして、水差しで水を足し、網杓子のとがった柄を米に突き立てる。突き立てたところから、刻んだニンジンが蒸気とともに噴き出す。ときどきジュラおじさんは網杓子で米をたたく。大釜の中でぐつぐつ煮える音がする。それから薪を取り出して、火勢を弱めると、大釜にぴったりフタをする。30分後にフタを取り、大釜の中をまぜ合わせて、それを皿に盛り分ける。

私も試食するよう勧められた。断っては失礼になる。それに、こんなごちそうを断る手はない。香りのいい、黄金色に油が浸み込んだピラフが小山のように盛られた。ぱらっと仕上がったピラフの上に軟らかい肉の塊が乗っている。

だが、いとまを告げるときが来た。用水路のかたわらで一休みして、空腹も渇きもすっかり癒された。新たな力が湧いて来た。

地震に強い地下鉄

ウズベキスタン駐在本誌記者　アブドゥラ・サビロフ　カメラ　V・タラセビチ



旧市街地区のアンホル川を渡る地下鉄

タシケントの地下鉄が開通してからもう6年余りになるが、地震多発地帯にあって不安視されてきたこの地下鉄では、その間、地震による列車ダイヤの乱れは一度もなく、地震があっても、地下鉄にいたら何も感じなかったと皆口を合わせて言っている。

地震のつどトンネル、路床、駅の施設は綿密に点検されているが、一度も被害や欠陥は見つかっていない。

これも現地の技術陣の苦労のたまものである。

地下鉄の歴史

タシケントの人口が二〇〇万台に、そして市の面積が二五〇平方kmに近付いたころ、どうしても地下鉄が必要ということがわかって、一九七二年に着工され、5年後に市の中心部と新設地区のチランザルを結ぶ延長16・2km、12駅の最初の路線が開通した。この線の年間乗客数は六〇〇〇万人余りである。

いまタシケントの中心部と別の新設地区を結ぶ延長8・5km、7駅の新線の第2期工事が進行中である。

トンネル工事は鉄筋コンクリート工場でつくったブロック構造物を現場で組み立てる方式で行われており、地下水は強力防水装置でシャットアウトしている。

将来タシケント地下鉄の延長は60kmに達する予定。

運転間隔は3分

列車の運転間隔は3分。運転速度は自動制御されていて、必要なときにブレーキが作用する。

タシケントの地下鉄は清潔で、空気が新鮮である。これは強力な換気装置が1時間に5回換気をやっているからだ。炭酸ガスの濃度や湿度などを含めた地下鉄内の空気がたえず監視・測定されている。外の街路が猛烈に暑い夏でも、地下鉄内は24度C以下である。

どの駅も美々しく、心地よく、地下にいる感じがしないし、内部の構造物から受ける圧迫感とか日の光がないという感じなどはしない。駅の内外装にはウズベクの民族建築の伝統が生かされており、駅の壁や柱の外装には大理石や花こう岩が使われている。

地下鉄の安くて安全な点も高く買われている。5コペイカで一日中でも乗り回っていられるのだ。

しかし工費は高く、専門家の話だと、工費の償却には33年かかるそうだ。その代わり市民にとってはたとえ10分でも乗り物に揺られている時間が短縮するわけだから、〝乗り物づかれ〟がぐんと減る。

タシケントの地下鉄は、いま、市民の生活になくてはならないものになっている。

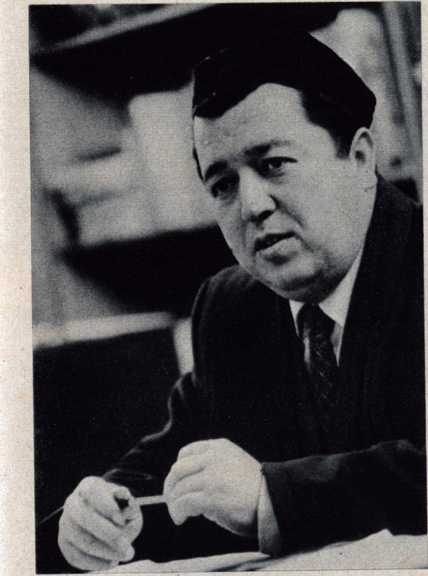




左上　出勤時の車内。こんなにすいていてごめんなさい。

左下　夜のマクシム・ゴーリキー駅のホーム

中央アジア・イスラム教徒の宗教センター



◀中央アジアおよびカザフスタンのイスラム教徒宗務局議長シャムストジンハン・イブン・ジャウトジンハン・イブン・イシャン・ババハン師

タシケントは、ソ連アジア部の5共和国——ウズベキスタン、タジキスタン、トルクメニア、キルギジア、カザフスタンに住むイスラム教徒たちの宗教活動の中心地。イスラム教徒宗務局が置かれているのもここで、宗務局議長はシャムストジンハン・イブン・ジャウトジンハン・イブン・イシャン・ババハン師（1982年秋選出）。

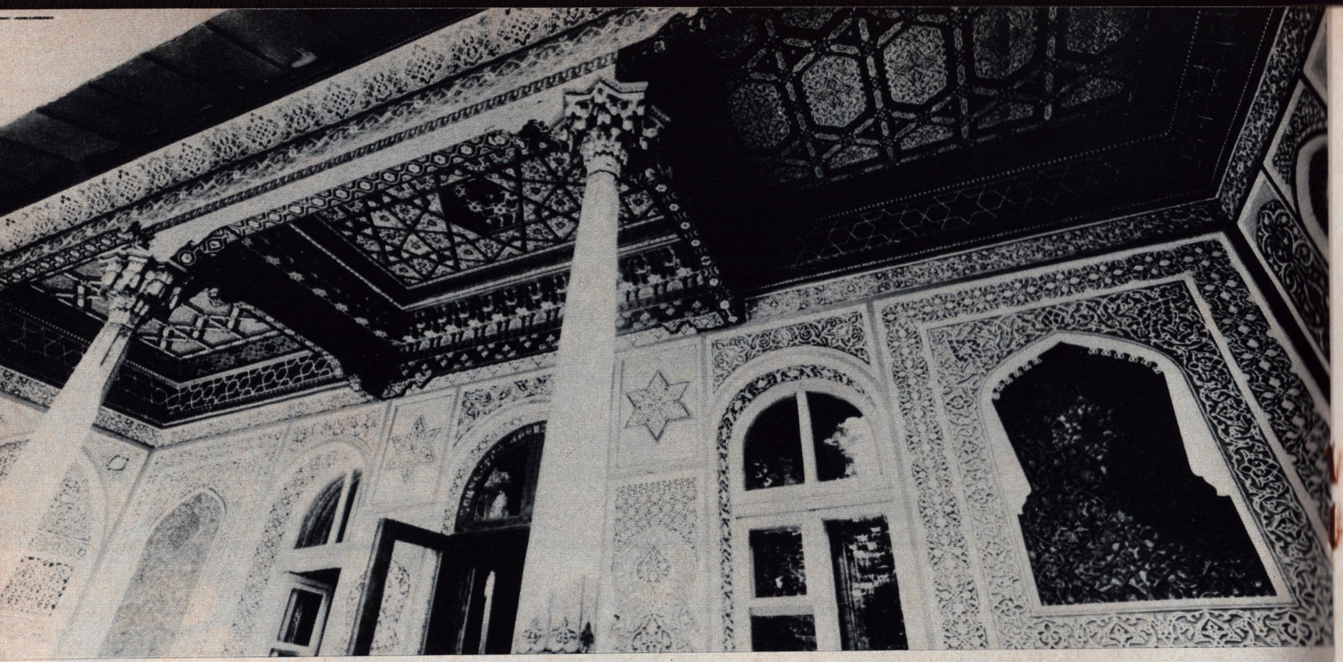
イスラム教徒宗務局は小さい宗教団体を統合して、1943年に創設されたもの。ババハン師は、ほぼ400万平方kmもの広大な地域に住む教徒の宗教生活を指導している。

宗務局は世界70カ国以上のイスラム教組織と緊密な連絡をもっている。ババハン師の指導の下に宗務局は、大会、協議会を開催し、イスラム教の聖地詣でに関連した業務を処理し、活発な出版活動をしている。ここ20年間にコーランは5回出版され、宗教日、サウム（斎戒）、イスラム教の祭日が記載されているイスラム暦は毎年出ている。

ババハン師の公邸の近くに聖職者を養成するタシケント・イスラム教大学がある。A・アブドゥガハロフ学長は次のように語った——「この大学のカリキュラムはアラブ諸国のイスラム教大学のそれに近づいている。未来の導師はここで4年間学ぶ。ここに入学できるのは、ブハラのイスラム教学院の全課程（7年）を修了した者だけだ。成績優秀な卒業生はエジプト、シリア、リビア、その他のアラブ諸国の有名大学に派遣されている」

タシケントのイスラム教寺院の前





イスラム教徒宗務局図書館の正面

図書館の内部





チルナ・シェイフ寺院での金曜日の礼拝

図書館には東洋の書道のコレクションがある




収穫期の綿花

綿花収穫機を生産するソ連唯一の工場

ウズベキスタン駐在本誌記者 ウトキル・アブドゥラエフ　カメラ V・モルガチェフほか

綿花収穫機を生産しているのは世界で2カ国――ソ連と米国だけである。ソ連で生産しているのはウズベク共和国の首都タシケントの農機工場〝タシセリマシ〟。

〝タシセリマシ〟は数千人の市民に仕事を提供している巨大企業であるだけでない。それは工業化時代を象徴するウズベク共和国の顔でもある。

〝タシセリマシ〟は10月社会主義革命から17年後の一九三四年に操業を開始した。革命前、ウズベキスタンには工業と呼べるようなものはなく、農民は機械などというものの存在を知らなかった。一九二〇年代末に最初のトラクターが持ち込まれたとき、ウズベキスタンの農民はそれらを〝悪魔の荷馬車〟と呼び、近づくのを恐れた。

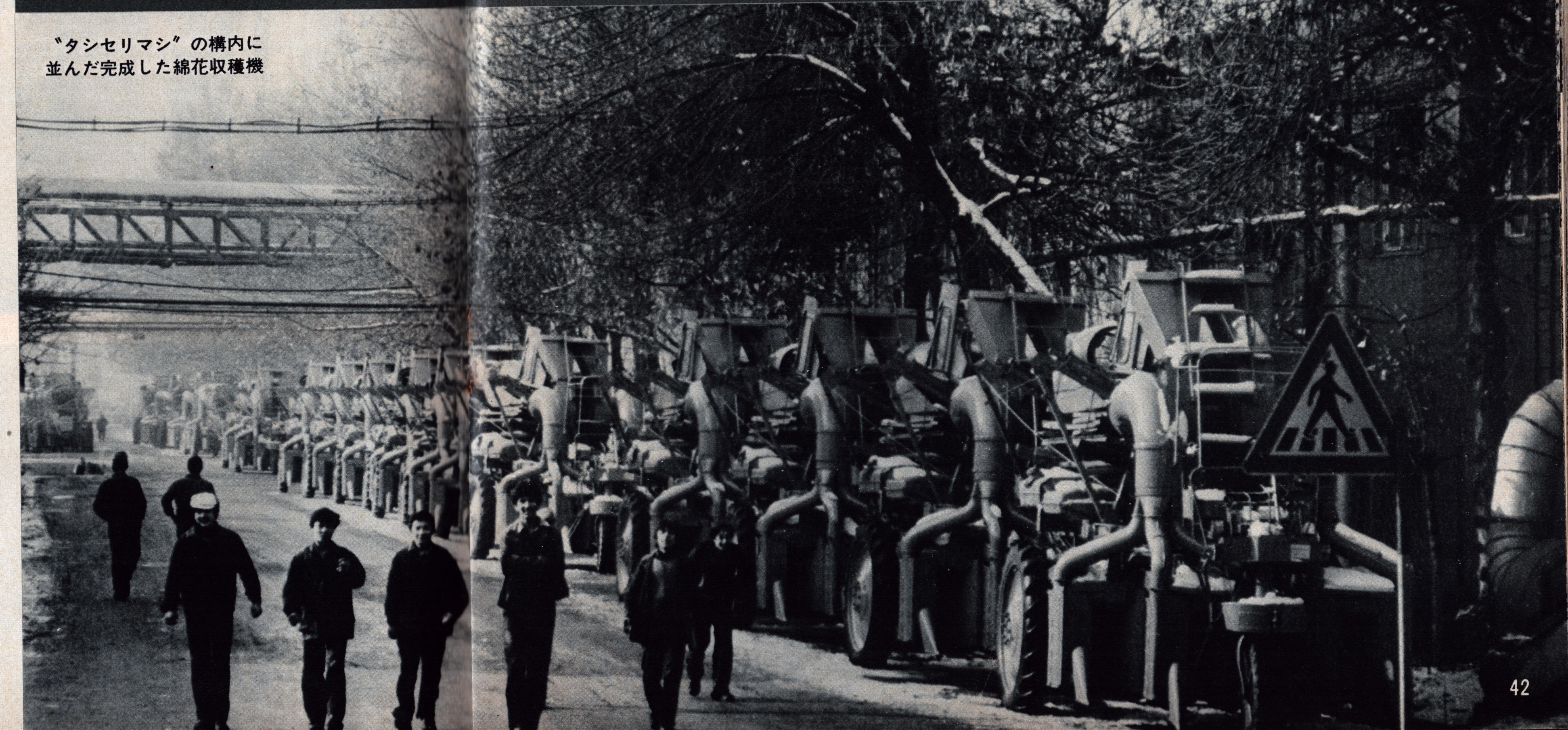
タシケントには、この工場の建設のことを覚えている人も少なくない。工具職場のかつての職長ファズル・サリホジャエフもその一人だ。現在、彼は年金生活を送っている。

彼は回想する――「建設はそれは大変でした。何しろ、経験もなければ、機械や設備、技能資格を持つ専門家も労働者も足りなかったのですから。近くの村から、私のような文盲の農家の若者が建設のためにやって来ました。正直のところ、私たちは機械を作ることができるようになるなどとは、信じていませんでした。しかし、やって来たロシア人の技師や労働者、中央の大きな機械工業企業や金属加工企業が私たちを助けてくれました」

サリホジャエフは土掘り人足や石工として働き、その後、設備の組立に参加した。夜は、同年齢の大勢の若者たちと同様に、学校で勉強した。やがて建設現場に組織された講習会に入り、仕上げ工の職業を身につけた。中等専門学校の夜間部を卒業して、職長になった。

初め工場は、繰り綿企業のための設備、綿花播種機、カルチベーター、施肥機を生産していたが、やがて工場の設計家たちは独自の綿花収穫機を開発した。

現在〝タシセリマシ〟の作業場の面積は五〇万平方m。ここに最新式の設備がびっしり〝詰まって〟いる。ここで一九八二年に、一九八〇年より二〇〇〇台多い約一万台の綿花収穫機が生産された。将来、これを一万三〇〇〇台にすることが予定されている。工場


〝タシセリマシ〟の構内に並んだ完成した綿花収穫機

長ハミド・グリャモフの説明によれば、この課題は技術的再装備と改修によって解決される。高度に機械化され、自動化された追加の職場が建設されており、最新の技術工程が導入されている。

現在、数タイプの綿花収穫機がシリーズ生産されているが、その中でも工場の自慢は、木から品質のいい綿花だけを収穫することができる4条式の綿花収穫コンバイン〝ウズベキスタン〟。

〝タシセリマシ〟の製品は綿花を栽培しているソ連のすべての共和国と、アルジェリア、ブルガリア、ギリシャ、ユーゴスラビア、エジプト、インド、イラク、ルーマニア、キューバ、トルコ、エチオピアその他多くの国に輸出されている。

工場では新型の細繊維綿花収穫コンバインをシリーズ生産するための準備が行われている。

「新型コンバインの生産が必要になったのは、綿花を栽培しているソ連の各共和国が最も高価な細繊維綿花の生産を急激に増やしているからです」とグリャモフ工場長は言う。「ウズベキスタンだけでも、現行の第11次5カ年計画期（一九八一―八五年）中に細繊維綿花の年産は五〇万tに達するでしょう」

〝タシセリマシ〟の設計技師長ロマン・ベルシチンに新型コンバインの特徴を説明してもらった。

「新型コンバインは非常に強力で、小さな動く繰り綿工場と呼べるほどです。その空気輸送システムは、綿繊維から分離された種子をまったく傷めません」

ハミド・グリャモフ工場長は工場の将来を語ったさい、工場の社会計画も教えてくれた。現在〝タシセリマシ〟は独自の診療所と病院、クラブ、スタジアム、食堂、住宅、幼稚園、休息の家、スポーツ基地、郊外のピオネール・キャンプを持っている。

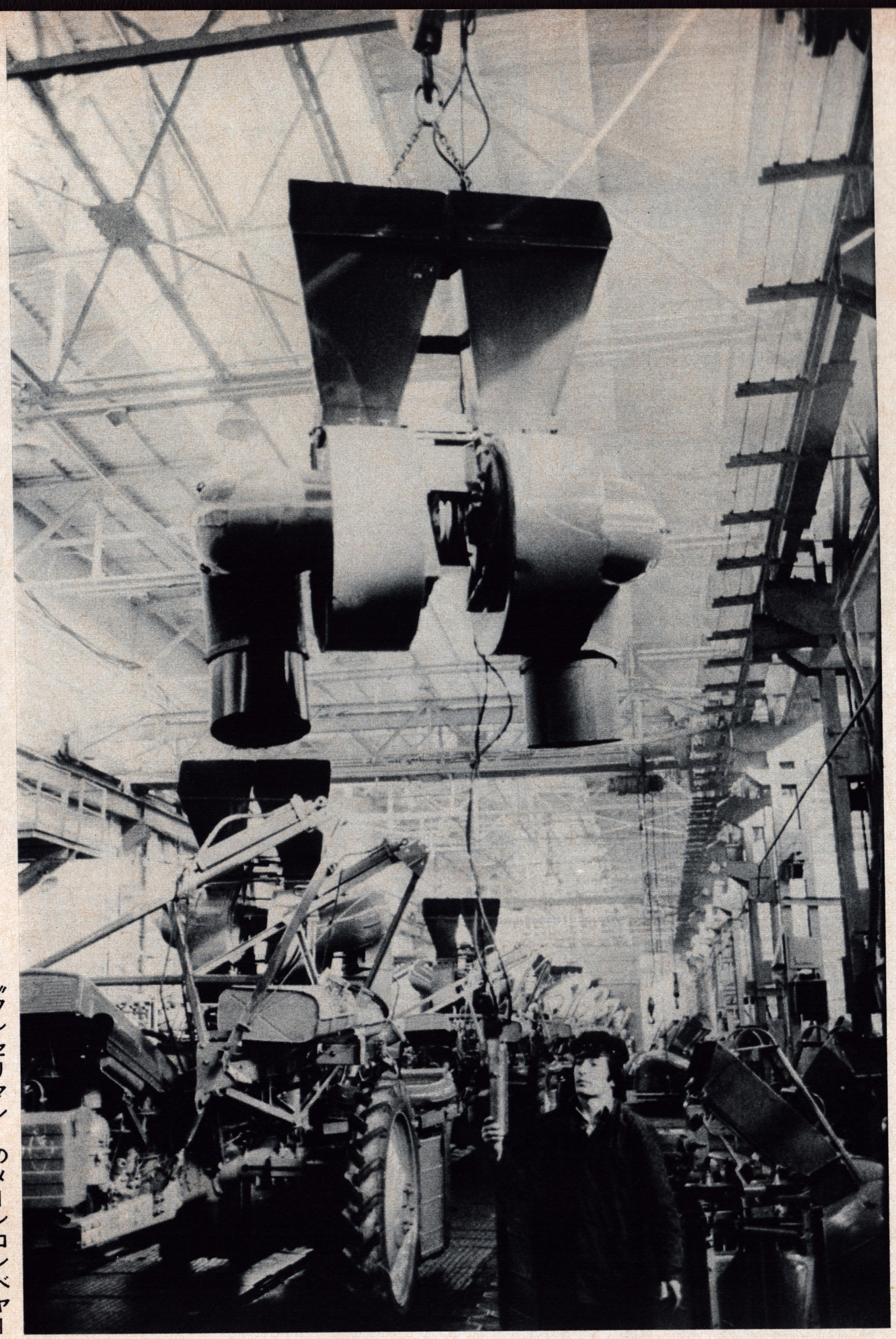
当面、住宅建設を続行し、労働者が働きながら治療を受けることができる予防診療所を拡張し、休息の家の収容能力を増大することが予定されている。工場従業員の子どもたちのためには、もう一つのピオネール・キャンプが開設される。



作業中の仕上げ組立工
エルキン・タシェフ



工場の設計ビューロー



〝タシセリマシ〟のメーンコンベヤー



生産した全機種が保存されている工場の博物館



100の役を演じた俳優

シュクル・ブルハノフ（73歳、写真）は芸能生活50年になるウズベク共和国の俳優の最長老で、50年間に舞台やスクリーンで演じた一〇〇の役は、そのままウズベク共和国の演劇・映画の形成・発展史と言える。

ブルハノフはタシケントのイスラムの伝統を重んじる家庭で育ったので、一九二〇年代に創立されたウズベク・ドラマ劇場に入るには、生まれ育った家を捨てなければならなかった。

「プロの演劇がまだ一人立ちしたばかりのころで、うちの劇団は暗中模索の状態だった」と彼は回想する。「われわれにあったのは、演技をしたいという意欲だけで、職業意識はまるでなかったが、ウズベク共和国で初めてわれわれが開いた素晴らしい演劇の世界を見て、観客は喝采をおくってくれた」

一九三〇年にブルハノフは演技研修生としてモスクワ芸術座に派遣された。ロシア演劇の巨匠たちのもとでの修業は、後年故郷の舞台でロミオ、ハムレット、オイディプス王といった大役を演じる下地をつくった。

彼はウズベク映画の初期のころから映画に出演しており、古いものにたたかいを挑む〝反乱者〟の役が当たり役となった。

ブルハノフの人気はいまも非常に高く、彼が出演する劇や映画はいつも大入り満員だ。しかし危険なシーンの撮影では、スタントマンが彼の代役を演じることが多くなっている。「さてどうするかな」彼は肩をすくめて言う。「脊髄の神経を患っているし……ものには万事潮時というものがある。これからは老人の役をやるよ。老いとは若い人たちに伝えなくちゃならん知恵なんだよ」

健在、綱渡り一家

ウズベキスタンではタシケンバエフ一家の綱渡りは有名だ。このサーカス一家は大昔から代々、綱渡りの技を守り伝えて来た。

その昔、サーカス芸人たちは小さな集団を組んで旅をしながら、人が大勢集まるバザールや広場で芸を披露していた。タシケンバエフ家の現在の世代は、大理石や彫刻で飾られた巨大なテントのようなタシケントの新しいサーカス場の建物の中で、毎晩2000人の観客のまえで出演している。

だが祭りの日ともなると、昔と同様に、大勢の人が集まる場所に綱を張って、芸を披露する。観衆はその美しさ、力、勇気にやんやの喝采を送る。タシケンバエフ一家の軽快で優美な技は、人間の可能性には限界がないことをいま一度証明している。



綱渡りは中央アジアの祭日の最大の呼びもの。



第9回ソ日沿岸市長会議の会場風景

有益だった市長同士の対話

――第9回ソ日沿岸市長会議

極東担当本誌記者　アナトリー・イリユーホフ
カメラ　V・ベロボロフ

7月8日から10日まで、ハバロフスク市（ソ連極東）で第9回ソ日沿岸市長会議が開かれた。これはソ連の極東および東シベリアの各市人民代議員ソビエト執行委員会議長（市長）と日本の日本海沿岸諸都市の市長が1年おきにソ連と日本で交互に開くもので、今回の議題は――「平和と緊張緩和のためのソ日善隣関係と協力の発展における姉妹都市の役割」、「現代都市の水供給と水資源保全の問題」、「都市は身体障害者の社会生活をどのように保障しているか」だった。

一九七〇年からソ連と日本で交互に開かれているこの会議はすでに伝統になった。会議の端緒になったのは、都市の姉妹関係を結ぼうという運動である。現在すでにソ連極東と東シベリアの12の都市が日本の諸都市と姉妹関係を結んでいる（ポロナイスク＝北見、ネベリスク＝稚内、ホルムスク＝釧路、ユジノサハリンスク＝旭川、ナホトカ＝舞鶴、小樽、敦賀、ハバロフスク＝新潟、イルクーツク＝金沢、ブラーツク＝七尾、シェレホフ＝根上、ウランウデ＝留萌、ジェレズノゴルスク・イリムスキー＝酒田）。この結びつきを発展させ、長期の強固な基盤の上に打ち建てるために、ソ連対外都市交流連絡協会ハバロフスク支部と日ソ沿岸市長会が設置された。

この会議は沿岸貿易、保健、国民教育、社会保障、公共事業の当面の諸問題、善隣関係の強化など、広範囲な問題を討論する。

主要なテーマは善隣

会議の参加者は全面的な友好・経済・貿易交流と日ソ善隣関係を強化する問題に主要な注意を払った。このテーマで報告したのは、双方の代表団長――アレクサンドル・パンチェンコ・ハバロフスク市長と若杉元喜・新潟市長で、町井正登・舞鶴市長、ニコライ・ブハンツォフ・ナホトカ市長、浜森辰雄・稚内市長、ワジム・ウベーエフ・ウランウデ市長、佐藤貞治・酒田市助役、高木孝一・敦賀市長もそれぞれ報告した。

報告者は姉妹都市間の交流の発展を分析し、議員、医師、教師、子どもの美育担当教師、公共事業担当者の代表団の不断の交流が大切だと指摘した。

アレクサンドル・パンチェンコ団長は次のように語った。「姉妹都市間の交流は、さらに一層規模の大きな、安定したものにすることができます。私の見解では、都市建設、緑化、都市の大気保全、工場騒音防止対策、都市交通の安全性の組織といった重要な面についても情報を交換すれば非常に有益でしょう。

就学前教育や学校教育の組織、教育機器の利用、子どもたちの夏季休暇の組織、学生たちの技術的、芸術的創造といった分野も、教育面での協力の領域にすることができるでしょう」



報告するアレクサンドル・パンチェンコ・ハバロフスク市長

報告する若杉元喜・新潟市長





ハバロフスク市の新しい団地を視察。

パンチェンコ団長の意見によれば、文化と芸術の分野でも広範な活動舞台がある。民芸展や工芸展の交換、ソ連国民と日本国民の生活と風俗、民族芸術、両国の動植物相などの記録映画や長編映画の交換などがそれである。

「日本海を〝平和と友好の海〟に変えることを望んでいる私たち、姉妹都市の代表こそ、平和の強化にどのような寄与ができるかを真剣に考えなければなりません」と、若杉元喜・新潟市長は語った。

若杉市長はさらに続けた。「一九六三年に始まった沿岸貿易は、双方の協力の重要な形態です。当時相互供給量はわずか一三〇万ドルにすぎませんでしたが、一九八〇年には一億ドルの大台を超えました。私の見解では、日ソ両国には沿岸貿易ばかりでなく、国家貿易の対象になるような商品がまだ沢山あります。

私はバム鉄道の建設が完了すれば、ソ連の貨物だけでなく、日本の貨物の輸送量も著しく増大すると確信しています。私たちはまた、バム鉄道が営業を開始し、欧州から日本や他の太平洋地域諸国に貨物を運ぶ最短で確実なルートになる日を首を長くして待っています。私たちの考えでは、日本海沿岸の貿易、港湾、輸送の各関係者が参加する〝バム鉄道とソ日関係の将来〟というテーマの独立シンポジウムを開くことが目的に適っているでしょう」



ハバロフスクの民俗博物館で



友好都市の関係にあるネベリスク市と稚内市のウラジーミル・ザハルキン市長と浜森辰雄市長



ハバロフスクの名所を見物する一行

秘密のない対話

日本側参加者の意見によれば、ビタリー・コルシュノフ・ブラーツク市長が行った報告「現代都市の水供給と水資源保全の問題」とユーリー・シクロパト・イルクーツク市長の報告「都市

は身体障害者の社会的生活をいかに保障するか」は非常に興味深かった。

ブラーツク（東シベリアの大工業中心地）を例にとってビタリー・コルシュノフ市長は、市のすべての企業に設置されている工場廃水と大気の質を監視する自然保護・衛生監視課の仕事ぶりについて語った。たとえば世界最大のブラーツク林業コンプレクスの建設過程では、この巨大な木材化学企業の廃水を生物学的に浄化するための追加の措置も採択されたが、これはもちろん多額の国家支出を必要とした。

厳重な監視のおかげで、ブラーツクのどの工業企業も水域に害をもたらしていないとコルシュノフ市長は話を結んだ。

ユーリー・シクロパト・イルクーツク市長の報告から日本側参加者は、ソ連のすべての身障者が国の扶助を受けており、毎年サナトリウや保養地で治療するための利用券が特恵条件で支給されていることを知った。ソ連では家賃が世界で最も安いにもかかわらず、身障者にはその家賃も50％割り引かれる。身障者の多くには、自動車が個人的な利用のために無料で提供されている。特に、身障者のために軽作業の仕事場が設けられ、賃金のほかに国の手当も全額が支給される。



第9回ソ日沿岸市長会議の議題となった問題にかんする発言を総括して、若杉・新潟市長は次のように指摘した。

「私たちの伝統的なこの会合の歴史は、どんな社会的テーマでもソ日両国の代表団にとってはつねに興味深く、お互いからあらゆる良いものを学び取るのに役立っていることを確信させてくれます」

接触の強化に賛成

今回の会議の結果、参加者は相互の経済・貿易協力、友好関係の発展の一連の新しい局面を指摘した。ソ連の代表団は日本の市長たちのすべての提案を受け入れ、シンポジウム「バム鉄道とソ日関係の将来」を開催する考えに賛同した。



レニングラードのピスカリョフ記念墓地を詣でた一行

採択したコミュニケの中で双方は、複雑化した国際情勢のもとでは諸問題を平和的に解決し、軍拡競争に反対して闘い、平和擁護のために一貫して闘うことが重要である、と指摘した。

双方はまた、姉妹都市間の接触の一層の強化、経済・文化交流の発展、特にソ連の極東、東シベリアと日本の日本海沿岸地域との間の沿岸貿易や輸送関係の発展を促進する必要性を認め、公共事業の運営の経験を利用することに賛意を表明した。

会議参加者は今回の話し合いを次のように評価している。

ニコライ・ブハンツォフ・ナホトカ市長――「私たちは自分たちの権限内にある現実的な展望について具体的な、実務的な会話を行いました」

町井正登・舞鶴市長――「会議は好意的な、誠実な雰囲気の中で行われました」

浜森辰雄・稚内市長――「双方から経済・貿易・文化協力にかんする現実的な提案が少なからず出されました」

双方の代表団は次の会議を一九八五年に日本で開くことに合意した。

右　レニングラードのスモーリヌイにあるレーニンの執務した部屋で。一九一七年の10月革命の時、レーニンはここから指揮を取った。



レニングラードのエルミタージュ美術館で

ハバロフスクでの会議の終了後、日本の代表団はモスクワとレニングラードを訪れ、名所旧跡を見物し、現地の当局者や社会団体の代表と懇談した。



日ソ漁民の利益は共通

——札幌でソ連漁業展開催

本誌記者 V・デウーリン



本誌17号で概要をお知らせした「ソ連漁業展」の開会式が8月26日、札幌の北海道日ソ友好文化会館で盛大に行われた。開会式には横路孝弘北海道知事をはじめとする道庁の代表、北海道および札幌の社会団体、漁業団体の代表など三〇〇人以上が出席し、ソ連側からは代表団長のボリス・モナコフ・ソ連漁業次官、ユーリー・ルドネフ在札幌ソ連総領事その他が参加した。

この漁業展は北海道日ソ友好文化会館、北海道新聞社、北海道日ソ水産親善友好協会が主催、北海道水産会、北方圏センター、ソ連漁業省が後援した。

柴野安三郎・北海道日ソ友好文化会館理事長は開会式参列者にあいさつし、ソ連漁業展は北海道漁民にとって重要なエベントであり、日ソ間の善隣関係発展の高潔な事業に間違いなく貢献するだろうと述べた。

▲会場に展示されたアザラシやオットセイのはく製

モナコフ次官は、漁業展の開会式に寄せたカメンツェフ・ソ連漁業相のメッセージを日本側に手渡した。

開会式の後、モナコフ漁業次官に本誌記者がインタビューした。

——漁業の分野におけるソ日関係について言えることは？

日本で初めて「ソ連漁業展」という専門分野の展覧会が開催されたことは偶然ではありません。これは両国間に存在する伝統的で、しかも極めて実り多い関係の延長です。



▲ソ連漁業展のテープカット。右から気境・北方圏センター副会長、ルドネフ在札幌ソ連総領事、モナコフ・ソ連漁業次官、柴野・北海道日ソ友好文化会館理事長、横路・北海道知事、杉本・札幌市秘書部長、石崎・北海道水産会会長、阿部・北海道新聞社事業局長。

日本とソ連は世界有数の漁業国です。だから私たちは、日本との漁業関係の発展に特別な意義を与えています。日ソ両国の漁業は技術水準が高いことと総合的に発展していることが特徴です。ソ連の岸を洗う太平洋北西部、オホーツク海、日本海は世界の海洋でも漁業資源が豊富な地域の一つです。全海洋面積の1/9以下しか占めていませんが、この水域からは約二〇〇〇万tの水揚げがあり、それは世界の全漁獲量の27%にあたります。そしてここで主に操業しているのはソ連と日本の漁民です。両国の漁船団は同じ種類の魚を取っており、漁獲の良し悪しはしばしば両国の共通の関心事になっています。そのため両国の学者は協力して、さまざまな現象の原因を分析し、予測し、勧告を作成しなければならなくなっています。

——ソ連と日本の漁民の具体的な協力の例は？

ソ連漁業省は日本の水産会社——日魯漁業、大洋漁業両社と協力して成果を挙げています。極東地域における共同のカニ・エビ漁には日本の専門家が参加しています。

日本の大水産企業だけでなく、中小

の漁業会社とも協力を進めており、例えば横浜通商、エルベ通商その他、約20の中小商社、漁業協同組合が共同のカニ・エビ漁に積極的に参加しています。

昨年はソ連漁業省の許可を得て、三三〇隻の日本漁船がソ連領海のシグナリヌイ島水域でコンブ漁を行いました。

ソ連と日本の専門家たちは北西太平洋でサバ、サンマ、イワシその他の漁業資源量を確定するための共同作業を行っています。

——今回のソ連漁業展についてもっと詳しく話してほしい。

ソ連漁業展はソ連の漁業のさまざまな面について詳細に説明する14のコーナーからなっています。伝統的な漁業機械や漁業船団のコーナー、魚や水産物加工用設備のコーナーのほかに、ソ連漁業展では魚族資源と海洋哺乳類の保護と再生産、バイカル湖の漁業利用、ソビエト水産学などのような私たちの活動分野が広範に紹介されています。

ソ連漁業展の入場者は、高度に発達した経営の一つ——エストニア共和国のバルト海沿岸にあるキーロフ記念漁業コルホーズを例にして、ソ連における漁業の組織を詳細に知ることができたと思います。このコルホーズは造船所と船舶修理所、設計部と工場を所有しています。ここの工場では最新式の魚類加工設備が、コルホーズ自体の必要のためだけでなく、他の企業の注文にも応じて製造されています。

——漁民の仕事には科学技術がますます強力に浸透しているが、それでも人間の問題、人間の養成、人間の労働と休息の組織の問題は恐らく重要な問題であり、それを解決することによって、生産課題をもっと効果的に遂行することができる。ソ連の漁業ではこの問題はどのように解決されているか？

まさにこの点を取り上げているのがソ連漁業展の二つの特別コーナーで、



ソ連漁業展が開かれた札幌の北海道日ソ友好文化会館

ソ連における漁業関係者の養成制度とソ連の漁民の労働、生活、休息の組織を紹介しています。

ソ連の漁民の生活条件はつねにソ連政府の配慮の中心に置かれています。わが国の漁船団は、世界で最も快適な生活が保障されている漁船団の一つと見なされていますが、それは正当な評価です。乗組員は1人用または2人用船室に住んでいます。広いサロン、集会室、図書室、映画・コンサート・ホールを乗組員は自由に使えます。すべてのソ連国民がそうですが、漁民も無料の医療サービスを受けています。約一五〇〇人の医師——内科医、外科医、歯科医が船の上で漁民に奉仕しています。

次の出漁までの余暇に、漁民は快適なホテルや休息の家を自由に利用でき、そこへ家族を呼ぶこともできます。

私たちはソ連漁業展がソ日両国漁民間の友好関係の一層の発展を促進し、ソ日両国国民間の友好強化の新たな一歩になることを期待しています。

催し物のお知らせ

☆ブリャート自治共和国・歌と踊りのアンサンブル〝バイカル〟公演

伊東市観光会館（9月16日）、小樽市民会館大ホール（21日）、苫小牧市文化会館（22日）、ホテル・セプアス室蘭（23日）、稚内市体育館（25日）、名寄市民会館（26日）、札幌・道新ホール（27日）、二戸市立文化会館（28日）、喜多方厚生会館（29日）。

▽お問い合わせは、日ソ親善協会（電話03・261・4897）へ。

☆タジク放送舞踊アンサンブル〝ゼボ〟公演

練馬文化センター（10月7日）、多摩学院（8日）、大阪城・築城400年祭参加（9日）、福岡・勤労青少年文化センター（13日）、熊本県立ホール（15日）、鹿屋文化会館（16日）、宮崎県民文化ホール（18日）。

▽お問い合わせは、日ソ親善協会（電話03・261・4897）へ。

☆現代ソビエト映画「新しい家族」の上映

イスクラ・バービッチ監督作品、1982年ベルリン国際映画祭審査員奨励賞、1982年バンクーバー国際青少年映画祭審査員特別賞。

ソビエト2大女流監督特集①として、10月1日から東京・神田神保町の岩波ホールで上映（10月16日は休館）。

▽お問い合わせは、岩波ホール（電話03・262・5252）へ。

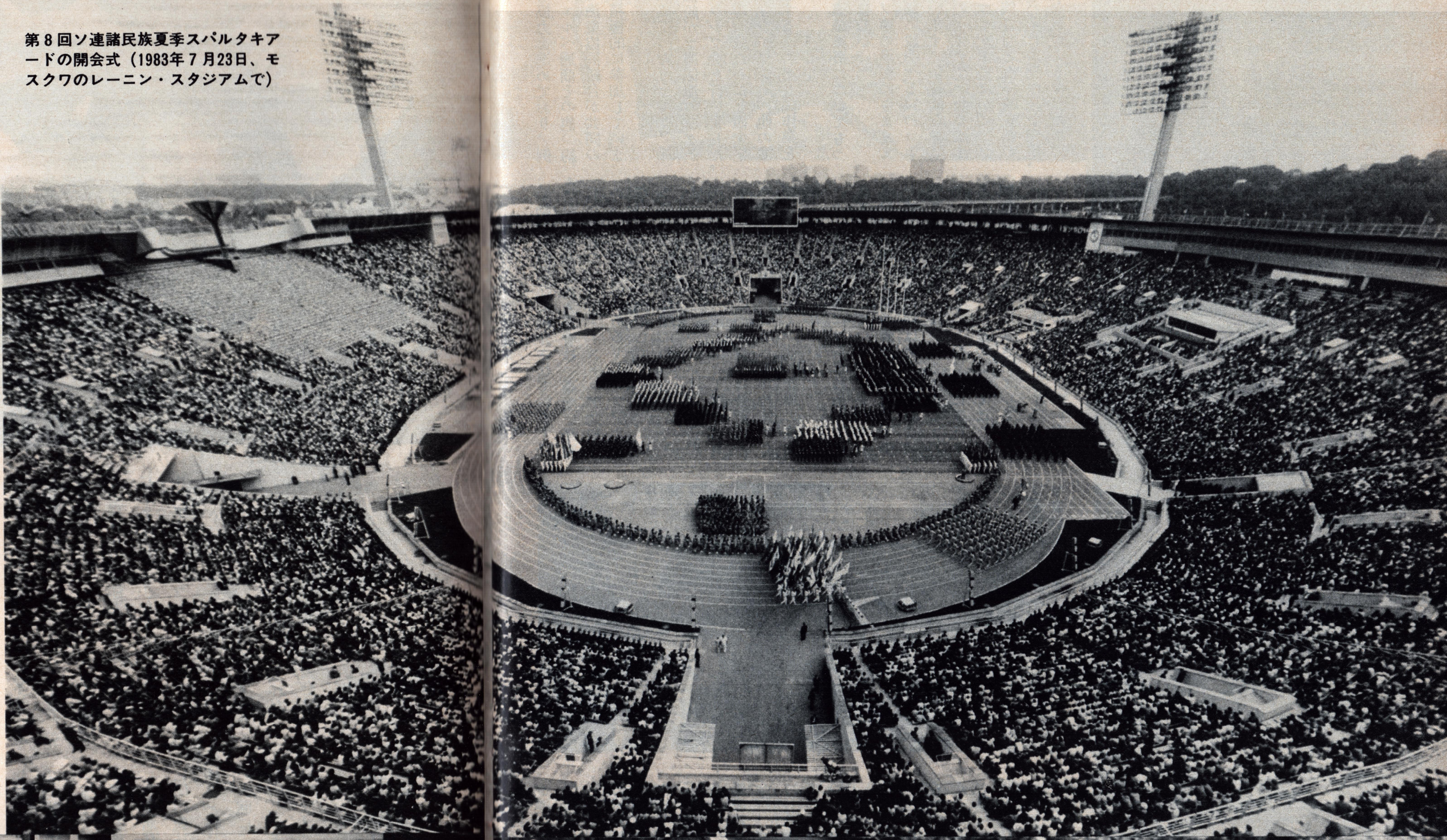
閉幕した第8回ソ連諸民族スパルタキアード

本誌スポーツ解説記者
アレクセイ・スレプニツキー
カメラ
D・ドンスコイほか

8月6日、モスクワで第8回ソ連諸民族夏季スパルタキアード決勝大会の閉会式が行われ、7月23日から2週間にわたって約一万人の選手たちがさまざまな種目で熱戦をくり広げたイベントに幕が下ろされた。

ソ連最大のスポーツ行事

2週間にわたって、と言っても、これはあくまでもスパルタキアードの決



第8回ソ連諸民族夏季スパルタキアードの開会式（1983年7月23日、モスクワのレーニン・スタジアムで）

1　新たに競技種目に加わったかじ付きフォア

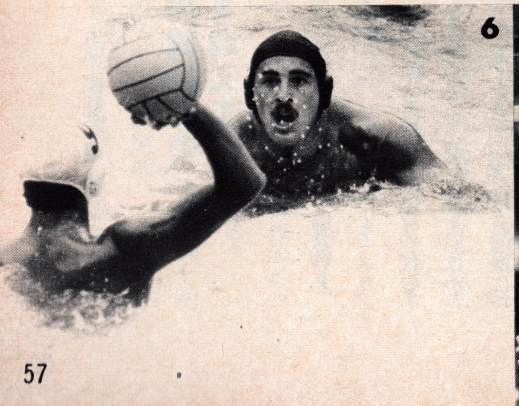
2　トータル365kgのソ連新記録で優勝したミドル級のウラジーミル・クズネツォフ

3　フルーレのアレクサンドル・ロマニコフ対ボリス・コレツコフ戦

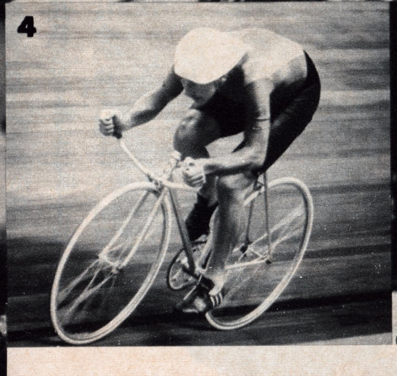
4　自転車4000m個人追い抜きで優勝したビクトル・クポベツ

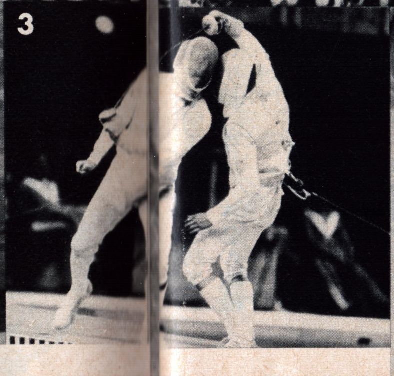
5　対モスクワ戦で活躍するリトワ・チームのセンター、アルビダス・サボニス。

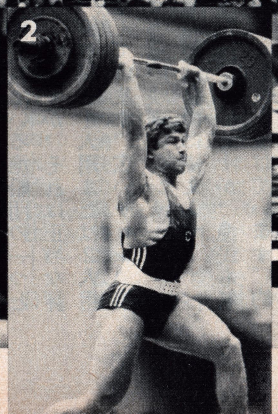
6　水球のモスクワ対カザフスタン戦。こちらを向いているのは本誌前号で紹介したゲオルギー・ムシベニエラーゼ選手。


6

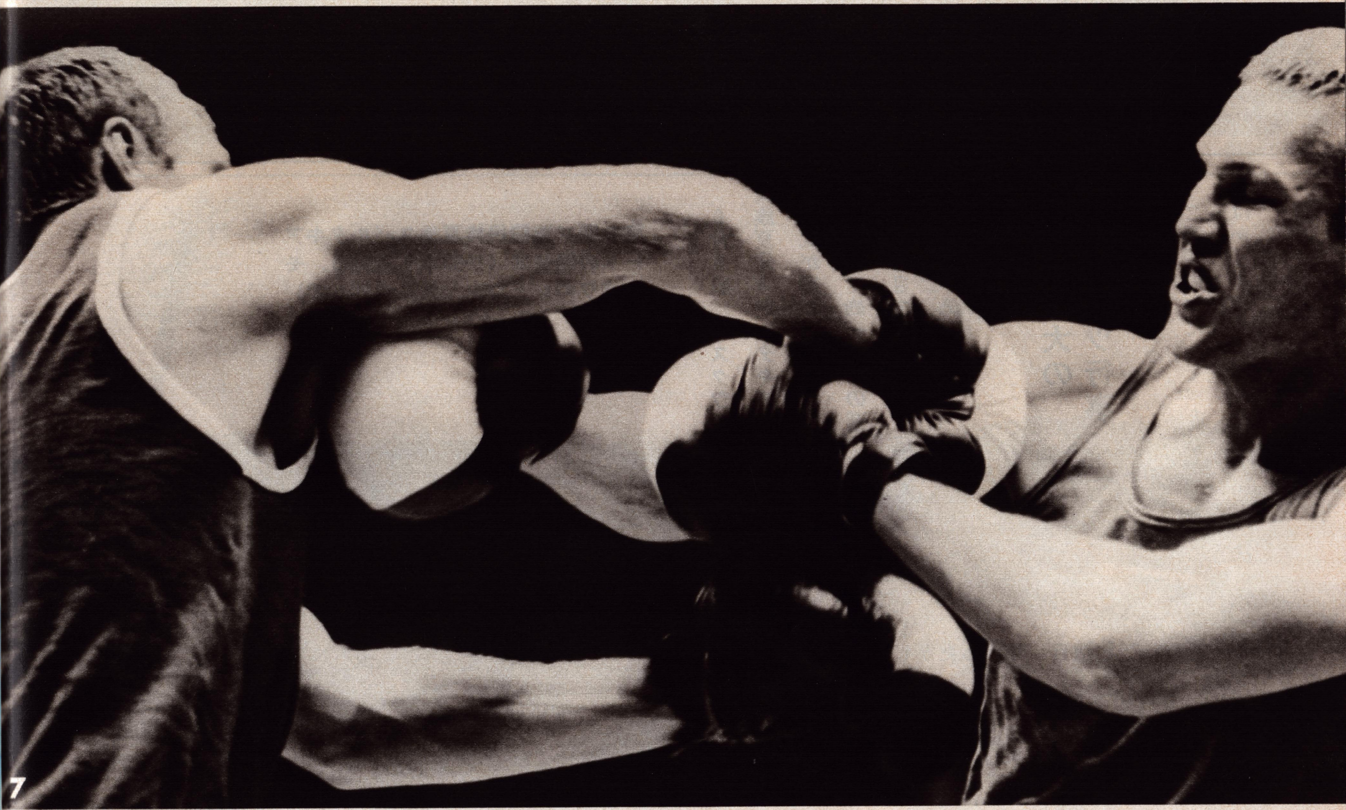

5


4


3


2


1



勝大会のことであり、最も初歩的な予選の段階から数えれば、スパルタキアードはほぼ2年にわたって行われたことになる。この間、二三万四〇〇〇の体育集団やスポーツクラブの九五〇〇万人が、さまざまなレベルの競技会に参加した。国内オリンピックとも呼ばれるソ連最大のこのスポーツ行事の特徴は、実質的には国民の$\frac{1}{3}$がこれに参加することにある。

段階を経るごとに、より優れた選手が登場し、その中から最も強い選手、最も立派な選手が決勝大会に出場する栄誉を手に入れる。スパルタキアードの決勝大会は、ビッグ・スポーツへの登竜門である。今回も、ほとんどすべての種目で、才能ある新人が現れた。たとえば、レスリング・フリースタイルのアルセン・ファザエフとアレクサンドル・ドルジュ、自転車競技のビクトル・クポベツ、卓球のイオランタ・ダニリャビチュチェなどがそれだ。

スパルタキアードの決勝大会は4年に1回、オリンピックの前年に行われる。ここにも、この大会の目的の一つがある。オリンピックを目ざす選手たちがここで力試しをし、専門家がナショナルチームの候補を選ぶのである。

国内競技会の枠を越えて

ソ連のいくつかの都市で同時に行われる決勝大会には、各共和国とモスクワ、レニングラード両市の計17の代表チームが参加する。ソ連の選手のほかに、今回も一九七九年の大会と同様に、日本を含む56カ国から約七〇〇人の外国人選手が参加した。外国人選手の活躍も目ざましく、たとえばドイツ民主共和国が3、ブルガリアとキューバが2、朝鮮民主主義人民共和国、ナイジェリア、エチオピアが1、それぞれ金メダルを獲得した。

ソ連諸民族スパルタキアードはすでに国内競技会の枠を越えて、国際的な性格を帯びている。このことは、今度の大回に二〇〇人以上の来賓が参加したことによってもうなずける。来賓の中にはファン・アントニオ・サマランチIOC会長をはじめ、一連の国々のスポーツ大臣、さまざまな国際スポーツ連盟やスポーツ団体の会長の姿も見えた。サマランチIOC会長は記者会見でスパルタキアードの成功を指摘し、次のように強調した。

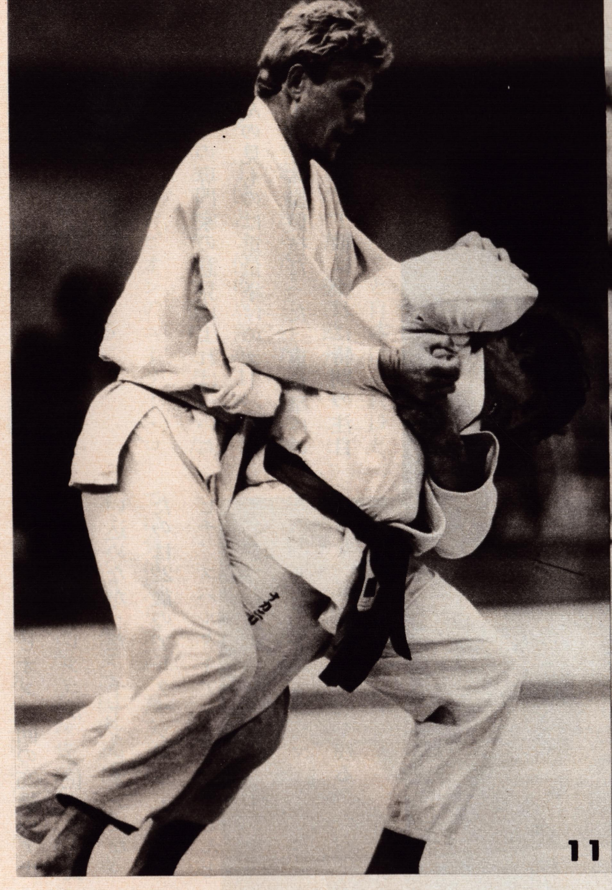
「最近のスパルタキアードが国際的な性格を帯びていることは、まったく正しい。この大会によって選手たちは、オリンピックの1年まえに、優れたライバルたちと、しかもすばらしい条件のもとで、力を試すことができる」

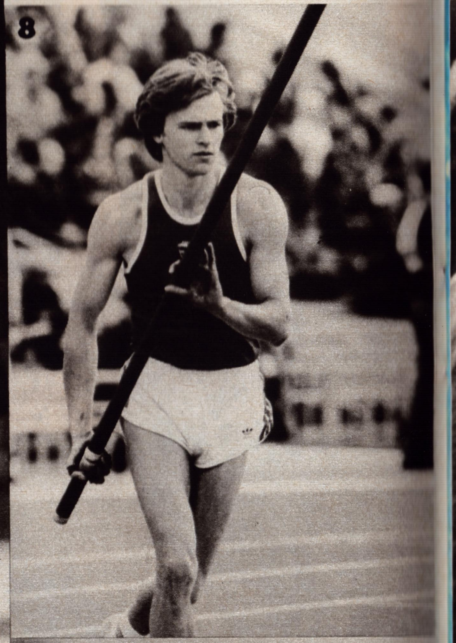
続出した新記録

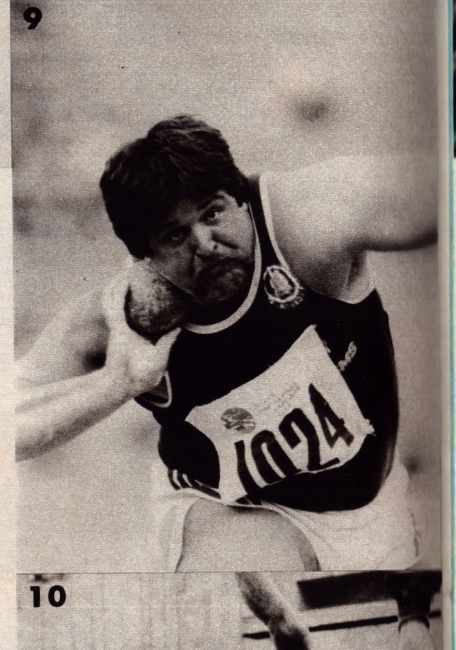
第8回スパルタキアード決勝大会では、種目が増えて、オートバイ競技や飛行機競技などを含む32種目が争われた。前回の一九七九年の大会に比べると、テニス、シンクロナイズドスイミング、女子ホッケー、女子マラソン、ボートのフォアが新たに加わり、ボクシングで初めて91kg超級が設けられた。争われたメダルは、4年まえより21組多い二四六組。ちなみに最近のモスクワ・オリンピックでは、21種目、二〇三組のメダルが争われた。

決勝大会では、ほとんど毎日新記録が生まれた。全部で22のソ連新記録、二一一のスパルタキアード新記録、三〇〇以上の共和国新記録が樹立されたが、そのうちの17は世界記録を上まわった。

87都市の選手が金メダルを獲得し、チャンピオンが生まれない共和国が一つもなかったのは特徴的である。スパルタキアードは、全国至るところで何がしかのスポーツが発展しており、それが大きな成果をあげ、ナショナルチ









7 ライトヘビー級の準々決勝
8 棒高跳びで優勝したウラジーミル・ポリャコフ
9 20m62のスパルタキアード新記録で優勝したヤニス・ボヤルス
10 サンボ競技は軍中央クラブ（ツェスカ）の室内競技場で行われた。
11 78kg以下級はグルジアのショタ・ハバレリ（右）が制した。

ームの要員を安定して補充していることを示した。たとえば、ロシア連邦共和国が獲得した14の金メダルのうちの4つはシベリアとソ連極東の選手の活躍によるものだった。

いくつかの番狂わせも

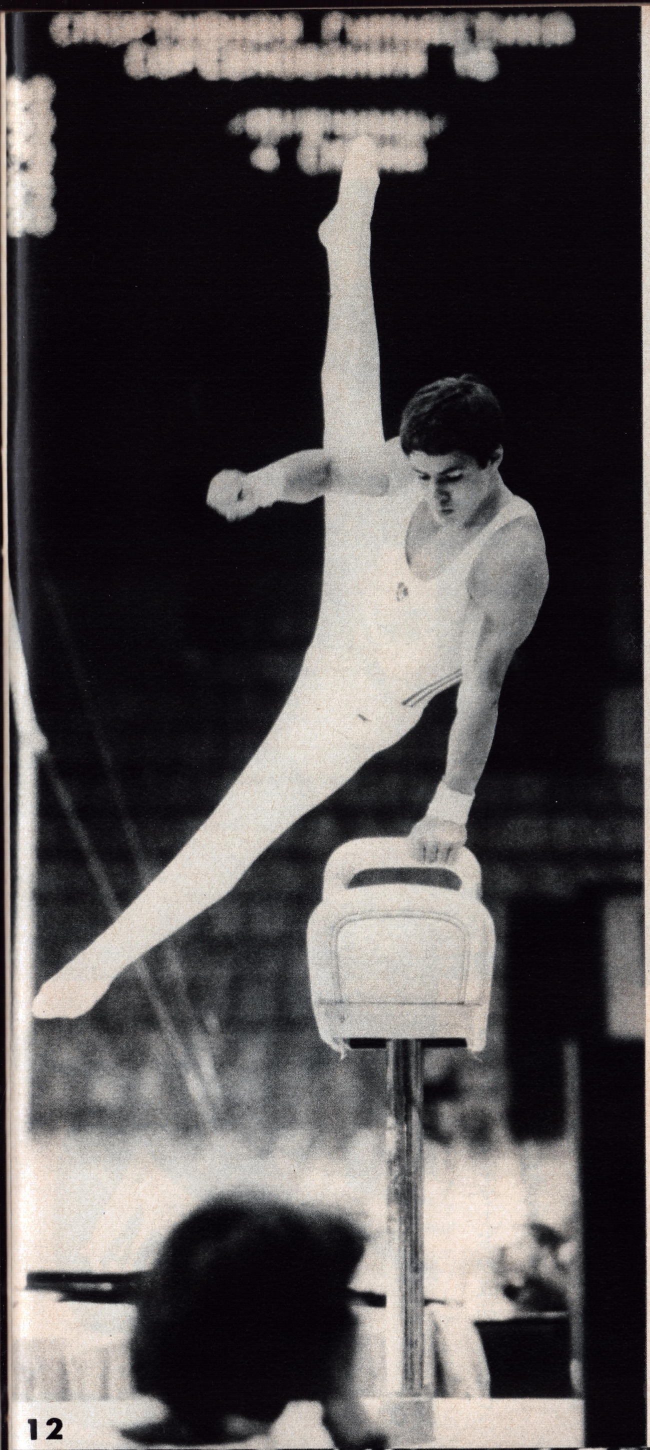
多くの専門家の意見によれば、いちばんの見ものは重量挙げのスーパーヘビー級と体操競技だった。重量挙げのスーパーヘビー級はつねに特別の注目の的である。このクラスで人類一の力持ちが生まれるからだ。しかも、必ずと言っていいほど新記録が樹立される。

今回もまたハプニングが起きた。これまですべての世界記録を独占していた世界チャンピオン2回の25歳のアナトリー・ピサレンコが、2位にしか食い込めなかった。チャンピオンになったのは22歳のアレクサンドル・クルロビチ。スパルタキアードまでほとんど無名だったクルロビチは、トータルで四六〇kgの世界新記録をマークした。ピサレンコはこの大会で残る2つの世界記録も破られた。23歳のアレクサンドル・モシビトがスナッチで、22歳のセルゲイ・ジディクがジャークで、それぞれ記録を更新したからである（二〇五・五kgと二六一kg）。

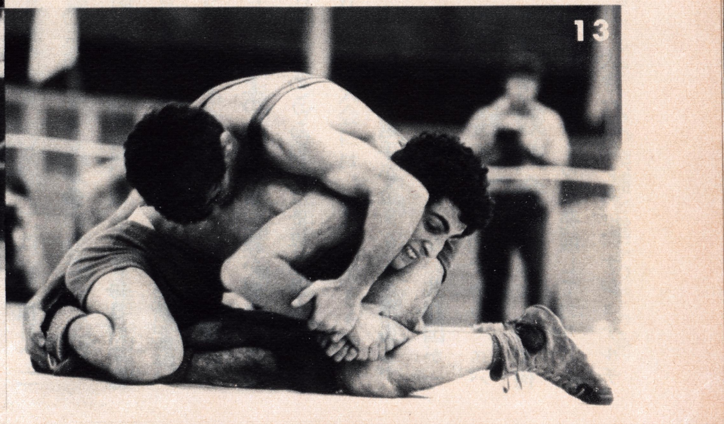
伝統的に華やかな種目である体操でも意外な結果が生じた。男子個人総合で優勝したのは16歳のモスクワっ子ドミトリー・ビロゼルチェフ（ついでながら、彼は女子世界チャンピオンのオリガ・ビチェロワと同じ学校の生徒）。このような若い男子チャンピオンはソ連では初めてである。だが、ビロゼルチェフが優勝したこと自体はそれほど驚きではなかった。彼は欧州チャンピオンでもあるからだ。意外だったのはむしろ、1位と2位の点差が1・5も開いたことであり、2位にとどまったのが世界チャンピオンのユーリー・コロリョフだったことである。

16歳のオリガ・ビチェロワが試合の直前にケガをして欠場した女子体操では、ナタリア・ユルチェンコが大活躍。総合でも種目別でもすべての種目で高い得点を出した。もちろん、彼女の活躍を予想外と呼ぶわけには行かない。この1年半、ユルチェンコは国内試合では負け知らずだったからだ。とはいえ、この間、彼女は国内試合では一度もビチェロワと顔を合わせなかった。ビチェロワとは一九八二年のワールドカップでは優勝を分け合い、今年の春の欧州選手権では負けている。

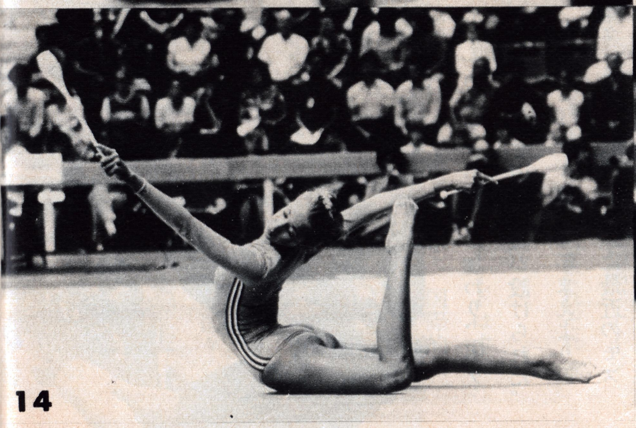
スパルタキアード決勝大会の団体総合成績では前回同様、ロシア連邦チームが1位、ウクライナ共和国チームが2位、モスクワ市チームが3位だった。しかし、個々の種目では話題は少なくなかった。たとえば、男子のバスケットボールとハンドボールではウクライナ・チームが、サッカーではリトワ・チームが、卓球ではアルメニア・チームが、クレー射撃ではアゼルバイジャン・チームが優勝したが、いずれも有力視されていなかったチームである。



12 男子個人総合優勝のドミトリー・ビロゼルチェフは16歳



13 フリースタイル52kg級で優勝したノブルゾフ（アゼルバイジャン）



14 新体操、スサン・ギルエン（スペイン）のこん棒の演技。



15 女子個人総合ではロストフ・ナ・ドヌー市の18歳の大学生ナタリア・ユルチェンコが優勝した。



16 女子バレーボールではキューバが優勝。2位モスクワ、3位ウクライナ。

開会式のマスゲーム





サハリンを訪れた「道民の船」

極東駐在本誌記者　アナトリー・ミハイロフ　　カメラ　V・サチェク

7月25日から31日まで日本の「友好の船」（第3回「道民の船」＝団員一二一名、日ソ協会北海道連合会企画、秋月正夫団長）の一行がサハリン各地を訪問した。

代表団幹部や日ソ協会活動家は、ピョートル・トレチャコフ・ソ連共産党サハリン州委員会第一書記やニコライ・グリジャエフ・ソ日協会サハリン支部長・サハリン州労働組合評議会議長と会見した。双方ともサハリン州と北海道との友好関係、沿岸貿易、経済協力をぜひとも発展させなければならないと熱を込めて語った。

「道民の船」の団員たちは見学や会見を通じて、サハリンの都市建設の成果や海運・漁業の発展ぶり、労組の活動などを知った。

団員たちはソ連の人々の生活の社会面にとくに強い関心を寄せた。具体的例としてホルムスクのサハリン船舶公社のサナトリウム＝予防病院を見学したさい団員たちは、公社の管理部と労組が海員に対して行きとどいた配慮をしていることや十分に休息できる条件が整っていること、サナトリウムの療養治療費の本人負担分は実費の一割で、残りは労働組合と管理部が負担することなどを知った。

また団員たちはユジノサハリンスク市の「シネゴロスキエ鉱泉」サナトリウムを訪れた。ここは年間約三〇〇〇人が療養に訪れるが、療養者の半数余りは実費の1/4という特典つきの利用券を使っている。

ネベリスクではサハリンの漁船で働く専門家を養成する航海学校の生徒たちとの会合が行われた。客たちは航海学校の全生徒が、ソ連の他の若干の学校の生徒と同じく、全額国費で勉強しているだけでなく、奨学金をもらっていると聞いてとても驚いていた。

ユジノサハリンスクの文化会館で開かれた「ソ日親善の夕べ」であいさつに立った秋月正夫氏は「ソ連の人々が日本国民と平和に仲よく暮らし、互恵の貿易をやり、科学と文化の成果を交換したいと望んでいることが、あらためて分かった。団員の漁民、教師、医師、学者たちはソ連の同じ職業の人々と交流し、あれこれの経済部門や海運、保健の発展ぶりを知ることができた」と語った。

次に団員のサハリンの印象を二、三紹介すると——

竹本弘光氏（紋別市、漁業）——「ネベリスクで、ソ連の漁民に対する国の心くばりが大したものだということがよく分かった。漁民のために設備の完備したすばらしい家が建てられ、よい生活、休息、学習のためのあらゆる条件がつくられている……」

足立笑子さん（札幌市、スナック経営）——「商売柄言っておきたいが、サハリンにきてから食べた料理はいつもおいしくて、種類も多く、すばらしかった。とくに多くの人は、魚料理がよかったとし、スナックやレストランのメニューの品数も沢山あってすてきだったと言っている」

中本信幸氏（神奈川大学教授、チェーホフ研究家）——「私はチェーホフのサハリン紀行のときの珍しい資料や写真を見ることができた。ユジノサハリンスクでチェーホフのサハリン紀行を研究している現地の作家の方々と会っていろいろ得るところがあった。サハリン紀行の時期のチェーホフに関する新しい重要な事実を沢山知ったので、大学の講義に生かしたい……」







1　トレチヤコフ・ソ連共産党サハリン州委員会第一書記（左端）と会談する日ソ協会道連の活動家

2　ユジノサハリンスクのチェーホフ記念図書館には日本関係の図書が展示されていた。

3　現地の作家たちと懇談する中本神奈川大教授

4　「シネゴルスキエ鉱泉」サナトリウムを見学

生産設備改修の効果が出はじめたソ連経済

ノーボスチ通信解説記者　ビクトル・スタロスチン

ソ連経済の集約的運営への改造は、工業の全般的な改修と技術更新を前提にしている。現在、事実上すべての古い企業が改修の対象になっている。個々の部門では毎年、その部門の発展のために投入される資金の70−80%までが改修のために使われる。

もちろん、改修は新規の建設を妨げない。一九八一−八五年度および一九九〇年までの期間のソ連の経済・社会発展の基本計画にはこれについて次のように書かれている——「生産設備の改修と技術更新を考慮しても、生産施設の利用の改善によって当該の製品に対する国民経済の需要がみたされない場合には、新しい企業の建設と既存の企業の拡張を開始する」

ソ連が工業発展の戦略を変えたのは、当然の理由からだった。この10年間の経験は、単に企業数を増やすことでソ連の工業力を増大させようとしても、もはや社会的総生産の高い安定したテンポを保障できないことを示した。例えば、一九七一−八〇年にソ連では大工業企業が三二〇〇以上、すなわち以前のどの10年間よりも多く建設されたにもかかわらず、社会的総生産の伸び率は下がった。従って伸び率を以前の高い水準に保つためには、さらにずっと多く建設しなければならないが、それは当然ながら可能性の限界を越えている。

生産設備をこれ以上量的に増やせば、新旧企業間の技術水準と労働条件の格差が広がる。これに、国内に蓄積された古い生産フォンドが膨大な人的資源、財源、物的資源を抱え込んでいることを付け加えなければならない。工業を一新させるための仕事に、約二五〇〇万人の熟練労働者が従事し、一五〇〇万台の金属切削工作機械、すなわち金属加工業の主要な工場にあるのとほぼ同じ台数が使われたのは、まだそれほど遠い昔のことではない。

改修と技術的再編成に投じられる資金の償却が速いという要因も、これに有利に作用している。さらに、改修された企業では、通常、労働生産性が著しく向上し、製品の質が高まり、労働条件が改善される。

要するに、改修のメリットははっきりしている。しかし改修工事のために生産が停止すれば、まして大企業の生産が停止すればなおさら、経済のスムーズな関係が乱れる。当然ながら計画機関はそれに異議を唱えた。これとは別の道——操業を続けながらの改修は、各企業にとって余分な負担に変わった。企業はおいそれとそれを引き受けるわけには行かなかった。企業は依然として、何よりもまず本来の仕事に責任を負わされていたからである。

しかしたとえある企業集団が、生産を停止することなしに改修を行う決心をしたとしても、引き受け手を探すのは容易ではなかった。というのは、建設者たちは必ずしも快くこの仕事を引受けてくれなかったからである。この仕事は通常、極めて手間がかかり、新規の建設よりも賃金が低かったからである。

これらすべての要素を考慮に入れて、政府は改修作業の組織の改善を目的とした一連の措置を採択した。現在これらの措置は計画に組み込まれ、企業の基本的な活動として財源と物質的資源を保障されている。

他方では、改修は建設者にとっても有利になった。建設者の利益のために、このような仕事の見積もり価格係数が引き上げられ、時間の規準が再検討された。いま改修に従事するものの労働報酬は25%高くなり、特に条件の悪い工場では40%も高くなった。

この新しい、より魅力的な条件下で、ソ連工業の更新計画は再び活気を取りもどした。いま多少なりともこの過程に巻き込まれていないような企業は事実上一つもない（言うまでもないが、最近建設されたばかりの新しい企業を除いて）。

結果はどうかといえば、極めて印象的である。幾つかの例を挙げよう——ソ連最大の織物産地——イワノボ州（ソ連欧州部の中央）の49の工場とコンビナートの改修は、事実上生産を停止することなしに完了した。改修の過程で、六万以上の各種新工程設備が設置され、一二万六〇〇〇の機械が近代化された。現在、事実上同じ生産面積で以前よりも25%多く製品が生産されている（より少ない従業員数で。これは、この経済地区では労働力が不足しているので特に重要である）。そのほか、紡績女子工員や織物女子工員の労働条件が改善され、彼女たちの賃金は約60%増えた。

スベルドロフスク州（ウラル）では企業の改修の結果、生産が50%増加し、費用は五億ルーブル節約された（新規に建設した場合と比べて）。

このような例はほかにももっと挙げることができる。現在更新の時期に入っているのは、鉄鋼業と非鉄金属工業、採掘工業と食品工業、農業部門、特に畜産である。この全国的な計画が完了すれば、ソ連工業は質的に新しいものに生まれ変わるだろう。

差別のないソ日貿易を

——スシコフ・ソ連貿易次官に聞く

さる2月下旬永野重雄氏を団長とする日本の貿易経済代表団が訪ソしてから半年余りになるが、ノーボスチ通信記者はV・N・スシコフ・ソ連貿易次官に次の質問に答えてもらった。

——一九八三年2月にモスクワで開かれたソ日貿易経済代表団会議で合意された取り決めの実施状況について…

モスクワ会議ではソ日間の貿易・経済関係の拡大の可能性が強調され、その発展に双方が関心をもっていることが確認された。次期会議は、東京で一九八四年4月に開くことに決まった。モスクワ会議で双方が出した意見を考慮して、すでに東京会議の準備が行われている。

現在、工業用チップの生産とその日本への輸出における協力についての第2次協定締結の条件に伴うさまざまな技術的問題に関して、話し合いが行われている。ウォストーチヌイ港の第2期建設工事の協力の問題についても、話し合いが続いている。

これらのプロジェクトのほか、モスクワ会議では一連の新しい大小プロジェクトの話が出たが、これらは将来、双方が互いに関心を示せば実施される可能性がある。

たとえば、化学、冶金、採炭部門における一連の大型プロジェクト、ソ連での可溶性パルプ生産工場の新設、食料品包装の箱用厚紙の生産の組織についての話し合いが日本の商社と行われている。

資本回収率の高い一連の小型プロジェクトも検討中だが、これらによって相殺と融資の問題の解決が容易になり、日本の相当数の中小企業がこれらのプロジェクトによる協力に参加できるだろう。

例としては、製材くずを固めて燃料にするための移動式および固定式装置、アスベスト加工設備、製茶用設備、泥炭、花崗岩の採取用設備などのソ連への輸出計画が挙げられる。

——ソ日・日ソ経済委員会の第9回合同会議開催の見通しは？

ソ日・日ソ経済委員会が一九六五年に設立されて以来、8回の合同会議が開かれた。

両委員会が設立されたのは、シベリア・極東の天然資源開発における経済協力の問題に取り組むだけではない。両国の実業界の相互理解の強化、経済関係、貿易、科学技術協力の拡大の促進においても、重要な役割を果たさなくてはならない。ソ日間の経済協力と貿易に関するどんな問題も審議することができる。

このような会議の意義を双方は理解しているのだから、会議が今後長いこと中断され続けるとは思えない。次期合同会議は双方が合意した時期に開かれよう。

——ソ日貿易関係発展の見通しについて……

一九八二年のソ日貿易高は、約五〇億ドルだった。

ソ日貿易の発展の潜在的な可能性は、十分生かされているとはとても言えないと思う。

両国の大きい経済力、相互補完性をもつ外国貿易の構造、ソ連極東地域と日本との地理的な近さ——これらが、互恵貿易の発展の条件をつくり出している要因だ。

ソ連では、日本との貿易を禁止していないし、何の制限もしていない。われわれは、何の差別もない、長期ベースの安定した互恵貿易をめざしている。

周知のとおり、ソ日貿易はソ連側の大幅な入超になっている。ソ連側の考えでは、このアンバランスの問題は日本の輸出の削減によってではなく、貿易高を増やして長期的にバランスをはかることによって解決すべきだ。

指摘しておくが、日本側はモスクワでの会談で、締結された協定によってソ連から一連の商品を輸入する長期的義務を確認した。たとえば第3次森林資源開発プロジェクトでは、日本は一九八一−八六年に用材を一二〇〇万立方m、製材を一二四万立方m輸入することになっている。また南ヤクート原料炭開発プロジェクトでは、日本の商社は20年間に一億四〇〇〇万tの原料炭を輸入する。

これらを考慮すれば、ソ日貿易・経済関係は今後発展する見通しがある、と考えてよい。相互の希望があれば、双方は既存の可能性を実現させ、互恵の貿易関係と経済協力を発展させ、強化していく上で肯定的な成果を達成することができる。

もちろんこの場合には、ソ日貿易・経済関係の人為的な〝政治化〟や存在しない問題への結び付けを除く必要がある。貿易におけるいかなる差別の試みも、排除されるべきだ。

☆　☆　☆

話題を拾う

クリミアの自然保護区

ソ連全国には北極地方から亜熱帯地方までのさまざまな気候帯に位置する一五〇の国立自然保護区があり、その総面積は三〇〇万ha余りに及ぶ。

クリミア（黒海とアゾフ海に囲まれた半島）には三つの自然保護区がある。そのうち最大規模を誇るのは一九五七年に出来た国立クリミア自然保護・狩猟区で、一九二三年に設置されたクリミア自然保護区が母体。総面積は約四万三〇〇〇haで、そのうち半分以上は森林が占め、1/3は川や湖。このほか山地や草原も自然保護区に入っている。

保護区内には約一一〇〇種の植物が見られ、36種の哺乳類が生息し、アカシカのクリミア亜種（写真）もいる。





86歳の音楽家の収集品

独学の音楽家イワン・チャロフ(写真)はもう75年もアコーデオンを収集している。コレクションの中には数台で一つのカバンにすっぽり収まるものもあるし、一番小さいマッチ箱ほどのものは財布の中に入ってしまう。

はじめチャロフは自分のコレクションを人に見せたり、ごく親しい友人にアコーデオンを演奏して見た。しかしアーチストになろうとはしなかった。レニングラード市の製靴合同「スコロホード」の仕上げ工として働いていたが、ある時、アマチュア芸能大会に出演して、喝采を浴びてからチャロフは定期的にステージに立つようになった。

現在チャロフは86歳。年金生活に入ってからもう25年以上になる。

友情のゴンドラ

ベニスから72歳の船大工ジョバンニ・ジュコニさんがゴンドラ建造のために姉妹都市タリン（バルト海沿岸にあるエストニア共和国の首都）へやってきた。ピリタの五輪ヨット・センターの造船台で、彼は12日間、若い弟子たちとゴンドラ造りに精出した。

タリンのベニス・デーに出席のため公式代表団の一員としてタリンを訪れたエリオネラ・フィンツイ・ベニス副市長は次のように語った。

「ベニス以外の土地でベニスのゴンドラが造られたことはまだ一度もありません。しかし、この伝統が破られたことを私たちは喜んでいます。姉妹都市デーは毎年祝われます。このゴンドラが私たちの友情のシンボルとなりますように」

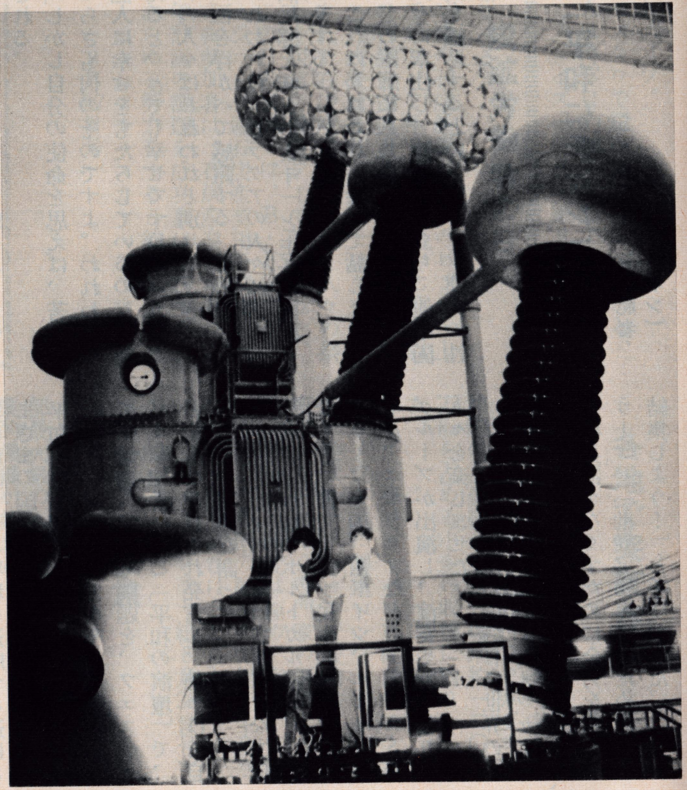
完成したゴンドラで最初に一周したのはジュコニさん自身だった。「こんなじいさんがソ連に招かれたのも、両市の友好のおかげだ。いまはとても幸せです」とジュコニさんはにっこり。



新ケーブルの製品テスト

ケーブル工業研究所高圧実験室は、国内の各種企業・機関の注文に応じて開発されたケーブルの機械的耐久性、耐寒性、耐熱性、極限条件を含めたさまざまな場合の絶縁の信頼性などをテストしている。大きな弾力性と耐久性が要求される電線は、何万回も伸ばしたり縮められたりする。送電線用のケーブルは、実際の送電電圧の数倍もの高い電圧をかけられる。

高圧実験室には何百万ボルトもの電圧で電流を流すユニークな設備がある。写真はケーブルの実験を準備するスタッフ。



ノーボスチ通信特派員報告

軍用機1機か八万店の薬局か

E・ボフクン記者（エッセン）

先ごろ西ドイツのエッセンで行われた反戦デモのとき、私は一風変わったプラカードを目にした。新型戦車「レオパルト」（ひょう）を型どった二台の装甲の怪物が、学校の壁を突き破って、ぎゅうぎゅう詰めの教室に突入している絵で、ひょうの毛皮に似せるために装甲は黄色に塗られ、黒い斑点がつけられていた。絵の下に「レオパルトII型戦車2台分で24教室の学校が建てられる」と書いてあって、西ドイツの軍国主義の反社会的本質をよく人々に訴えていた。

英・伊・西独3国が共同で製造している多用途機「トーナード」1機分で八万店の薬局、八〇〇戸の家賃の安い住宅または44の青年センターが建てられ、野戦榴弾砲1門分で子供の遊び場が40つくられる。最新型の戦車1台分で第三世界諸国の八〇〇万の人々に毎日1フント（約四一〇グラム）の米を供給できる。しかし西ドイツの軍需コンツェルンはどんどん新しい兵器を製造し続けており、兵器製造費をひねり出すために毎年政府は、予算から社会関係費を削っている。かつてゲーリングは「バターよりも大砲を」要求したが、いま西ドイツの経営者は「学校よりも戦車を」要求しているのである。

ニカラグアの病院で働くソ連の医師

I・ペトゥシコフ記者（マナグア）

ニカラグアのマナグア国際空港で、ニカラグア北部に1年前設立されたソ連の病院の主任医をしているユーリー・ニコラエビチ・キサレフに出会った。ぜひ病院を見にきてほしいと言われた。彼はソ連から送られてきた薬品を受け取りに来たのだ。

そして私は病院にやってきた。病院の名は「ソ連・ニカラグア友好病院」。門のところで武装した守衛に名を名のり、用件を言ってやっと通してもらう。なにせ毎日のように武装〝ゲリラ〟が国境を侵して国内深く潜入し、謀略活動をやっているのだから、厳しい警備も止むをえない。〝ゲリラ〟は学校や病院を焼き、教師や医師を殺しているのだ。

まだ時間が早いというのに、外来の受付には行列ができていた。

「一日の患者受付数は約三〇〇人で、それ以上のこともよくある。ニカラグアの方々からやってきますからね」と主任医は言う。

入院患者もいる。ことしの1－4月中だけで外来担当医は大きい手術を三六八回、小手術を一二九六回やったそうだ。

病院勤務者の苦労は大きい。病室に寝泊まりしているが、日中は45－48度Cの気温のうえ、夜は蚊やぶよに悩まされる。

「しかし自分の使命を思えば、苦労やつらさも何のそのですよ。われわれは他人に幸せをもたらしているのだと考えると、とても幸せですね。ニカラグアの人々はわれわれと別れるとき、目に涙を浮かべて感謝する。そんなときわれわれはニカラグアの人々に劣らぬ満足感を味わいます」と主任医はにっこりする。

これはわれわれが会って話したソ連のどの医師にも共通した意見であった。人々に奉仕し、社会に役立ち、他の国民を援助するというのが、ソ連人の性格である。

「平和にチャンスを！」

S・サモイレンコ記者（リスボン）

ポルトガルで先ごろ「平和にチャンスを！」というスローガンを掲げた青年フェスティバルが行われた。ポルトガルの社会・政治生活における一大イベントだったこのフェスティバルには、ポルトガル全土から五〇〇〇人以上と世界の多くの国の平和運動家約四〇〇人が参加し、ともに手を組んで恒久平和の確立、軍拡競争・新兵器開発反対、人類を破局に追いやる危険のある保有兵器の漸次削減と廃棄のためにたたかうと強く訴えた。

1週間のフェスティバルの期間中に青年平和活動家たちは、「核戦争は現実の危険」、「平和を達成する道はさまざまの国の経験」、「ポルトガルの平和・反核闘争」などの緊要テーマを討議した。ポルトガルやその他の国の青年が抱えている問題を、フェスティバル参加者に語る「平和の演壇」で、希望者はそれぞれ発言し、熱っぽく自分たちの問題を語った。

フェスティバルではさまざまな文化行事が行われ、ポルトガル国内だけでなく、ソ連、ドイツ民主共和国、ハンガリー、米国、西ドイツ、エルサルバドル、ニカラグアなどのアーチストやグループが出演し、演奏や歌、踊りで人々を楽しませた。

フェスティバルの最終日に世界のすべての誠実な人々にあてたメッセージが採択され、「平和にチャンスを！」、「核兵器をなくすために全力を尽くそう！」、「世界平和を守るために力を結集しよう！」と呼びかけた。

ソ連の新聞記事から

（一九八三年８月後半）

地球の平和を守ろう！

核破滅の脅威を未然に防ぎ、地球の平和を守ろうという熱烈なアピールが昨日（8月23日）、レニングラードのピスカリョフ・メモリアル墓地の反戦集会で響き渡った。この集会（第2回日ソ不戦の誓い）は、レニングラードと日本の社会団体の代表が同墓地で開いたもの。

集会では「ズベズダー」合同の旋盤工で社会主義労働英雄のE・A・アルテミエフ、瀬谷英行・日ソ親善協会事務局長、ソ連参戦軍人委員会レニングラード支部長でソ連英雄のD・A・メドベージェフその他が発言に立ち、レニングラード封鎖や広島・長崎の原爆投下の犠牲者は、生きている者に、新たな世界戦争を防ぐために全力を尽くすよう呼びかけている、と語った。

集会参加者は、軍拡競争の抑制と諸国民の平和と安全の事業の強化をめざすソ連の平和的イニシアチブを支持すると表明した。

（トルード紙8月24日号）

サハリンからブレストまで

「〝戦争〟という言葉をソ連人は憎悪する。モスクワまで三万五〇〇〇kmを走破したいまわれわれは、いたる所でそうだったように、目的地ブレストでも、核戦争の脅威を取り除くためにがんばっているソ連の平和の闘士が大勢いることを確信しています」——アレクサンドロフスク・サハリンスキーの教師で単独ラリー〝平和83〟の隊長ユーリー・パナセンコはこう語った。

ユーリーと2人の仲間——運転手ワレンチン・プロトニコフと医師アレクサンドル・ゴルロフはソ連全土で展開されている平和運動と国連が宣言した世界軍縮キャンペーンに個人的に貢献しようと決心した。そこで休暇を常にないやり方で過ごそうということになった。地球の平和を守ろうというソ連人の決意を述べた国連本部あての手紙を携えて、途中全国の人々の署名を集めながら、サハリン＝ブレスト間を車で走破することにしたのである。

「現在、国連本部あての手紙には何千もの署名が集まっています。予定のコースを完走すればもちろん、署名はもっと多くなるでしょう。どこでも温かく迎えられ、親切にされました。パブロダル州のある村では年配のご婦人に息子のように迎えられました。その方は戦争で4人の息子さんを亡くされたそうです」と語るのはワレンチン・プロトニコフ。

モスクワで短い休養をとったあと、3人は再び目的地めざして出発する。

（イズベスチヤ紙8月28日号）



（A・ボロシン作）

炭鉱労働者の日

ソ連の石炭産業は作業のピッチを上げており、2年6カ月間で一七億t以上の石炭を採掘した。

この成果は8月26日、モスクワで開催された石炭産業部門で働く人々の祭典——炭鉱労働者デーで報告された。

この日の式典では、B・F・ブラトチェンコ・ソ連石炭産業相が講演した。式典参加者は、石炭産業従事者は5カ年計画の課題を成功裏に遂行するためあらゆる努力をすると約束した。

（コムソモリスカヤ・プラウダ紙8月27日号）

各地で突貫作業

アルマアタ発。カザフスタンの北部各州は取り入れ作業のピーク時を迎えた。機械作業員は至る所で、カザフ共和国の主要穀倉地帯の農地約一二〇〇万haを占める小麦の収穫に取りかかった。

ペルミ発。グーバハに建設中の大規模なメタノール製造コンプレクスの窒素・酸素ステーションで最初の工業用窒素が得られた。専門家の評価によるとこの窒素の純度は極めて高く、ソ連はもとより外国の同種の工場で生産されている製品にひけをとらない。

（イズベスチヤ紙8月28日号）

サケの船旅

ゼヤ貯水池（アムール州）はソ連東部最大級の人造湖。まもなくここで商業的漁獲が始まる。

太平洋漁業・海洋学研究所アムール支部の専門家の計算によれば、ゼヤ貯水池には数千tのパイク、フナ、ネリマ（サケ・マスの一種）が成育している。これらの魚はアムール流域からここへ移されて順化したもの。

極東の魚類学者たちはサケ・マスの群れを増やす興味深い実験を行った。学者たちは、養魚場がアムール川へ放流する稚魚のうちの膨大な量が、他の動物に捕食されたり、河口の温度が低いために、海まで到達できないことを突きとめた。そこでサケの稚魚を特別に設計された船でアムール川の入り江まで運ぶことになった。稚魚たちはこの〝船旅〟を無事乗り切った。

（イズベスチヤ紙8月26日号）

日本の読者向けにソ連の民話シリーズ



モスクワのラードガ出版所でネズナノフ所長（左端）らと会談する伊集院・新読書社社長

翻訳物を専門に出しているソ連のラードガ出版所は、昨年日本語の民話集を2点――『火の鳥』と『つぼのおうち』（訳者＝伊集院俊隆、松谷さやか、坂本市郎、馬場朝子）を出版した。日本の読者はこれらの民話を通じて、ロシア人の詩的芸術の美しさを知った。民話は民衆の生活を鮮やかにくっきりと示し、人の心の中を開いて見せ、幸せを求める民衆の夢を描いている。

これらの本は日本で好評を受け、ロシア民話のすばらしい世界をこれからも知りたいとの希望が寄せられた。

さる7月、日本の出版社、新読書社の伊集院俊隆社長は、ビクトル・ネズナノフ・ラードガ出版所長、ユーリー・プラソロフ「ソブインクニーガ」公団副総裁と会談した。この会談にはラードガ出版所のナタリア・プレハノワ極東課長、ボリス・アリモフ主任美術家、ロベルト・バブロヤン児童文学編集長も出席した。

この席で、ラードガ出版所は新読書社の注文により来年中に「ソ連諸民族の民話」シリーズを日本語で出すことに合意した。5巻から成るこのシリーズには、ロシア、ウクライナ、ベロルシア、モルダビア、沿バルト海地方、ザカフカズ地方、中央アジア諸民族の民話が入る。装丁はソ連のすべての共和国の美術家が担当する。

ネズナノフ・ラードガ出版所長は「われわれは多くの国の出版所と協力している。新読書社との交流は文化交流や相互理解の改善に役立とう」と語った。

ラードガ出版所の日本語近刊図書

ラードガ出版所は文芸学、芸術学、言語学の本も出版しているが、近く日本語で『今日のチェーホフ』と『今日のトルストイ』を出版する。この論文集はチェーホフとトルストイの多くのファンに注目されよう。筆者はソ連の有名な文芸評論家や文化人であり、写真が沢山のる。『今日のトルストイ』の日本の読者へのメッセージはトルストイのひい孫に当たるN・トルストイが書いている。

ソ連の大作曲家ドミトリー・ショスタコービチ（一九〇六―一九七五）の作品は、世界によく知られている。ショスタコービチの人となり、彼の作品の構想のきっかけ、芸術・文学の巨匠たちのショスタコービチに関する意見は、ラードガ出版所から日本語で出る『ドミトリー・ショスタコービチ』で紹介される。

21万kmのガスパイプライン

本誌経済評論員　レオニード・コレネフ

ソ連の鋼管生産高は世界一で、年産約一八〇〇万t。米国と西独を合わせた量よりもずっと多い。同時にソ連は世界市場での鋼管の主要輸入国でもある。

ではどうしてこんなに大量の鋼管が必要なのか？ 答えは一つ、パイプライン建設のためである。パイプライン輸送は歴史は浅いが、最も有望な輸送部門で、ソ連はその発展に力こぶを入れている。

ソ連では毎日約九〇〇〇万tのさまざまな貨物が輸送されている。20年前、ソ連の貨物輸送に占めるパイプライン輸送の割合は3％余りだったが、今日では約30％である。このようにパイプラインはソ連の輸送の最もダイナミックな部門である。そのほかパイプラインによる貨物の輸送は経済性の点で鉄道の1/2－1/3であり、また、自動車輸送、航空運輸、水運と異なり、パイプラインは天候条件に左右されない。それは、ソ連のような厳しい気象条件のところでは決定的な要因である。

しかし現代のパイプラインはとても金のかかる構造物である。たとえばシベリアからソ連欧州部へのガスパイプラインは、一〇〇〇km当たり約一五億ルーブル（1ルーブル＝約三三〇円）かかっている。

しかし天然ガスの場合、事実上パイプラインでしか輸送できないから、パイプラインの果たす役割は大きい。ソ連の天然ガス採掘の急激な伸びこそが、パイプラインの建設を促進したと言える。パイプラインの総延長二一万kmのうち、一四万km以上がガスパイプラインである。

一九五〇年のソ連のガスパイプラインによるガス供給量はわずか一五億立方m（約一五〇万tの石油に当たる）だったが、一九七〇年には一八一〇億立方m、一九八一年には四一九〇億立方mに達した。一九八五年には六〇〇〇億立方m以上のガスが採掘されよう。

ガスは国民経済でますます重要な地位を占めている。ソ連ではガスを使って鉄鋼全体の93％が精錬され、セメントの約2/3が生産され、窒素肥料の90％がガスからつくられている。また二億人以上が日常生活で天然ガスを使っている。

ソ連の単一ガス供給系統は15の連邦構成共和国全部にまたがっている。それには一九〇のガス田、多数の精製企業、地下タンクのほか、関連施設と連係した、発達した幹線パイプライン網が含まれる。そのネットワークの輸送能力、エネルギー装備率はともに世界一である。

八〇年代にガスパイプライン系統の延長はさらに約四万km延びる。大口径管（一四二〇mm）の大陸横断ガスパイプラインはとくに大幅に延びよう（75気圧のこのようなパイプライン1本で一九八〇年にフランス、西独が採掘したガスを合わせたよりも多くのガスを輸送できる）。

ソ連の大口径ガスパイプライン建設の経験は豊富で、口径一〇二〇mm、一二二〇mmの鋼管を世界で初めて使ったし、一九六〇年代末からは一四二〇mmのものも使い始めた。このようなクラスの幹線パイプラインが外国で使われたのは、ソ連よりもずっと後のことだ。

アレクセイ・ソロキン石油ガス工業企業建設次官が指摘しているように、ソ連では全く新しい建設技術、新しい作業のやり方が開発され、大口径ガスパイプライン敷設用機械・装置のコンプレクスがつくられた。

アレクセイ・ソロキン次官は語る。「作業の機械化率は99・7％に達している。すなわち手労働の割合は最小限である。これによってわれわれは工場で工作機械や自動車を生産するのと同じようなリズムでパイプラインを建設することができる」

ソ連のガス試掘鉱量は、一九八一年の資料によれば三四兆立方mに達しており（そのうち西シベリアは二七兆立方m）、米国またはイランのような大ガス産出国の埋蔵量の2倍以上である。八〇年代にソ連の主要なガス採掘基地になる西シベリア北方のウレンゴイ・ガス田の鉱量だけでも、メキシコ、アルジェリア、カナダ、オランダ、英国の天然ガス鉱量の合計を上回っている。このガス田から総延長二万kmの6本のガスパイプラインが現行5カ年計画期中に敷設されるが、その中には完成した延長四四五一kmの輸出用ガスパイプライン――ウレンゴイ＝ウジゴロド線が含まれている。

ソ連はガスの内需を満たすとともに、数十年にわたってガスを大量に輸出することができる。ガスの輸出総量は総採取量の13－14％以下であり、ソ連のガス産業の潜在能力を如実に物語っている。

弱視児のための幼稚園

本誌記者
アリアドナ・ニコレンコ
カメラ
V・フェドレンコ



この幼稚園の訓練には、面白くて夢中にさせる遊びの要素が盛り込まれている。こうした輪投げも子供たちの視力を向上させる。

その幼稚園は、私の住む団地や娘の学ぶ中学校の隣にあり、私はよくその前を通る。見たところ、普通の幼稚園と変わらず、庭では子供たちの元気な歓声が響いている……

ところが最近、娘が人形の服を縫っていて、これは隣の幼稚園への応援として彼女のクラスで園児の教材用人形を作っているのだと真剣な顔で私に説明した。彼女はおまけに、〝教材用〟という単語の意味まで説明してくれた。それによると、これはたんなるおもちゃの人形ではなく、教科書として使われる人形で、それというのも隣の幼稚園は視力の弱い子供たちが通う幼稚園だから、というのだった。

「ええ、この第一二三一幼稚園は、専門幼稚園です。医師の指示を受けた弱視と斜視の子供たちが通っています」と、園長のナジェジダ・モロトクは語った。

私はさっそく質問を始めた。

「どういうものを弱視といい、弱視と斜視はどんな関係があるのですか？」

「それについては、私たちの専門家のほうが詳しいですから」と、園長は担当者を呼んでくれた。

なぜ専門の幼稚園が？

専門家の説明はこうだった。斜視は広く信じられている通説とは違い、美容上の欠陥ではなく、深刻な病気である。斜視といってもさまざまな症状があり、片目だけの斜視と両眼の斜視、両眼が交互に斜視になるものがあるし、恒常的なものと周期的なもの、内斜視、外斜視などいろいろなケースがある。そしてふつう、斜視は弱視とつながっている。視力が0・7以下だと弱視とされる。

治療についてのすべての問題を決定できるのは医師だけである。だから、子供を常時観察できる施設に入れれば、当然ながら、はるかに容易に特別の眼科的研究を行い、段階的な治療を徐々に進めていくことができる。これは長期的な仕事で、医師だけでなく、教育者の参加も必要だ。というわけで最適の施設は、心理的に圧迫感を与える病院ではなく、専門の幼稚園だということになる。

モスクワにはこの種の幼稚園が幾つかあり、3歳未満の子供を預かる同様の専門保育もある。斜視の治療には眼科病院、眼科サナトリウム、医学相談

スポーツ訓練も弱視児たちの能力に合わせたこの幼稚園独特のもの。





音楽はここでは子供たちの情操教育のほか、調整のとれた動作を身に付けさせるためにも利用されている。

・診療所も取り組んでいる。専門治療機関がこれほどあるというのは、この病気の子供がかなりいるためである。斜視に苦しむ子供は約2%いる。

入園の"資格"

現在、この幼稚園には3歳から7歳までの子供が一〇〇人いるが、全員気質も性格も違うし、視力の程度とこれに影響される発達の水準もさまざまである。

この幼稚園に入るまでのプロセスはどの園児も同じで、視力検査がきっかけになっている。すべての子供は生後1年以内に区の児童診療所で他の義務的な検診とともに、目の機能検査を受ける。遠視、近視、乱視、斜視はここで発見される。

この検査でそれが先天性のものだとわかれば、その子供は児童視力保護診療室（モスクワには18ある）の観察下に置かれる。そしてその子供たちの何人かが、診療室の医師の指示を受け、満3歳になると専門幼稚園に入る。

大抵の両親はこの措置に進んで同意する。経費は月額20ルーブル。この費用は普通の幼稚園（月額12ルーブル）より多少高いが、週6日寄宿制で子供を預かり、治療費も含まれることを考えれば、非常に安い。

幼稚園では何をするか？

この幼稚園には技術職員（調理師2人、掃除婦2人、夜間ヘルパー10人、昼間ヘルパー10人）のほかに、小児科医、言語障害治療医、眼科医各1人、看護婦4人（小児科看護婦1人、視能訓練看護婦3人）、幼児教育専門家、弱視児教育専門家各1人、保母10人、音楽担当者1人がいる。

私はこの種の幼稚園にしかいない専門家の何人かと話してみた。

言語障害治療医のリンマ・ヘイフェツはこの幼稚園で6年働いている。普通の幼稚園には言語障害治療医はいない。なぜ弱視の子供の幼稚園に言語障害治療医が必要なのだろうか？

それは、視力の低い子供には言葉の障害もしばしば起こるためだ。知っている単語の数、会話の文法に遅れが見られる。言語障害治療医との規則正しい個人的な訓練は、特に効果がある。

眼科医のエレーナ・プラクシナとベテランの視能訓練看護婦ニーナ・リャキナは、視力の向上法と斜視の治療法について語ってくれた。治療法は、最も簡単な、片目ずつ交互にふさぐ訓練や眼鏡をかけることから、特別な装置による治療に至るまで極めて範囲が広い。ほとんどの治療装置にはゲームや娯楽の要素が盛り込まれている。

こうした訓練により、ここでは95%の子供が視力を向上させ、85%の子供が斜視を治している。

医師たちの話では、斜視は5歳まで矯正治療が行われる。もしこの時期までに視力が回復し、斜視が残っている場合には、斜視を取り除く手術を行う。視力が回復しない場合には、手術は純粋に美容整形的なものになり、学校に入る子供を心理的な負担から解放するものとなる。

私が最後に話したのは弱視児教育専門家のマリア・ブイチコワ。

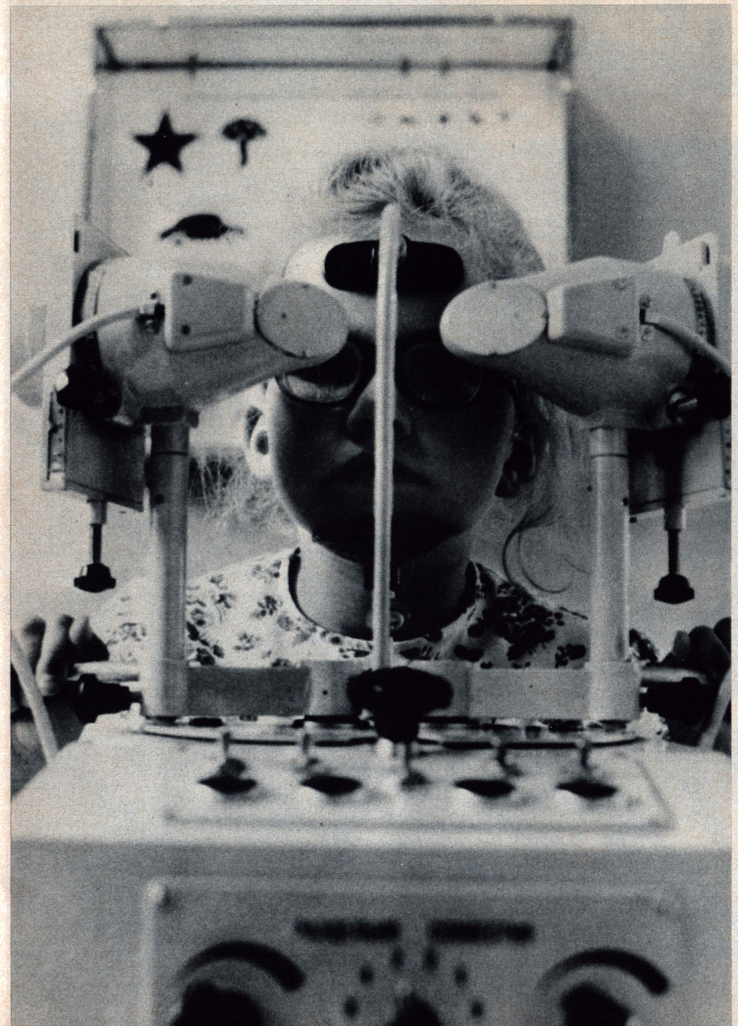
弱視児教育学は若い学問である。一般に弱視児の指導法はまだ余り研究が進んでいない。参考書、出版物も少ないため、教師はさまざまな模索をしたり、自分で工夫しなければならない。

マリア・ブイチコワは、かなり重症（視力が0・4以下）の子供12人のグループを指導している。0・4以上の視力の子供はブイチコワの助言や指導のもとに保母が訓練をする。訓練は一対一か、症状と発達水準が近い場合には2人の子供を一組として行う。

私はそんな訓練の一つを見せてもらった。スベータ・ムイムリナ、3歳。彼女が入園した時の視力はかなり悪く、右目は0・1、左目は0・08だった。斜視の角度は60%。これはみな出産時の外傷の後遺症である。

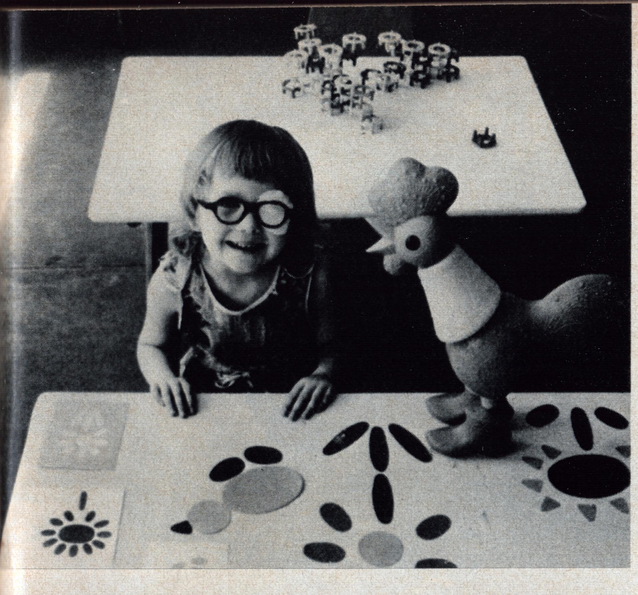
ブイチコワは彼女には特に注意深く接している。特別に色と図形の種類を単純にした世界の中へ、やさしく、そっと少女を導いてゆく。最初は色を選ぶゲーム。例えば、さまざまな色の物を並べて、先生が色の名を挙げ、それを少女に選ばせる。しばらくは色の名前だけを答えさせ、その色をした物の名前は言わせない。そのあとゲームにちょっとした違いが出てくる。先生は色の名前を言わず、例えば青色の物を示し、少女に同じ色の物を見つけさせる。色は最も簡単なものを使う。例え

弱視治療室ではいろいろな装置を使った個人治療も行われている。





◀弱視の子供の多くは正しく鉛筆を持つこともできない。訓練には必ず絵を描く練習が入っている。



最も簡単な視力向上法は、片目ずつ目をふさぐ方法と眼鏡の着用。

ば、赤黒いとか、オレンジ色とかいった色はあと回しにする。色の濃度を比較したり、いちばん濃いものを選んだりする訓練もあと回しにされる。

その次に四角、丸などの図形、大きい、小さい、多い、少ないなどの概念が導入される。

そして最後に物そのものの概念が教えられる。例えば大きくて、丸くて、赤黒いお茶わん、小さくて、浅くて、緑色のお皿、といったように。

これが5カ月前の、スベータが入園したばかりの時だったら、「知らない、分からない、できない」と答えるだけだっただろう。だが今は違う。質問に答え、物を見分ける。視力は片方0・3、もう片方は0・4まで向上した。

スベータはあと4年、幼稚園生活を送るが、もし視力が十分に回復しない場合には、弱視児童のための学校に入ることになる。しかし、ここの教師たちには、スベータを普通の学校に進ませる自信が十分ある。そのためには視力を高め、言葉を発達させ、普通の学校でやっていけるように周囲の世界に十分慣れさせなければならない。

これほどの重症児にたいして教師たちが楽観的な見通しを持っている理由は、この幼稚園全体の統計にある。それは、この幼稚園ができてから現在までの11年間に、ここから弱視児童のための学校に入学した子供はわずか一人しかいないという数字である。

治療室を見学し、仕事熱心で経験豊かな専門家たちの話を聞いたあと、園内を見せてもらった。そこには治療機関というよりも、にぎやかで快活な児童施設としての生活があった。そこで行われているのは訓練ではなく、特殊な傾向はあるものの、面白くて楽しい遊戯だった。音楽が鳴りひびき、子供たちが民話をお話しする練習をしている。あるグループでは保母がちょっと目を放したすきに、二人の男の子が夢中で取っ組み合いをしていた……



この幼稚園も、子供らしい楽しい生活に満ちている。楽しみはいっぱいあるが、人形劇は園児たちがいちばん喜ぶものの一つ。



園児のほとんどが眼鏡をかけているが、まったく気にしない。「さかさになっても、ほら落ちないよ…」

А Б В

NHKテレビ ロシア語講座から（10月前半）

テレビでロシア語を学ぼう！

この欄では、ＮＨＫ教育テレビ・ロシア語講座のご協力を得て、同講座のテキストから主な表現や単語その他を紹介させていただきます。ロシア語の単語や文には原則として発音のカナ表記をしませんので、是非テレビの放送で実際の発音に親しんで下さい。

（10月１、３日）

日本拝見 (3) スヴェトラーナの東京日記

日本が大好きなスヴェトラーナさん２度目の滞日もすでに半年たって、落ち着いて毎日を過ごすこのごろです。そこで今回は、スヴェトラーナさんの東京生活のようすの一端をご紹介しましょう。

生活の中心はなんといってもテレビ・ロシア語講座の仕事です。毎週月曜日は午後１時から打ち合わせ。ローザさんや宇多先生、生徒役の義和・絵美の皆さんといっしょに打ち合わせや本読みをいたします。引き続き火曜日はビデオどり当日。午後３時きっかりにスタジオ入りしたスヴェトラーナさんは、さっそく入念なメーキャップです。やがて立ちげいことтракт（カメラリハーサル）をへて、запись（録画）へ……

（10月５、６日）

文法メモ　名詞の性

父母とか、男子学生、女子学生のように、自然の性別が表れる名詞だけでなく、ロシア語の名詞にはすべて**文法上の性**がある。ポケットも、自動車も、湖も、男、女、中性のどれかなのである。もちろん、意味上理屈の通る説明があるはずもなく、形式の問題である。名詞の性は次のように分類される。

1. 自然性のあるものは、文法上の性もそれに従う（そりゃそうだ。「パパ」が女性名詞では困る）。
2. その他のものは単語の末尾で見分ける。（詳しくは放送で）。

きょうの単語

①мóре　海　②горá　山
③рекá　川　④óзеро　湖
⑤пóле　畑、野原　⑥степь　草原

（10月８、10日）

きょうの表現

Раз, два, три!
いち、に、さん！

⊙物の数をかぞえるときや、号令をかけるときにこう言う。

きょうの単語

①оди́н　1　②два　2　③три　3
④четы́ре　4　⑤пять　5　⑥шесть　6
⑦семь　7　⑧вóсемь　8　⑨дéвять　9
⑩дéсять　10

（10月12、13日）

きょうの表現

Скóлько врéмени?
今、何時？

⊙скóлько は「幾つ」「どれだけ」。数量を尋ねる疑問詞。なお、ここには「今」を表す単語はない。
⊙скóлько のあとの名詞は、生格という形に変る。врéмени は врéмя（時）の生格。

きょうの単語

①часы́　時計　②очки́　めがね
③зóлото　金　④серебрó　銀
⑤фотоаппарáт　カメラ　⑥плёнка　フィルム

（10月15、17日）

きょうの表現

Какóй сегóдня день?
きょうは何曜日？

⊙какóй は「どんな」。一般に物（人）の性質を尋ねる疑問詞。
⊙сегóдня「きょう」。この語の г は〔в〕と発音される。
⊙день「日」。ここでは曜日を指している（日付ではない）。

きょうの単語

①крáсный　赤い　②бéлый　白い
③чёрный　黒い　④си́ний　青い
⑤зелёный　緑の　⑥золотóй　金色の

文字・発音コーナー

力点（アクセント）

ロシア語の単語には必ず１か所、特に強く、はっきり、長目に発音される母音がある。これをその単語の力点という。単語はその力点を勢いの山として一息に発音される。力点がわからなければ、単語の発音はできない。力点を示したい場合は ´ を使う。なお、ё には必ず力点がある。
пожáлуйста, семья́, отéц, вы́ставка, спаси́бо, больнóй, перекрёсток, у́лица, Ю́рий

ＮＨＫテレビ・ロシア語講座のテキストは、最寄りの書店でお求め下さい。書店にない場合は、日本放送出版協会（郵便番号150 東京都渋谷区宇田川町41―１、電話03・464・7311）へお問い合わせ下さい。

今日のソ連邦
一九八三年10月1日号
昭和五十四年六月二日第三種郵便物認可　発行人　加藤宣幸
編集　ソ連大使館広報部（郵便番号141・東京都品川区東五反田3－9－13・電話03－447・3536）
定価　一五〇円
（購読料は会費に含まれる）



50mℓ×1瓶